

カルマ・チャクメーの阿弥陀仏信仰と選択

—『山法・独居修行の教誡』より第42章「国土の選択・財宝を受けとる船主」試訳—

藤 仲 孝 司

序 文

インドと同じくチベットの大乘仏教では、独立した宗派としてのいわゆる「浄土教」は成立しなかった。密教での「本尊瑜伽」を行う成就法文献を除くなら、特定の仏教者が他の仏菩薩すべてをさしおき阿弥陀仏のみを信仰するという事例も見られない。しかし、個人にとっての死と後生という問題の重要性に応じて、浄土への往生、その教主阿弥陀仏への信仰が特に重要視され強調されてきた。

インド後期大乘仏教を引き継いだチベットでは、密教の影響力が常に大きかったが、阿弥陀仏の信仰と実践において密教に重点を置かず〈無量寿経〉〈阿弥陀経〉²⁾を中心とした典籍もいくつか著されてきた。その中でも最も重要であり、今日まで広く流布しているものは、ゲルク派の開祖ツォンカパ (Tsong kha pa Blo bzang grags pa, 1357-1419) の『最上国開門』(*bDe ba can gyi zhing du skye ba 'dzin pa'i smon lam Zhing*)

1) 背景として、チベットではすべての仏説を受容し実践する〈道次第〉の体系、顕密双修ないし密教重視の基調があることが考えられる。そして「浄土教」としての体系の確立や研究は見られないが、個々の仏教者による極楽往生の祈願文や、信者の要請を承けた成就法文献に、阿弥陀仏信仰は多く展開されている。それらの極楽往生の祈願文、成就法文献を集めたものが、[1994] *bDe smon phyogs bsgrigs* である。この書籍はかつてない多くの諸家の極楽願文を採集し、目録としての価値をも具えた重要なものである。しかし、残念ながらそれだけのものにすぎず、所収文献の内容分析はおろか、文献自体の書誌的情報、著者の情報は殆ど何も与えられていないし、誤植の多さも目につく。よって、読者は採録された一々個々の文献を版本・ペチャにまで遡って見直し、内容や文献系統を把握せざるをえない。

2) 密教の成就法文献で二つの〈無量寿経〉(*Tsha mdo*)を指示する場合、それは〈鼓音声ダラニ〉と〈宗要経〉というダラニ、真言をもった二つである。またチベットでは〈大宝積経〉第5品の〈無量寿経〉を指示して扱う事例として、ツォンカパ以前にサキヤ派のサギャパンディタ (Sa skya Pandita, 1182-1251) による『無量光の修習の義』(*sNang ba mtha' yas bsgom don*, cf. *The Complete Works of the Great Masters of the Sa Skya Sect of the Tibetan Buddhism*, Vol. 5, Na12,224a2-b5, cf. 梶濱 [2002] pp. 672-677) や、同経のみに基づく事例としてチョン派のトルボパ・シェーラプギェルツェン (Dol po pa Shes rab rgyal mtshan dPal bzang po, 1292-1361) による『極楽に生まれるための誓願』(*bDe ba can du skye ba 'dzin pa'i smon lam*, cf. *bDe smon phyogs bsgrigs*, stod, pp. 172-175) がある。cf. 藤仲, 中御門 [2004] p. 55 注 25

mchog sgo 'byed, cf. [ラサ版] 東北 No. 5275-69, [北京版] 大谷 No. 6071) と、カルマ・カギュ派のカルマ・チャクメー (Karma Chags med. 1613-1678)³⁾ の『清浄大楽国土誓願』 (*rNam dag bde chen zhing gi smon lam*, cf. *bDe smon phyogs bsgrigs stod*, pp. 217-232, [ラサ版] 東北 No. 7018)⁴⁾ である。

ジョンカパの『最上国開門』はほぼ全面的に〈無量寿経〉に基づいている。その読誦版はゲルク派の常用經典の一つにもなり、清代に漢訳もされた (cf. 大正 No. 935)。この『最上国開門』に基づいた著作として、同派ではパンチェン 1 世 (Pan chen Blo bzang chos kyi rgyal mtshan. 1567-1662) の『極楽国土に障害なく往く速疾道』 (*Bde ba can gyi zhing du thogs pa med par bgrod pa'i myur lam*, cf. [ラサ版] 東北 No. 5958) やチャンキヤ 1 世 (ICang skya Ngag dbang blo bzang chos ldan. 1642-1714) の『極楽国へ往く速疾道を明らかにする灯火』 (*bDe ba can gyi zhing du bgrod pa'i myur lam gsal bar byed pa'i sgron me*, cf. [北京版] 大谷 No. 6226) など、多くが存在する。さらに 18 世紀以降の無宗派運動 (Ris med)⁵⁾ の中で、ニンマ派のベルトゥル・リンポチエ (dPal sprul rin po che. 1808-1887) は、『最上国開門』やチャクメーの『清浄大楽国土誓願』をも講讀し、前者に対して注釈書、後者に対して科文を造った⁶⁾ ように、宗派を越えて幅広く受容された。

チャクメーの『清浄大楽国土誓願』⁷⁾ は、〈普賢行願讃〉の所説を代表とする礼拝・供養・懺悔・随喜・勧請・祈願・廻向までの七支供養を骨格として、そこに〈無量寿経〉〈阿弥陀経〉〈鼓音声陀羅尼〉〈悲華経〉の所説を盛った願文である。これには大きな註釈『清浄大楽国土誓願の注 一大楽国土に赴く賢れた階段一』 (*rNam dag bde chen zhing gi smon lam gyi 'grel bDe chen zhing du bgrod pa'i them skas bzang po*, cf. [ラサ

3) カルマ・チャクメー (Karma Chags med) は「カルマ派の無貪者」という意味である。梵語表記は「Rāgāśya」が一般的である。この表記について George N. Roerich [1953] p.549 は「Rā-ga-a-sya」とする。これに沿うと「sya」は主にヴェーダ文獻で使用される三人称代名詞の語幹とも考えられる (cf. [1899] Monier Williams, A Sanskrit-English Dictionary, p. 1273 「sya, pron. base of 3rd person, RV」)。ただしこの梵語表記は一定せず、例えば『山法・独居修行の教誡』ベチャ版冒頭の図像の下段には「Arāga」と載せられている (cf. 2a 「師であるカルマ・アラガに帰命する (na mo gu ru karma a rā ga ya)」)。また彼の伝記は、本稿でも使用した『山法・独居修行の教誡』ベチャ版の末尾に簡略なものが掲載されているが、これは信仰の立場が濃厚であって、客観的事実の記述は少なく、部外者には十分な情報が出しにくい。そこで、二次的な資料ではあるが、Tsering Lama Jampal Zangpo [1988] に英訳された伝記と、*Masters of Nyingma Lineage* [1995] の記述を参照した。

4) 略称すると *bDe smon* となり、*bDe ba can gyi smon lam* の略称と同じになってしまうが、ここでの *bde chen* (大楽) は密教の影響を受けた呼称に過ぎず、内容は全く西方の *bDe ba can* (極楽) が考えられている。大谷大学の三宅伸一郎先生のお話では、現在でもラサの書店ではこの二つの願文は非常に入手しやすいということである。

5) 山口 [1988] pp. 325-327

6) 梶濱 [2002] pp. 238-239

版』東北No. 7019), さらに近現代のラクラ・ソナムチュードップ (Blag bla bSod nams chos 'grub. 1862-1944) による注『清浄大楽国土誓願の復注 一解脱道を照らすもの (太陽) 一』(rNam dag bde chen zing gi smon lam gyi 'grel bshad Thar lam snang byed, cf. bDe smon phyogs bsgrigs, smad, pp. 1-317) も存在する。現在チャクメーの全集ないし著作集といったものは広く流布しておらず、我々もそれらを入手していないため充分なことは言えないが、彼はこの種の願文を好んで造ったようである。近頃我々が調査している bDe smon phyogs bsgrigs には、『チャクメーの極楽願文の略』(Chags med bDe smon bsodus pa) と題されたものが三種類掲載されており (cf. stod, pp. 232-240), それらは文字どおり『清浄大楽国土誓願』の短縮版として、全く類似した内容を示しているからである。

次に研究史に視点を移すと――チャクメーの『清浄大楽国土誓願』は1933年に宗川宗満により邦訳された (cf. 宗川 [1933])。河口慧海所蔵本による翻訳と記されている。ただしこれは本文の和訳のみであり、その構成や内容の詳細についての検討はなく、注釈類も参照されていない。また1978年にはPeter Schwiagerにより校訂研究が公刊された (cf. Peter Schwiager [1978])。これは索引、ドイツ語訳、著者チャクメーや彼の弟子ミギェル・ドルジェ (Mi 'gyur rdo rje. 1645-1667) 等の足跡、浄土教の一般的知識等にも触れ、専門的かつ啓蒙的な仕上がりとなっている。また小野田 [2000] は「聞名の利得 (mtshan thos pa'i phan yon)」等について『清浄大楽国土誓願』と『無量寿経』との関係を指摘している。

当初我々はチャクメーの『清浄大楽国土誓願』、並びにその注の研究を意図したが、[付録2]で指摘するような問題もあり、新しいラクラ・ソナムチュードップによる注 (cf. bDe smon phyogs bsgrigs, smad) のみでは充分ではないと考えたため、いまだ着手できていない。代わりに同じくチャクメーの著作『山法・独居修行の教誡』(Ri chos mtshams kyi zhal gdams) より第42章「国土選択・財宝を受けとる船主」(Zhing

7) この極楽願文とその註釈に関しては、[付録2]『清浄大楽国土の誓願の弁別釈・大楽国土へ往く善き階梯』(rNam dag bde chen zing gi smon lam gyi 'byed 'grel --bDe chen zing du bgrod pa'i them skas bzang po--、[ラサ版] 東北No. 7019 [1-82]) の科文をも参照。なお、チャクメーより約150年後に生まれたゲルク派のギェルケンポ・タクパギェルツェン (rGyal mkhan po Grags pa rgyal mtshan. 1762-1836) には『極楽国土の経 (bDe ba gyi zing gi mdo)』という著作がある (rGyal gzhi'i yig cha phyogs bsgrigs (天津古籍出版社) vol. 73 Ca. bde ba can la-4b, pp. 147-148)。そこに明記はないが、この著作はチャクメーの『清浄大楽国土の誓願』の本文を本著者が取捨選択して3~4割程度の分量に編集し、要点を読誦しやすい形にしたものである。取捨選択の特徴としては趣意要約の引用、同文の引用、一部表現変更の引用に大きくまとめられる。構成としては原文の前半と後半をおおむね受容した形となっており、題名からも伺われるように比較的極楽国土に関する記述を中心に行っている。他宗派においてこのような著作が造られたことから逆にチャクメーの極楽願文の流行が推測できる。

*kham*s 'dam pa Ded dpon nor len) の訳注を行うことにした。この本を選択した理由は、ベチャの形でこの著作全体と、この第42章のみを掲載した *bDe smon phyogs bsgrigs* 版の両方が入手できたこと、内容や素材が『清浄大楽国土誓願』と共通しているので、読解が幾分容易であったことである。

むしろそこには困難がある。彼の所属したカルマ派は、カギュの一派として本来、新訳密敎の修行を中心とするが、同時にニンマの法にも深く関わっており、さらに「埋蔵経 (gTer ma)」や「虚空／天空の法 (gNam chos)」といわれる仮託の典籍を次々と発見あるいは創作している状態であったから、そこに言及されている諸々の典籍は、現在未研究だけでなく存在自体が不詳なものがいくつもある。このような埋蔵経の発見、それによる権威づけ、予言などは、仏敎後伝期 11 世紀以降、盛んであったが、それらの系統も錯綜しているし⁸⁾、我々の研究もニンマ、カギュの法の詳細には及び難いというのが実情である。しかし、同時にチャクメー自身は時にケードゥブ・チェンポ (mKhas grub chen po) といわれるように、修学と修行を積んだ人であり、その著作の内容は正統的な経やタントラを調べることによって、おおよその意味や内容を推測することが可能である。今後できるなら、彼の『清浄大楽国土誓願』をその注を参照して研究したいとも願っており、今回の論稿はその下準備にもなると思われる。そこで今回は不十分な点があることを承知の上で、この『山法・独居修行の敎誡』より第42章「国土選択・財宝を受けとる船主」を試訳することにした⁹⁾。注記においては上記の点を踏まえ、『清浄大楽国土誓願』や『無量寿経』を中

8) 埋蔵経に関してはパドマサムバヴァ (Padmasambhava, ca. 8c.) が残したとされて、埋蔵経やその発掘者の権威付けに使用された事例が多い。またチャクメーが指導し、その敎えを編纂したミギル・ドルジェ (Mi 'gyur rdo rje) も 12 歳の頃から 24 歳で早世するまで「虚空／天空の法 (gNam chos)」として啓示を受けた法を多く残している。極楽世界に関するものだけでも、『虚空／天空の法である極楽願文』(gNam chos bDe smon) という同じ題名の三つの短編が、彼のものとして *bDe smon phyogs bsgrigs stod*, pp. 214-216 に採集されている。

またやや一般向けのものではあるが、ニンマ派の人名事典 ([1995] *Masters of the Nyingma Lineage*) を見ると、カルマ・カギュ派の人名が多く含まれている。この本は Part 1 から Part 9 まで時代ごとに区別して人名とその事蹟を載せている。そのうちの Part 3 の 9-11 世紀の項から、名前に gTer ston (埋蔵経発見者) や g'er chen (大埋蔵経発見者) といった称号を持つ人が一挙に登場しはじめる。すなわち、9-11 世紀の項には記載された 54 人中 22 人、12-13 世紀の項には 51 人中 20 人、14-15 世紀の項には 49 人中 26 人、16-17 世紀初めの項には 38 人中 13 人、17 世紀の項には 36 人中 12 人、18 世紀の項には 39 人中 7 人、19 世紀の項には 44 人中 4 人という状態である。チャクメーの活躍した 17 世紀中頃には一時の盛行ほどではないが、逆にすでに確立されたものも多かったということであろう。チベットには、

「…人のラマに一つの流儀があり (bia ma re la chos lugs re //), 一つの地域には一つの方言がある (lung pa re la skad lugs te //)。百人のニンマ [派のラマ] には百の流儀があり (rnyin ma brgya la chos lugs brgya //), 百人のゲルク [派のラマ] には一つの流儀 [のみ] がある (dge lugs brgya la chos lugs gcig //)」(cf. 北村、ツルティム [1995] p. 1)

という諺があるそうだが、ここからもその状態が推測できる。

心とした対応箇所を可能な限り列挙した。諸賢のご叱正、ご鞭撻を乞うものである。

なお『山法・独居修行の教誡』冒頭には著作の意図、各章の目的と題名が科文として記されている。それによると1665年末から1666年中頃に渡って著作されたようである¹⁰⁾。全53章、ペチャ (dpe cha) 292枚もの大著である。各章は弟子のツォンドゥ・ギャンツォ (brTson 'grus rgya mtsho, ca. 17c.) の質問に答えて口述したものを、この弟子が記した形になっている。各章の内容ないしそれを示す科文については、本来は内容を直接精査してから確定すべきであるが、何分大著でもあるため概略の理解のために試訳を参考資料として挙げる。それを見るとカルマ派、ニンマ派の教えに特徴的な用語が多く見られる他、やはりカギユ派の人としてガンポーバ (Dwags po lha rje sGam po pa. 1079-1153) の『解脱莊嚴論』(Thar rgyan) を学んだという伝承¹¹⁾ のとおりと言うべきか、道次第文献に見られる語彙が特に加行の段階に見られる。

さらに本書について、著者自身の言及として本論の冒頭部分を、本稿の末尾に試訳したので、参照して頂きたいが、さらに本書の奥書を見ると一

「(292b6-293a5) ラマ・リンボチェ [すなわちチャクメー] 御前は、未来の人一山々をさすらって、経・真言 (顯密) の実践と新旧 [の教え] すべてを一つにまとめた修行を知る者全ては、註釈すべきです。自他の利益すべてを成就したいと欲するなら、この『山法・独居修行の教誡』に揃っている。私と直接会っても、これしか話すべきことは無いことを知るべきです。この経函を写したいと欲する人たちは、章を個々に分けないで、『ミラレパの] 十万歌』(mGur 'bum) を写したように一纏めにして良い経函を造っておくべきです。すると書籍 (dpe cha) が散逸しないこと等になるので、知の小さな者たちにとって広大な衆生利

9) 本稿末の参考資料についても、幾つか不明な箇所は大谷大学のソルティムケサン先生に、御意見を賜った。もちろん最終的な文責はすべて我々にある。

10) 本稿の参考資料として挙げた本論の冒頭に、「木蛇年の終わりから、火馬の年の中頃の、幾月かの間に継続的に」と説かれている。それからすると1665年から1666年となり、そのうちの1666年の著作ということになる。他方、bDe smon phyogs bsgrigs 版 p. 331, ペチャ 244a に「今、寿命の量は四十 [歳] である」とある。これを著述の年命とすると、彼の年代は1613-1678年とされることから、ここの「rta lo」は「shing rta」(1654年) に一致してしまうという可能性も考えられなくもない。しかし、その記述は文中にあって現時点の平均的な人間の寿命に言及しているものであり、やはり前者を採るべきであろう。

11) cf. The Venerable Tsering Lama Jampal Zangpo, Translated by Sangye Khandro [1988] p. 39. 本論でも 244a, pp. 331-332 の現世の困難を指摘する箇所は、道次第文献によく見られるものである。またチャクメーの『清浄大樂國土誓願』に対するラクラ・ソナムチュェドゥッ (Blag bla bSod nams chos 'grub) による注においても、「菩提道次第」と共通する教証、論調をもって修学の次第を議論している。本作 *Ri chos mtshams kyi zhal gdams* (山法・独居修行の教誡) の目次でも示されているように、著者ないしその注釈者は、ニンマの法を含めて顯密を漸修するという態度を取るのである。

益が生ずるかとは私は思うという〔教訓〕と、後で出る『脉風の教誡』(rTsa rhung gi gdams pa) と、護法神一般の成就の法類の灌頂、伝授を得ていない者と、修行をしない者など、器でない者たちに対しては秘密にしてください。知って下さいというこの教訓もカルマ・ヴィールヤ (Skt. Karma Virya, Tib. br'Tson 'grus) が記した」

とあることから、著者がこの教えを重視していたことが伺われる¹²⁾。

今回扱う *Ri chos mtshams kyi zhal gdams* の題名については次の通りである。

「ri chos」は文字通りは「山法¹³⁾」という意味であるが、*Sangs rgyas chos gzhung gi tshig mdzod* (佛学辞典)¹⁴⁾によると、チベット仏教のタクボ・カギェ派の教法であり、『山居法』と翻訳されている。その意味内容は「甚深道の四荘厳 (zab chos rgyan bzhi)」を三類の口授 (ri chos skor gsum) により荘厳したものとされる。その四荘厳とは以下の通りである。

- 1) 山法は一切功德の生起 (ris chos yon tan kun 'byung)
- 2) 秘密灌頂の大船 (gsang ba dbang gi gru bo che)
- 3) 金剛身の隠密講説 (rdo rje lus kyi sbas bshad)
- 4) 中有の導き (bar do'i khrid)

1) は所説の本行である。すなわち俱生結合 (skyes sbyor) とナーローの六法の背後から庇護する法 (rgyab chos) であり、修行場所の定義と二次第の前行、三律儀の規定である¹⁵⁾。2) はクリシュナ流¹⁶⁾の〈最勝楽タントラ〉マンドラ儀軌と、さらに俱生結合と六法に必要な多くの所縁類である¹⁷⁾。3) は事体の実相を決断するものである¹⁸⁾。4) はミラレパが山の女神ツェーリンマ (Tshe ring ma) に対して中有を六に分けて説いた註解である¹⁹⁾。三類の口授は〔カルマパ・〕ギェルワ・ヤンゴンパ (rGyal ba yang dgon pa.²⁰⁾ 1213-1258) に著作がある²¹⁾。

次に「mtshams」自体は「境目」「間隔」「境界」という意味である。これに「bcad pa (断った)」を加えると「mtshams bcad pa (間断した)」という意味になり、これ

12) チャクメーは〈清浄大楽国土誓願〉の冒頭にも、「これより大きな利徳はありません。これより深い教誡はありません。私の法の根本です」と述べている。

13) 立川 [1987] p. 83 にも詳しく紹介されている。

14) cf. Wang dbyi non [1992] pp. 769-770 「ri chos」の項。

15) cf. Wang dbyi non [1992] p. 770 「ri chos yon tan kun 'byung」の項。

16) 立川 [1987] p. 83 注 10

17) cf. Wang dbyi non [1992] p. 865 「gsang ba dbang gi gru bo che」の項。

18) cf. Wang dbyi non [1992] p. 425 「rdo rje lus kyi sbas bshad」の項。

19) cf. Wang dbyi non [1992] p. 550 「bar do'i khrid」の項。

20) Yang dgon pa rgyal mtshan dpal. 1213-1258, cf. 立川 [1987] p. 8 注 64, p. 64

21) cf. Wang dbyi non [1992] p. 770 「ri chos skor gsum」の項。

は Skt. *sīma-bandha* (結界) の訳語である²²⁾。また「*bsnyen mtshams*」という場合、それは本尊に対する修念のために閉じこもって修行することを意味し、「*mtshams khang*」という場合、それは人の往来を断ってその修行をするための庵や房室を意味する。チャクメーは伝記によると、故郷にある吉祥山 (*dPal ri*) の頂の洞窟に独房を設けて修行を続けていたし、特に厳格に結界を守った時期には、壁の穴から加持や注釈を与えていたとされている²³⁾。

以上を勘案して *Ri chos mtshams kyi zhal gdams* を「山法・独居修行の教誡」とした。

次に、今回和訳研究する第 42 章「国土の選択・財宝を受けとる船主」について説明する。この章は、本論の科文に「どこに往くかの目的地があるため」とあるように、死後にどこに往生するか国土の選択を主題としている²⁴⁾。そこでは、まず諸々の仏、菩薩、成就者の浄土、聖地やそれらへの往生の可能性が挙げられるが、現世の困難と阿弥陀仏が住する西方の極楽世界を述べて、選択を誤らず、無量光仏と観自在菩薩のみを成就し、極楽往生するよう勧めている。副題の「財宝を受けとる船主」について本論中に直接的な説明は見られないが、そのような内容からして、往生すべき国土という重要な進路の選択を、賢明な船主が貿易商を率いて船に乗り、安全な航路を選び、願い通りの宝島へ連れていき、決して空手で帰らさず、多くの財宝を手にして必ず帰港させることに準えているのであろう (cf. 「入法界品」(*Gaṇḍavyūha*) ヴェイラの章)。

このように極楽世界と阿弥陀仏のみを選択するという点では、〈無量寿経〉や〈観無量寿経〉を所依とする中国、日本の浄土教と極めて類似したものがある。例えば〈観無量寿経〉で説かれる韋提希夫人―世尊の現わした諸仏国土を見ながらも、極楽世界と阿弥陀仏を選ぶ姿勢のような事例である。ただし上記のチャクメーの教訓からすると、この『山法・独居修行の教誡』は一つの全体として取らえるべきであり、そこにはカギュ派、ニンマ派の様々な法が盛り込まれている。すなわち、カギュ、ニンマの顕密の様々な修行を行いながら、死後に往生すべき国土とその教主に関して、極楽世界と阿弥陀仏が選択されるわけである。

次にその内容の概観であるが、弟子のツォンドゥ・ギャンツォが、寿命が長くて百年の時代に誓願し往生すべき仏国土について質問をしたのに対して、その問いは根本

22) 榊、西尾 [1981] No. 6825 (559) *Sīma-bandhaḥ* [藏] *Mtshams-bcad-pa* [漢] 断界 [和] 結界を設けること (観想又は苦行の爲め、寂靜の地を選び又自から地を割して、他と交通せず、心を練るを云う) (*Divyāvadāna*. P. 150. 21 に如来の必ずなすべき十事 *Daśavaśya-karaṇīyāni* の中に *Sīma-bandhaḥ kṛto bhavati* のことあり)

23) cf. The Venerable Tsering Lama Jampal Zangpo, 'Translated by Sangye Khandro [1988] p. 40

的で大事なものだから、今生に資糧を積み障碍を浄めて、欲する国土へ往生するように勧める。

まず総論として、すべての仏陀と六道の衆生にはそれぞれ清浄と不浄の現れにおいて涅槃の浄土と輪廻の穢土が現れるという唯心論的な国土観が示される。

次に個々の仏国土や聖地の記述に入る。まず、東の阿閼の妙喜国、薬師の瑠璃光国や〈大日経〉の五仏の国土、受用身の密厳国土など、諸仏とその国土とそこに往生する仕方が紹介される。次に無上瑜伽とそれに関わるニンマ派、カギユ派に関係するオギャン (O rgyan. ウッディヤーナ, Uddiyāna) 国王 [インドラブーティ (Indrabhūti)] や、ニンマ派の祖パドマサンパヴァ、シチュ派の祖マチク・ラブドンマ (Ma gcig Lab gi sgron ma. 1055-1143) のタントラ的な荒涼たる聖地が、紹介される。

- 24) 諸国土を挙げて、そこへの浄土を論じた著作について、ゲルク派では、宗祖ツォンカバが〈無量寿経〉に基づいて、極楽往生の因を四つにまとめ、極楽願文『最上閼門』を著している。極楽浄土や阿彌陀仏に関する記述としては、同経や同願文に随順する場合が、ほとんどである。なお、同派の学僧チョネ・タクパ・シャッドツ (Co ne Grags pa bshad sgrub. 1675-1748) は、西方の極楽浄土に関する著作と平行して東方の阿閼の仏国土に関する著作を行っているが、その著『極楽国土の莊嚴の話 —その国土に往く階梯— *bDe ba can gyi zhing bkod brjed pa —Zhing der bgrod pa'i them skas—*』において、「極楽と不動 (阿閼) の国土に生まれる因は成就しやすいので、この国土の教化対象者が成就したならそこに生まれることを意図なさって、教主 [釈尊] はこの二つの国土の『国土莊嚴経』を別に説明なさった」(1b6-2a1) などという。cf. *Co ne grags pa bshad sgrub kyi gsung 'bum, dPyad gzhi'i yig cha phyogs bsgrigs* (天津古籍出版社) Vol. 44 A, *Zhing bkod 1aff.*, p. 112ff.

同じくゲルク派の学僧クンタン・コンチョック・テンペードンメ (Gung thang dKon mchog bstan ba'i srgon me. 1762-1823) の著作『主無量光に依るボワの引導などの類 —多くの浄土に往く早道—』*mGon po 'Od dpag med la brien pa'i 'pho khrid sogs kyi skor Dag zhing du mar bgrod pa'i myur lam* があり、8つの小品が含まれていて、各国土やそこへの往生は叙述されているが、直接、それらを比較検討するといった内容ではない。ちなみに小品の第1から第6までは無量光仏による済度と極楽往生に関する著作、第7は〈宝積経、普見 [如来] の国土の莊嚴 (=文殊師利授記会)〉所説の文殊・普見 [如来] に依り、南方の誓願如來成就清浄無塵積集という浄土に関わる遷移の実践方法、第8は大悲観自在に依る、その浄土ボタラに関わる遷移の実践方法である。無量光仏に関連する6つの著作はいずれも、無量光仏に頼って臨終時に悪趣の恐怖から救済され、極楽に往生することを祈願する実践しやすい方法を説いている。冒頭には序論として、大悲を具えた教主の無辺の教えは最終的に無住处涅槃に往くもののみであるが、初めには輪廻を厭うこと、中でも悪趣の門を封ざることが必要である。そこで「強引な成仏方法、ボワ (遷移) の教誡 (btsan thabs 'tshang rgya 'pho ba'i gdams pa)」といった行じやすく、大利益をそなえたものを、実践の中心にして努力することが必要である。しかも「ボワの教誡」は〈秘密集会〉など無上ヨーガ・タントラにしか明確に出ていないが、先師たちが分けて無量光仏と弥勒菩薩などに依るボワを多く説かれたが、中でも無量光仏に依るものは、仏自身の本願の成就より聞名により往生し、一生補処から退転しないことが説かれたので特別なものである。よって多くのダラニ、経の利徳の箇所に、多くの浄土の中でも極楽へ往生する方法を多く説かれた。その往生の因は〈無量寿経〉、ツォンカバの『最上閼門』などの所説のように、無量光仏を信ずること、極楽往生を意欲すること、造った善根全てを往生の因として廻向することの三つは不可欠であり、大衆の教化対象者はさらに発菩提心が必要である。だから自心を観察して順縁の基礎を持ち、逆縁を離れて実践すべきだという。cf. *THE COLLECTED WORKS OF GUN'-THAN' DRON-MCHOG BSTAN-PAI SGRON-ME* Reproduced from prints from the Lha-sa blocks by Ngawang Gelek Demo; *Gedan sungrab minyam gyunphel series 38, New Delhi 1975 Vol. 6 Ca, 'Pho khrid 1aff.*, p. 353ff.

次に、当来仏マイトレーヤとその都率天やそこへの往生、彼の成道時の様子が紹介される。この頃は都率天への往生を願う人が多い。その浄土は小さな変化身の国土であるが、有情利益と教法護持のためには〈弥勒誓願〉を修行すべきである。しかし、著者はこの輪廻の苦を見て、生死に戦くので、〈弥勒誓願〉でなく〈極楽誓願〉を唱えたといって、選択の理由を述べている。

さらに、いまニンマの人たちはパドマサンバヴァの聖地・銅色山へ、「オーン マニ パドメー フーン (om maṃi padme hūm)」の六字真言を唱える人は観音のポトラ山へ、〈最勝楽タントラ〉(*bDe mchog*)の金剛亥母を守護尊にする人は西のオギャン国への往生を願うと説き、さらにダーカ・ダーキニーの住むチベットの東西南の聖地、時輪タントラの盛んな北のシャンバラ、土着宗教のボン教徒が往生を願うチベットのシャンシェンが紹介される。

次に西方の極楽世界と教主無量光とそこに往生する条件が、主に〈無量寿経〉から紹介されて、今自由のあるときに〈無量寿経〉〈阿弥陀経〉〈悲華経〉〈般舟三昧経〉〈無死鼓音声タラニ〉等の典籍²⁵⁾を見て、国土を選択し、往生の準備をすべきであるという。

さらに、おそらく〈無量寿経〉に基づいて、極楽世界の功德が紹介された上で、オギャン王などは無量光仏の变化身、ソツェン・ガンボ王 (Srong btsan sgam po, 581-649) 等は観音の变化身であり、ナーガルジュナ (Klu sgrub, ca. 150-250)、タクボハジェ (Dwags po lha rje, 1079-1153)、キュンボ・ネルジョル (Khyung po rNal 'byor, 1086-1139)、ソナム・ツェモ (bSod nams rtse mo, 1142-1182) 等も極楽へ往生したと述べて、観音、勢至の両脇侍菩薩に言及する。ここには、ゲルク派の祖師の名は挙げられていないが、同派を含めて全チベット人が受容し、信仰する偉大な人たちの名が挙げられており、彼らもまた極楽往生したことを指摘して、信仰の求心力を強めるものであろう。次に、道次第文献にも見られる著述方法により現世の困難に言及して、極楽往生を勧める。そしておそらく〈悲華経〉に基づいて無量光仏が示寂した後には観音、次いで勢至が摂政となり成仏することを説く。最後に無量光尊と観音のみを成就して志願すべきだと勧めるのである。

25) チャクメは〈清浄大楽国土誓願〉の冒頭に、「これは経の宗 [mdo lugs] であるから、伝授を得ていなくても、唱えていい」といい、大乗願教の教えとして、密教的な師資相承は必要ないと述べている。それは本論のこの章にも適用できるのであろう。

本文試訳

(p. 318, 237gong-b3)『山法・独居修行の教誡』より「国土の選択・財宝を受けとる船主」というもの

エマホ。息子、明知ある〔弟子の〕ツォンドゥ〔・ギャンツォ〕(brTson 'grus rgya mtsho, ca. 17c.) [という者] が、寿命がいかに長かろうとも、百年しか生きられずに死ぬ時²⁶⁾ の、大きな利益・枢要の問いをした。これは仏法者すべてにとって重要である。今生に資糧を積み、障礙を淨めることは、鞍と轡をした良き馬に似ている。それ(馬)を廻向・誓願の轡により廻向(方向転換)して、自由に欲する国土に赴くとよい。

一般的にすべての仏〔にとって〕の御覧になる現れと、母²⁷⁾ なる六道すべて〔の衆生〕の迷乱の現れには、無数の淨と不淨の国土がある。〔仏の受用身の〕住処の有頂天²⁸⁾・法界・国土――それは、一般的に虚空が遍満するかぎりの国土である。

業の淨らかな者たちの現れの面には、外の器世間は無量宮、内の有情世間は本尊〔として現れる〕。そこには輪廻の苦の名さえ無い。一般的に虚空が遍満するところの輪廻・涅槃すべて、それは勝者〔・仏世尊〕の身語意が遍満する。それは〔仏の〕身語意の秘密である。その秘密を説いた (p. 319) 経典 (*mDo*)²⁹⁾ に説明されている。

一つの微塵の上に微塵ほどの数〔の国土があり〕、そこにおける浄土 (dag pa'i zhing khams) は不可説である。そこで勝者、および仏子は法輪を転ずる。それはお

26) その百年についても障礙が多く、仏道を行う時間は乏しいという教えは、後で本論 (244a, pp. 331-332) にも説明されるが、これらは諸々の「菩提道次第論」に見られる記述である。(cf. ガンポーバ著『解脱莊嚴論』(*Thar rgyan*) [The Dalai Lama Tibetology Series XXVI, *The Jewel Ornament of Liberation* by Gampopa Sonam Rinchen, critically edited by Khenpo Sonam Gyasto, Central Institute of Higher Tibetan Studies, Sarnath Varanasi 1999] p. 43ff、ツォンカバ著『菩提道次第大論』(*Lam rim chen mo*) ツルティム [2004] pp. 114-117、青海民族出版社版 pp. 104-107) に見られる。

さらに〈宗要経〉にも「闍浮提の人々は短命であることから、百歳を忍受するのみである」の一文が説かれる。(〔藏訳〕*Tshe dang ye shes dpag tu med pa zhes bya ba theg pa chen po'i mdo* [ドルゲ版] 東北 No. 674, rGyud 'bum, Ba. 211b5, 東北 No. 675, rGyud 'bum, Ba. 216b64, 東北 No. 849-4, gZung's 'dus, E.57b4, [北京版] 大谷 No. 361, rGyud, Ba. 244a3, 大谷 No. 362, rGyud, Ba. 249b1, 大谷 No. 474, rGyud, 'A. 55b7, [梵本] cf. 池田 [1916] p. 551, [漢訳] 失訳『大乘無量寿経』大正 No. 936, p. 82a, 『仏説大乘聖無量寿決定光明王如来陀羅尼經』大正 No. 937, p. 85a)

なお著者による『清浄大楽国土の誓願』(*rNam dag bde chen zhing gi smon lam*) にも同趣意が説かれる (cf. *bDe smon phyogs bsgrigs stod*, p. 219, 東北 No. 7018)。

(業の異熟以外の命尽があっても、[寿命を] 百年は得て、横死を余りなくなくすとおっしゃった教主無量寿に敬礼します〜)

- 27) 「一切の有情はみな世々生々の父母兄弟なり」ということは日本でも知られているが、チベット仏教徒にとって、「母なる有情」というのはよく知られた表現である。

ナーガールジュナ (Nāgārjuna, ca. 150-250) の〈親友書簡〉(Suhṛtlekha) に、輪廻の七つの過患の一番目として決定なきことの過患は、輪廻において父母などの親友たちは他の世々には敵になるし、敵たちは親友になる、同じく父は息子になる、息子は父になる、母は妻になるし、妻は母になるなどと、移りゆくので、輪廻は決定が全く無いこと、ゆえに信頼できないことが述べられる。

(cf. k. 66, [蔵訳] *bShes pa'i spring yig* [デルゲ版] 東北 No. 4182, Nge, 43b6, [北京版] 大谷 No. 5682, Nge, 286b5, [漢訳] 唐義浄訳『龍樹菩薩勸誡王頌』(大正 No. 1674, p. 752c29-753a1), [和訳] 瓜生津 [1974] p. 333, 北畠 [1985] p. 230. その他、唐玄奘訳『瑜珈師地論』「本地分」(大正 No. 1579, p. 320c-321a), 「撰決沢分」(大正 No. 1579, p. 636c) を参照のこと)

他方で、大乘仏教徒として菩提心を修める次第として、「道次第」(*Lam rim*) の体系においては、アティーシャ (Atīśa, 928-1054) からの伝統として七因果の口訣、シャーンティデーヴァ (Śāntideva, 7-8c. ca.) の書に出てくる自他の交換の秘訣との二つが説かれる。前者の七つの因果は、チャンドラキールティ (Candrakīrti, ca. 600-650) の〈四百論註釈〉(*Bodhisattvayogacaryācatuḥśatakaṭīkā*)、チャンドラゴーミン (Candragomin, ca. 620-680) の〈弟子書簡〉(*Śiṣyalekha*)、カマラシーラ (Kamalaśīla, ca. 8c.) の〈修習次第〉(*Bhāvanākrama*) に基づくものであり、正等覺者は菩提心から生ずるが、その菩提心は増上意樂(勝れた思惟)から、その増上意樂は悲から、悲は慈しみから、慈しみは報恩から、報恩は恩を念ずることから、恩を念ずることは有情を母と見ることから生ずるという次第である。有情を友だと修習することは、好ましさを生ずるためである。愛する友の究竟は母なので、母だと修習することとその恩を念ずることと報恩を思うことの三つにより、有情は好ましくて大切であることが成立するとされるのである。

(cf. ガンボーパ著 *Thar rgyan* (解脱莊嚴) [1999] pp. 89-90, ソンカバ著『菩提道次第小論』(*Lam rim chung ba*) bKra shis lhun po 版 74a-b, 88b-89a, 青海民族出版社版 pp. 113-114, 136-138, ツルティム, 小谷 [1991] pp. 57-61, 宮崎 [2004])

- 28) 受用身が成仏する場所として有頂天ないし色究竟天に言及する記述は、しばしば〈密厳経〉〈入楞伽经〉〈金剛頂タントラ〉が依用される。

(cf. E. Obermiller [1931] p. 135), Lessing and Wayman [1968] pp. 22-23, 酒井 [1988] pp. 29-30, 田中 [1997] pp. 28-39, ツルティム, 藤仲 [2003] pp. 374-375)

- 29) 「rgyud (タントラ)」ではなく「mdo (経)」と呼ばれることから、顯教の經典とすると、[蔵訳] '*Phags pa de bzhin gshegs pa'i gsang ba bsam gyis mi khyab pa bstan pa zhes bya ba theg pa chen po'i mdo*」[デルゲ版] 東北 No. 47, dKon brtsegs, Ka. 126a7-145b5, [北京版] 大谷 No. 760-3, dKon brtsegs, Tshi. 144a6-167a6, [漢訳] 西晉竺法護訳『大宝積經』「密迹金剛力士会」(大正 No. 310-3, pp. 53b-60a), 宋法護訳『如來不思議秘密大乘經』(大正 No. 312, pp. 716c-725b) が考えられる。

この經典〈如來秘密不可思議經〉(*Tathāgataghyaka*) は、古くは『大智度論』(大正 No. 1509, p. 127c) にも如來の三密に関する引用がある。さらに如來の語の秘密として六十字の音声が *Mahāyānasūtrālamkāra* の世親訳や *Vyākhyāyukti* にも引用され、ブトン (Bu ston Rin chen grub pa. 1290-1364) の『仏教史』(*Chos 'byung*, cf. E. Obermiller [1931] pp. 29-30) にも普及される。さらに、ネパールでも九法の一つとして知られる他、〈善説集〉(*Subhāṣitasamgraha*) 等のインド後期の論書にも多く引用される。また、所作タントラに分類される〈妙臂所問タントラ〉には加行において読誦されるべき經典として指示される事例、所作タントラないし行タントラに分類され〈大日經〉に影響を与えたと思われる〈金剛手灌頂大タントラ〉([デルゲ版] 東北 No. 496, Da. 38a7-b1) には東西南北に〈般若波羅蜜經〉〈華嚴經〉〈如來秘密經〉〈金光明經〉を安置するよう指示される事例が示すように、密教においても影響力のある經典である。またチベットでは秘密主、金剛手が大勢至と同一視されており、〈大日經〉で秘密主が対告衆として身語意の秘密が説かれること、〈金剛手灌頂大タントラ〉では〈如來秘密不可思議經〉と同じく寂意菩薩と秘密主が登場して三密が説かれることなどが注目されるが、密教において如來の三密の説明において〈如來秘密不可思議經〉が直接的に指示される事例に関しては未詳。cf. 袴谷, 荒井 [1993] pp. 426-427, 酒井 [1962] pp. 73, 81-82, 223, 大塚 [1986] pp. 61-62, 大塚 [2001] p. 114

互いに侵害しない。たとえば三千〔大千世界〕が白芥子の中に入れたとしても、それは三千〔大千世界〕が小さくなってい〔るわけでは〕ないし、外の白芥子が大きくなってい〔るわけでは〕ない。それは諸仏の神変である³⁰⁾。

国土、〔すなわち〕虚空が遍満するすべは、たとえば胡麻の莢が口を開いたように³¹⁾、そこに勝者、および仏子が常に住しておられる。それが諸仏〔にとって〕の見え方である。

下の有情たちの現れの面には、住処の六道の苦が個々に現れる。例えば地獄・餓鬼・畜生―それは夢のごとくではない。現在の我々人間たちのように、各自の現れの面には実体あるものと〔して〕成立している。

現在のこの三千〔大千〕世界は、人々にとって劫の下減が現れる³²⁾。それは或る有情による現れには、この劫が滅して空〔劫〕になるのが見える(237'og-b)。それは或る者によると成劫だと見える。地・虚空が見える有情は多い。それは或る者によると虚空が地に見える。それは或る者によると下方が上に見える。それは或る者によると上方が下に見える。それらが現れるのは不可思議である。各自体は諦として成立している³³⁾。

それは広汎には〈宝積経〉(dKon brtsegs mdo)³⁴⁾に出ている。それは有情の現れの

30) 〈菩薩地〉(Bodhisattvabhūmī) の「威力品」には、仏菩薩の「威力 (Skt. prabhāva)」を略(三)、広(五)に分けて説き、後者の五種威力の第一に「神通威力 (Skt. abhijñāprabhāva)」が挙げられ、それをさらに開いて六神通が提示される。そのうち第一の神足通(玄奘訳「神境智作證通」)に関する能変〔通〕(Skt. pārīṇāṃiki) では、十八種類の神変が説かれる。この神変の為者を確認すると、「三昧自在を得て堪能な心を持つ仏菩薩」とされる。この十八種類の神変の中に、「縮小と拡大は、山の王である雪山をも一極微に合集し、極微をも山の王である雪山に揚げせしめる」といった縮小・拡大自在の神力が説かれる。この〈菩薩地〉の記述は本作と直接的な繋がりを持つものではないが、その理論的な根拠となるものである。cf. 中御門 [2004]

31) 蔵訳『De bzhin gshegs pa thams cad kyi de kho na nyid bsdus pa zhes bya ba theg pa chen po'i mdo』(『デルゲ版』東北 No. 479, Nya. 3b2-3)
de nas de bzhin gshegs pa thams cad kyi sangs rgyas kyi zhing 'di dper na til gyi gang bu bzhin du yongs su gang par gyur ro~ (それから一切如来はこの仏国土を、例えば胡麻の莢のように完全に充たした)

〔漢訳〕宋施護訳『仏説一切如来真實攝大乘現證三昧大教王経』(大正 No. 882 p.341)

同じく蔵訳 (Nya 2a5-6) には、「九十九コーティの大菩薩とガンジス河の砂ほどの諸如来が一処に住して、ジャムブ洲には、無量無数の如来の身により胡麻の莢のように満たされたと見た。如来各々の身からも無数無量の仏国土が現れた」等とある。五仏に関する記述とともに、〈大日経〉だけでなく〈金剛頂経〉系の内容が反映していることが分かる。

32) 通常の成劫、住劫、壞劫の規定(〈俱舍論〉世間品)については k. 90, 山口, 舟橋 [1955] pp. 450-463 を参照のこと。

33) 直前に見られる「実体として成立している」と同義であり、空観においては否定対象とされるものであるが、ここでは凡夫の認識にとってそれらは空なるものでなく、実在であることを強調するのであろう。なおフォニカバ流の中観では、諦としての成立を否定した空と、縁起・仮設としての作用は、相即することが強調されるが、本論はそのような空観を承けていないのである。

異なりである。それは三千〔大千〕の娑婆世界である。人すべては業が相同し見方が相同する。(p. 320) それが輪廻・涅槃の二つの国土である。

エマホ³⁵⁾。この住処から東方に、東の妙喜国 (mNgon par dga' ba'i zhing khams)³⁶⁾ がある。その住処には不動勝者 (Mi 'khrugs rgyal ba / 阿閼如来) が住しておられる。正尊金剛薩埵 (rDor sems)³⁷⁾・不動 (Mi 'khrugs, Mi bskyod) は同一である。東の瑠璃光国土 (Vaidūrya snang zhing khams)³⁸⁾ には、世尊薬師〔如来〕 (sMan pa'i rgyal po) が住しておられる。同じく薬師七兄弟 (sMan bla mched bdun)³⁹⁾ は、〔東方の〕各国土に各如来として住しておられる。

この住処から南方には、吉祥なる具受用国 (dPal longs spyod ldan pa'i zhing khams) がある。その国土には宝生〔如来〕 (Rin chen 'byung ldan) が住しておられ

34) 通常チベットでは阿弥陀仏に関する典籍において、〈宝積経〉という場合、現実的にはその第五品〈無量寿経〉を指示するが多い。しかし、本作での記述は〈無量寿経〉には直接的に確認しがたい。そこで、〈普賢行願讃〉の註釈文獻 (陳那釈, v.28 対応箇所) のうち、「大宝積経」第三品の〈如来秘密不可思議経〉を引用する箇所を参照してみたい。というのは、本論で直前に同経の如来の三密に関する言及と思われるものがあるし、さらにカルマ・チャクメー (Karma Chags med) の浄土教関係の代表作であり、本作とも内容が重複する『清浄大楽国土誓願』は基本的に、〈普賢行願讃〉所説の七支供養を骨格としているように、両者は深く関係しあっているからである。

〔蔵訳〕 *Kun du bzang po'i spyod pa'i smon lam gyi don kun bsdus* (〔デルゲ版〕東北 No. 4012, mDo 'grel, Nyi. 190a5, 〔北京版〕大谷 No. 5513, mDo 'grel, Nyi. 221a3)

〔菩薩の誓願をあり得ないものとしてたてたならば無意味であろう。なぜか、と問えば、仏国土の一部分であっても、一塵上に押し込むよう示すことがあり得ないならば、三世に属する仏国土の塵に等しい仏全ての国土それぞれにおいても、無数の仏世尊それぞれが、さらに菩薩の眷属の中央に坐っておられるので充満しており、それ程〔多くの者〕を、一塵上に個々に観察しつつ希求することをどのように行うのか、と反駁する。そうではなくて、不可思議な業が種々の世間を上下横等、化作する如く、同様に不可思議な智慧が化作したならば、一塵上における〔以上の事柄が〕どうしてあり得ないのであろうか。〈如来秘密不可思議経〉 (bSam gis mi khyab pa) に教証としても説明がある。【知者たちによつては、この地に稀有なものは少しもない。幻の種類 (相) となったものにおいて、希有を何と捉えるのか。禪定と業と龍と諸仏の比類のないこと (大我性) を、かの世間の救世者、導師は四種類の不可思議と説明した】

それゆえ、あらゆる仏の教言をあり得ないと捉える彼らも、このことによって勝解しなさい。世間においても、澄浄な水が満ちた小さな容器に、星宿等の虚空の荘厳全てが現れるごとくである。同様にさらに世尊がお説きになったものがある。

【映像のごとく諸法がある。眼翳、夢の相である。幻術、陽炎のようなものと、そのように余りない全てである】

といったもの等々が、〔どのように〔諸仏が〕一塵上にお坐りなるのか〕といったもの等々の〔答えの〕ごとく〕

〈如来秘密不可思議経〉の出典箇所は、*Phags pa de bzhin gshegs pa'i gsang ba bsam gyis mi khyab pa bstan pa zhes bya ba theg pa chen po'i mdo* (〔蔵訳〕大谷 No. 760-3, Tshi. 118b5) と思われる。

(友人たちよ、如来はこの四つの不可思議をお説きになった。四つとは何か、と問えば、すなわち、業の不可思議と、龍の不可思議と、禪定の不可思議と、仏の不可思議である)

これに対応する漢訳として、西晋竺法護訳『大宝積経』『密迹金剛力士会』(T. No. 310, p. 43c), 宋法護訳『仏説如来不思議秘密大衆経』(T. No. 312, p. 706b1) がある。しかし蔵訳、漢訳ともに、本文と完全には一致しない。本文の引用は引きの可能性もある。

る。御名は「宝頂」(Rin chen tog) と知られている。

この地から北方に、吉祥なる事業円満成就国 (dPal las rab rdzogs pa'i zhing khams) がある。その国土には不空成就 [如来] (Don yod grub pa) が住しておられる。御名は「開敷華 [王如来]」(Me tog cher rgyas) と知られている。

それら [諸々の] 国土は浄土である。それは小さな受用身の [住する] 国土と主張される。(238a) 内容⁴⁰⁾ は変化身の大きな国土だと考えられる。第一 [歓喜] 地以上を得ていない者が、それら国土に生まれることはありえない。それはマチク・ラブドンマ (Ma gcig Lab gi sgron ma. 1055-1143)⁴¹⁾ がお説きになっている。内容は〈阿閼 [仏国土] 莊嚴經〉(Mi 'khrugs bkod pa'i mdo)⁴²⁾ と一致する。

[受用身の] 住処・有頂天の密厳国土 ('Og min 'Thug po bkod pa) は、大小が不可思議である。莊嚴の受用があまりに濃密なので、それは「密厳」⁴³⁾ という名で知られている。その国土の中央の宝無量宮 (rin chen gzhal yas khang) の不可思議な量のも

35) 著者による『清浄大楽国土誓願』には以下の誓願がある。cf. *bDe smon phyogs bsgrigs stod*, p. 226, 東北 No. 7018

(妨げのない神力で、妙喜国 (mNgon dga'i zhing) や、吉祥 [なる] 具 [受用] 国 (dPal ldan zhing) や、事業円満成就 [國] (Las rab rdzogs) や、密厳 [浄土] (sThug po bkod), 午前にこうした諸処に赴き、不動 (Mi bskyod) や、宝生 (Rin 'byung) や、不空成就 (Don yod grub) や、大日 (rNam snang) 等の仏に灌頂や、加持や、律儀をお願いし、多くの供物で供養してから夕方極楽 (bDe ba can) にわずらいなく戻れますように。ボタラ (Po ta la) と楊柳宮 (iCang lo can) や、犍牛洲 (rNga yab gling) とウギン国 (U rgyan yul) や、化身である千万の国土における観自在 (sPyan ras gzigs) とターラ (sGrol ma) と、金剛手菩薩 (Phyag rdor) やバドマサンバヴァ (Pad 'byung) 百千万に拝謁し、大海のような供物で供養し、妨げなく赴けますように)

金剛界の五仏の名以外の、南と北の仏国土の記述がいかなる典拠に基づくのかは未詳である。ニンマ派の教義の大成者ロンチェン・ラブジャムバ (Klong chen rab 'byams pa. 1308-1363) の著作 *sNgags kyi spyi don tshangs dbyangs 'brug sgra* (真言の総義, published by Tarthang Tulku, Varanāsi 1967) p. 9 より高田 [1978] p. 19 には、「中央は色究竟天の宝楼閣 "摩訶宮" の國, 東方は "喜" の國, 南方は "宝莊嚴" の國, 西方は "樂" の國, 北方は "業をよく成就する" 國の五種の国土において」などと訳されている。

36) cf. 頼富 [1990] pp. 47-50

37) 中期密教以降、金剛薩埵は金剛手、持金剛系統の尊格から対告衆として発展し、〈初会金剛頂經〉の金剛界十六大菩薩の中でも、東方の阿閼如來の金剛部に属する四親近菩薩の第一として、十六大菩薩の筆頭となり、發菩提心と結び付けられることから、その位置がきわめて大きい。さらに、無上瑜伽タントラの或るものにおいては、金剛部族の阿閼如來が、大日に代わって曼陀羅の中央に位置するとともに、自らが曼陀羅の中央に位置する場合もあるし、五仏、五部族に加えて金剛薩埵自身が自らの第六の部族を率いて、第六の仏となる事例もある。しかし、このように阿閼如來と同一視される事例については未詳である。頼富 [1990] pp. 213, 254, 301, 320, 386-390

38) [藏訳] 'Phags pa bcom ldan 'das sman gyi bla bai dūrya'i 'od kyi sngon gyi smon lam gyi khyad par rgyas pa zhes bya ba theg pa chen po'i mdo (聖なる世尊薬師净瑠璃の本願の差別の広説) [デルゲ版] 東北 No. 504, rGyud 'bum, Da. 274b2-4, [北京版] 大谷 No. 136, rGyud, Da. 254a7-b1

[漢訳] 隋達摩笈多訳『仏説薬師如來本願經』(大正 No. 449, p. 401b), 唐玄奘訳『藥師琉璃光如來本願功德經』(大正 14 No. 450, p. 405a1-4); 高橋 [2005]

の⁴⁴⁾の中央、獅子座・蓮華・日月〔輪〕の上に、一般的に一切諸仏の身が集まっていて⁴⁵⁾、観自在尊の(p. 321)受用身の分⁴⁶⁾。それは五つの決定⁴⁷⁾をそなえた円満なる受用〔身である〕。住处の決定は有頂天の密厳。御身の決定は相好を具えている⁴⁸⁾。時の決定は輪廻のかぎり住しておられる。眷属の決定は十地の菩薩。法の決定は無上の大乗。それは口で説かないで表象で示される。

その正尊の毛穴各々の中、そこに変化身の無量の国土ができています。そこにおいて教化を変化することにより衆生利益をなさる— それは受用身の大きな国土である。

39) 〔藏訳〕*'Phags pa de bzhin gshegs pa bdun gyi sngon gyi smon lam gyi khyad par rgyas pa zhes bya ba theg pa chen po'i mdo* (聖なる七如来の本願の差別の広説)

〔デルゲ版〕東北 No. 503, rGyud 'bum, Da. 〔北京版〕大谷 No. 135, rGyud, Da.

〔漢訳〕唐義淨訳『薬師琉璃光七仏本願功德経』(大正 14 No. 451)

鎌田、河村、中尾、福田、吉元〔1998〕によると、チベットではむしろこの経が『薬師如来経』として流行した。大正 No. 450 と比べると共通する部分はあるが、薬師以外の六如来が登場し、七仏の国土、名、本願が説かれるほか、第七番目の薬師如来の以下の部分において七如来の名号の功德、陀羅尼と供養を説く点で増広が見られる。日本では天台宗で「七仏薬師法」としてよく修法されたという。mched bdun は「七人の同輩、朋友」と訳することもできる。漢訳を見る限り、七如来の間に前世で兄弟や同門であったなどという関係はないようである。東方の七つの国土と仏の名は以下の通りである。

1) Tib. gZhan gyis mi thub pa, Chin. 光勝〔世界〕, Tib. Sangs rgyas mtshan legs par yongs bsgrags dpal gyi rgyal po, Chin. 善名称吉祥王〔如来〕

cf. 〔デルゲ版〕Da. 249b5-6, 〔北京版〕Da. 231b1-2. 〔漢訳〕大正 No. 451, p. 409b

2) Tib. Rin po che dang klan pa, Chin. 妙宝〔世界〕, Tib. Rin po che dang zla ba dang padmas rab tu brgyan pa mkhas pa gzi brjid kyi sgra dbyangs kyi rgyal po, Chin. 宝月智嚴光音自在王〔如来〕

cf. 〔デルゲ版〕Da. 252a3-4, 〔北京版〕Da. 233b4-5. 〔漢訳〕大正 No. 451, p. 410a

3) Tib. sPos kyi yongs su gang ba rin chen brtsegs pa, Chin. 円満香積〔世界〕, Tib. gSer bzangs dri med rin chen snang brtul zhugs grub pa, Chin. 金色宝光妙行成就〔如来〕

cf. 〔デルゲ版〕Da. 255a1-2, 〔北京版〕Da. 236a5-7. 〔漢訳〕大正 No. 451, p. 410c

4) Tib. Mya ngan med pa, Chin. 無憂〔世界〕, Tib. Mya ngan med mchog dpal, Chin. 無憂最勝吉祥〔如来〕

cf. 〔デルゲ版〕Da. 257b1-3, 〔北京版〕Da. 238a3-4. 〔漢訳〕大正 No. 451, p. 411c

5) Tib. Chos kyi rgyal mtshan, Chin. 法幢〔世界〕, Tib. Chos bsgrags rgya mtsho'i dbyangs, Chin. 法海雷音〔如来〕

cf. 〔デルゲ版〕Da. 258b1-2, 〔北京版〕Da. 239b3-4. 〔漢訳〕大正 No. 451, p. 412a

6) Tib. Rin po che'i rgya mtshor legs par gnas pa, Chin. 善住宝海〔世界〕, Tib. Chos rgya mtsho mchog gi blos nam par rol pa mngon par mkhyen pa'i rgyal po, Chin. 法海勝慧遊戯神通〔如来〕

cf. 〔デルゲ版〕Da. 260a4-5, 〔北京版〕Da. 241a3-4. 〔漢訳〕大正 No. 451, p. 412c

7) Tib. Bai dū ryar snang ba, Chin. 淨瑠璃〔世界〕, Tib. sMan gyi bla Bai dū rya'i 'od kyi rgyal po, Chin. 薬師琉璃光〔如来〕

cf. 〔デルゲ版〕Da. 261a5-6, 〔北京版〕Da. 242a3-5b. 〔漢訳〕大正 No. 451, p. 413a

40) 「don」を以下、文脈により「内容」「実」「こと」などと訳した。

41) Ma gcig Lab kyi sgron ma (1055-1143) は、シチュ (Zhi byed pa) 派の gCod (断) の法類の創始者として著名である。ここにいう典籍は未詳。

(cf. George N. Roerich [1953] p. 982ff, 西岡 [1978] pp. 3-11, p. 36, J. Gyatso [1985], Don rdor dang bsTan 'dzin chos grags [1993] p. 225)

42) 〔藏訳〕*'phags pa de bzhin gshegs pa mi 'khrugs pa'i bkod pa zhes bya ba theg pa chen po'i mdo*

〔デルゲ版〕東北 No. 50, dKon brtsegs, 〔北京版〕大谷 No. 760-6, dKon brtsegs

〔漢訳〕唐菩提流志訳『大宝積経』「不動如来会」(大正 No. 310-6, p. 102a20-21), 後漢支婁迦讖訳『阿閼鞞国経』(大正 No. 313, p. 751c20)

それは〈毘盧遮那現等覺タントラ（大日經）〉(*rNam snang mgon byang rgyud*)⁴⁹⁾に説かれている。

その正尊の掌の鉢の中、そこに蓮華の無数の茎が生じている。[その]それぞれの上に多くの国土[がある]。その中央において蓮華の茎が一つ[ある]。それは二十五

43) 〈金剛頂經〉系では、唐金剛智訳『金剛峯樓閣一切瑜伽瑜祇經』(大正 No. 867, ただし中国での撰述の可能性が高いとされる)の冒頭(p. 254a)に、世尊金剛界遍照如來がそこに住して三十七尊の心真言を説く場所を「唯此仏刹。尽以金剛自性清淨所成密嚴華嚴」という。

我が国では真言密教での浄土といえば密嚴国土とされているが、直接の典拠は、『大乗密嚴經』『大日經疏』『菩提心論』とされている(cf. 頼富 [1988] pp. 287-288)。〈大日經〉そのものと〈同タントラ〉に対するブッダグフヤ(Buddaguhya. ca. 8-9c.)の広略二本の註釈に、密嚴国土という言葉は出ないようである。cf. 北村 [1980], 酒井 [1987]

〈密嚴經〉自体における記述は、中村 [1977] に詳しい。

[藏訳] *'Phags pa rgyan stug po bkod pa zhes bya ba theg pa chen po'i mdo*

[デルゲ版] 東北 No. 110, mDo sde, Cha. 2b4-6, [北京版] 大谷 No. 778, mDo sna tshogs, Cu. 2b5-7

(仏の密嚴国土は、光と星と月を離れて、無為の自性[であり]、極微の微細として現れないが、他に涅槃と虚空と非摂滅のように、菩薩大土と諸仏世尊と他の仏国土に行ずる菩薩大土たちにより見られる)

漢訳の対応箇所は以下の通りである。

[漢訳] 唐地婆訶羅訳『大乗密嚴經』(大正 No. 681, p. 723c), 唐不空訳『大乗密嚴經』(大正 No. 682, p. 748a)

44) gcig とあるが、zhig の転訛と考えた。〈初会金剛頂經〉([藏訳] 東北 No. 479, Nya. 2a3, [漢訳] 大正 No. 865, p. 207a)に「大宝玉により莊嚴された」などというが、記述は少ない。

45) 〈初会金剛頂經〉([藏訳] 東北 No. 479, Nya. 2a3)を参照のこと。

46) lHa sPyan ras gzigs dbang longs sku cha (観自在尊の受用身の分)は、たとえば、*De bzhin gshegs pa thams cad kyi de kho na nyid bsdus pa zhes bya ba theg pa chen po'i mdo* ([デルゲ版] 東北 No. 479, Nya. 1b4-5, [漢訳] 唐不空訳『金剛頂一切如來真実撰大乗現證三昧大教王經』大正 No. 865)の冒頭に「de bzhin gshegs pa thams cad kyi thams cad mkhyen pa'i ye shes rnal 'byor chen po'i dbang phyug (一切如來の一切智者の智慧、大瑜伽自在)」とあること、直後(Nya. 2a4)に九十九コーティの大菩薩衆の上首として八大菩薩が挙げられる時、観自在菩薩(Kun tu sPyan ras gzigs kyi dbang po)が挙げられること、金剛界のマンドラから受用身として、毘盧遮那、不動、宝生、観自在王(sPyan ras gzigs kyi dbang bo'i rgyal po)、不空成就の五如來が展開することなどが想起されるが、明確な関連は分からない。cf. 渡辺 [1995] pp. 420-422

47) 〈現觀莊嚴論〉の解釈として説かれるもの(cf. 兵藤 [2000] p. 171, 281)が有名である。cf. Lessing and Wayman [1968] pp. 20-22, 高田 [1978] p. 8

48) この一文(sku nges pa mtshan dang dpe byad ldan //)は*bDe smon phyogs bsgrigs*版になく、ベチャから補った。五つの決定であるから当然必要である。

49) 〈大日經〉の五仏については[デルゲ版] 東北 No. 494, Tha. 162a3-5, [北京版] 大谷 No. 126, Tha. 126a7-b1, 大正 No. 848, p. 5aを参照のこと(cf. 頼富 [1990] pp. 150-154)。

そこでの五仏は中央大日、東方宝幢、南方華開敷、西方無量壽、北方不動(または天鼓雷音)であり、本作の五仏は〈金剛頂經〉系のものをも挙げている。また本作には、五仏の仏国土の名さえ挙げられているが、〈大日經〉〈初会金剛頂經〉においては、おそらく毘盧遮那を中心とした曼陀羅の建立が中心課題であるためか、四方の国土の記述はおろか名の言及さえ無いようである。〈初会金剛頂經〉における五仏は、中央の大日、東の不動、南の宝生、西の観自在王、北の不空成就である([初会金剛頂經] (D No. 479 Nya 5a4-5, 唐施護訳『仏説一切如來真実撰大乗現證三昧大教王經』大正 No. 882, p. 342b, cf. 頼富 [1990] pp. 188-194)。

このように〈大日經〉と〈金剛頂經〉の五仏を併記することは、各タントラの独自性ないし権威を重視する正統的立場からすれば逸脱とも言えようが、また無宗派運動(Ris med)の折衷的性格の反映と言えるかもしれない。

の華が積み重なった (238b) のものとして生じている。[その] それぞれの上に多くの国土 [がある]。そこにおける第十三 [番目の娑婆世界] の華の上⁵⁰⁾、その群れた葯、花蕊の各々の中、そこに無量の世界がある。その花蕊の中央の中 [に]、この国土の三千 [大千] 世界ができてい。ここには百千万 (百コーティ) のスメール山と、百千万 (百コーティ) の四 [大] 洲がある。それが一変化身の教化する国土 [である]。百千万 (百コーティ) の正尊釈迦牟尼 (iHa Shāka thub) と、百千万 (百コーティ) の尊者パドマ・サムバヴァ (rJe Pad 'byung, ca. 8c.)⁵¹⁾ が、法である経 (顕教) と真言 (密教) の [法] 輪を転ずる。この国土には優劣の誰もが生まれる。その類は〈華嚴経〉「入法界品」(sDong po bkod pa'i mdo)⁵²⁾、聖仙オギャン王 [インドラブー

50) cf. 注 52

51) 平松 [1982] p. 103 によると、トゥカン (Thu'u bkwan Blo bzang Chos kyi nyi ma. 1737-1802) の『一切宗義』(Grub mtha' thams cad kyi khungs dang 'dod tshul stong pa Legs bshad shel gyi me long) においても彼の伝記は一致しないことが多いと言われている。これは、彼が後世に、我が国の弘法大師のように神格化されて、多くの埋蔵経発見者たちがその名を借りて権威付けするなど、様々な仮託がなされたためである。その様々な伝記の研究については、A. M. Blondeau [1980] pp. 45-52 を参照のこと。

シャーンタラクシタ (Śāntarakṣita) が 770 年代にチベットに招かれてサムイェー寺を建立を始めたとき、土着の宗教者やそれを支持する権力者から色々と抵抗があったので、特に 773 年に彼を招いたとされる『バクサムジョサン』(Pag sam jon zang) の著者スムバケンポ (Sum pa mkhan po) によると、彼はチベットに 18 ヶ月ほど滞在して、その間に鬼神調伏、サムイェーの地鎮祭などをした。その後、ダミドディパ (Damidodripa) といわれるドディン ('Gro lding) の小島に行き、そこを仏教國にして、その後、猶牛洲 (rNga yab gling) に去ったという。cf. 平松 [1982] pp. 103, 126, 金子 [1982] pp. 40-43

52) [蔵訳] Sangs rgyas phal pho che zhes bya ba shin tu rgyas pa chen po'i mdo [デルゲ版] 東北 No. 44, Phal chen, [北京版] 大谷 No. 761, Phal chen

ここでは、〈華嚴経〉「入法界品」の原題 sDong po bkod pa (Skt. Gaṇḍavyūha) を文字通り承けた説明がなされている。しかし特にインド仏教では Skt. Gaṇḍavyūha をもって〈華嚴経〉の総称と受け取られた側面もあり、本作の所説が正確には何を指すかは不明である。この語義に関する議論は、梶山 [1994] pp. 444-448 にまとめられている。

通常、〈華嚴経〉の説く華嚴世界は「華嚴世界品」(cf. 唐実叉難陀訳『大方広仏華嚴経』大正 No. 279, pp. 39-53) に代表される。そこでは、「平等住」から「殊勝威光藏」までの多数の風輪の上に広がる香水海上に大蓮華 (種種光明藥幢大蓮華) があり、その花托の中央にさらに香水海 (無辺妙華光) が広がる世界観が示される。さらに、その香水海の中に世界種 (普照十方熾然宝光明) があり、その中に二十世界が重なっており、その第十三番目に我々の娑婆世界があるとされる。本作で説かれた華嚴世界は「華嚴世界品」との明確な対応関係が確認できないが、その理解の根拠となるものである。cf. 定方 [1984] pp. 37-60

また密教と〈華嚴経〉の関係は自明の理とされがちであるが、〈大日経〉と〈華嚴経〉の関連について、ゲルク派のケーデッブ・ジェ (mKhas grub dGe legs dpal bzang po. 1385-1438) による『タントラ概論』(rGyud sde spyi'i rnam, cf. Lessing and Wayman [1968] pp. 204-205) に次の説明がある。

(行タントラ (spyod rgyud) のタントラすべての中心は〈毘盧遮那現等覺タントラ〉であるが、それはどの説者がどの場所においてお説きになったのか [という] と、この勝者釈迦牟尼の受用身・毘盧遮那が、雪山の湖での華嚴莊嚴 (gzhi dang me tog gi rgyan gyis brgyan pa) の世界の有頂天・密厳処において説かれた。そのうち、華嚴莊嚴世界の莊嚴は、〈金剛手灌頂大タントラ〉に簡略が説かれているし、〈仏華嚴経〉に広汎に説かれている。そこでは、四洲の世界百千万をまとめたのを、三千大千世界一つ。それを百千万まとめたのを華嚴莊嚴世界の中の系 (rgyud) 一つ。それを百千万まとめたのをその広大な系一つ [とする]。それを百千万まとめたのを、華嚴莊嚴世界 [といい]、それが完成したものである)

cf. 高田 [1978] pp. 366-367, 酒井 [1962] pp. 135-143

ティ] (rje srong bTsan [po] O rgyan)⁵³⁾ 等により説かれた。

住处であるその密厳国土⁵⁴⁾ には、第八 [不動] 地以下 [の者] は生まれえない。それは智慧ダーキニー [・マチク]・ラブドンマ (Ye shes dakki Lab sgron) がお説きになった⁵⁵⁾。(p. 322) 内容は地道⁵⁶⁾ の説明すべてと一致する。[ニンマ派の] 仏説大究竟タントラ部 (bKa' rDzogs pa chen po'i rgyud sde)⁵⁷⁾ には、場所は火山尸林 (Dur khrod me ri 'bar ba) という。〈タントラ・マハーカーラ大血湯池〉(rGyud mGon po Khrag mtsho khol chen)⁵⁸⁾ には「吉祥大毘盧遮那尸林 (dPal rNam snang mdzad dur khrod)」という。

大毘盧遮那尊一 その前に [空間の] 虚空界に国土がある。地すべては猛毒の棘が生じている。屋は暴風、夜は火が燃える。山すべては骸骨の山であり、それは草木森林が武器として生じている。水すべては血膿の波が荒れている。そこには凶暴な猛獣

53) O rgyan は、A skya Yongs 'dzin による『道次第大論の表記註釈』(Lam rim chen mo'i brDa bkral, cf. 東北 No. 1569 Ka, The Collected Works of A-kyā Yongs 'dzin Volume 1, Lama Guru Deva, New Delhi 1971, Ka. 14a2) に、「U rgyan は Oḍḍiyāna, すなわち 'Phur 'gro というのである。[語形が] 崩れたので U rgyan と O rgyan と書く。インドラブーティ王が出現した国である」という。これについては羽田野伯猷「Tantric Buddhism における人間存在」(cf. 羽田野 [1987] pp. 69-71) に詳しい。同「秘密集タントラにおけるジュニャーナバーダ流について」(cf. 羽田野 [1987] p. 40) には、ジュニャーナバーダの修学の地について「中印をさる 230 由旬の北方 "Oḍḍiyāna" なる空行母加持の地」とある。その注 14 には「Oḍḍiyāna の地誌的位置につき学者に異論を存する。しかし、筆者の披見しえた限りにおいて、それは北印でなければならぬ。Kṛṣṇa-parāṇit, No. 1183, fol. 19b; Dharmakāśa, No. 1184, fol. 135; Bu-ston, Don-gsal, No. 4614, fol. 27f その他から知られるようにジャールランダラと共に北印の母タントラの中心地とせられる。もっとも後にいたれば、東印の Za-hor と混同せられ、母タントラの理想地として乱用せられるにいたった」という。

伝説では、オギャンの王ことインドラブーティ (Skt. Indrabhūti) 王はその妹ラクシュミー (Skt. Lakṣmī) とともに後期密教の母タントラの代表的な成就者の一人であり、父タントラの〈秘密集会タントラ〉(Guhyasamāja) も彼に啓示されたものであり、ニンマ派の祖パドマサンバヴァ (Skt. Padmasambhava) は彼の息子であり、〈秘密集会タントラ〉はインドラブーティ王から、バラモン出身でヴィクラマンラーの学頭サラハ (Saraha) ことラーフワパドラ (Rāhulabhadra)、彼からナーガールジュナへ継承されたものともされている。それら諸伝説と諸家の理解に関する検討は、羽田野伯猷「Tantric Buddhism における人間存在」を参照のこと (cf. 羽田野 [1987] pp. 56-74)。

54) 第八不動地に関する記述は〈密厳経〉([デルゲ版] 東北 No. 110, Cha.6a-b, 大正 No. 681, p. 724c, 大正 No. 682, p. 749b) に、菩薩は衆生を見ず實際を現証して、鉄を燃やした火のように涅槃してしまう場合に、如来がその三昧から立ち上がらせて第八地を越え、[第十] 法雲地を知り、仏の大性を味わって、如來自身の自内証の聖智が証得する行境の地に入り、遍行不動の三昧に住するようにさせるなどと、〈十地経〉を承けたと思われる記述がある。

55) 未確認。

56) Sa lam は、仏教における地と道の体系を扱った文献類であり、顕教と密教のものがある。僧院での修学に用いられることが多く、東北目録にもこの種類の文献は幾つか見られる。ニンマにも独自のものがあるが、具体的にどの典籍を指すのかは不明である。cf. 平松 [1982] pp. 116-117 注 45

57) cf. 金子 [1982]

58) ニンマ派の典籍と思われるが未詳。なおマハーカーラは觀自在菩薩の化身であるとする説もある。cf. 高田 [1978] p. 213

が好き勝手に争っている。(239a) その国土の中央にカパーラの無量宮 [がある]。それは〈忿怒 [明王] のマンダラの現観〉(*Khro bo'i dkyil 'khor mngon rtogs*)⁵⁹⁾ のように、「勇者具力童子尊 (lHa gZhon nu dpa' bo stobs ldan)」という、最勝大義の飲血 (Don che mchog Khrag 'thung)⁶⁰⁾ の六種族に、守護尊忿怒ダーキニーの衆が [いて]、そこに無上秘密真言の法輪を転ずる。その国土も不変で常住である。それは持明の地を得た者以外は、その国土に生まれることはありえないし、他のほとんどの有情はもちろんである。真言を持つヨーガ行者が行っても、そこでは恐怖し悶絶して逃走する。この頃の持明の地を得た [者であり]、業は猛烈な事業のみにより母なる有情を導く者たちは、その国土に生まれて秘密真言を行ずる。それは大持明者の国土である。そこに智慧と業を成就した護法の守護神すべてが住しておられる。その国土には光明が照るだけ [である]。住処は (p. 323) 清涼寒林 (bsil ba'i tshal)⁶¹⁾ と八 [大] 寒林 (dur khrod brgyad)⁶²⁾ [である]。名 (brda) のみの荘厳があると説きになった。そこには変化の護法神すべてが住しておられる。この頃は秘密真言を如理に行ずるが、それでも誓言 (三昧耶) を大いに破ったならば、住処の八 [大] 寒林と清涼寒林の女守護法神の眷属として生まれる。この頃、護法神の事業により、罪ある人を済度する者誰もが、それにより浄土 (dag pa'i zhing khams) [への往生] を (239b) 得るわけではないが、下の悪趣に住する誰をも見捨てないで、護法神個々の眷属として生まれる。それは授記の秘典⁶³⁾ などに出ている。

今この三千 [大千] 世界に関して、上の都率天の宮殿に、尊者摂政 [・当来仏] マイトレーヤ・ナータ (主) が住しておられる。この頃、律儀戒が清淨であり、法の聞思のみに勤める人が、その国土に [往生する] 誓願をたてたなら、いつか外呼気⁶⁴⁾ が絶えるやいなや、マイトレーヤ尊の眉間の白毫から、衣の袖のような白い光が伸び

59) 直接にこの題名の典籍は確認できない。

60) 母タントラの主尊ヘールカのことである。

61) マガダ国金剛座東南または東北にあるといわれている。cf. 金子 [1982] p. 49, 津田 [1987] pp. 134-152, 田中 [1997] pp. 70-80

62) cf. [1985] *Bod rgya tshig mdzod chen mo*, pp. 1265-1266 「dur khrod chen po'i brgyad」の項を参照。

(東の暴虐寒林 (gtul drag) と、北の密叢寒林 (tshang tshing 'khrigs pa)、西の金剛焰寒林 (rdo rje 'bar ba)、南の骨鎖寒林 (keng rus can)、東北の狂笑寒林 (drag tu rgod pa)、東南の吉祥寒林 (bkra shis tshal)、西南の幽暗寒林 (mun pa drag po)、西北の歌歌寒林 (ki li ki li'i sgra sgrog pa) を合わせて八つ)

cf. *dPal dur khrod rgyan pa'i rgyud kyi rgyal po* ([デルゲ版] 東北 No. 402, Ga. 235b4-5), *Dur khrod brgyad* ([デルゲ版] 東北 No. 1213, Ja. 314a4-5), 金子 [1982] pp. 36-40

63) lung bstan bka' rgya ma. 埋蔵経ないしそれに関係したものと思われるが、詳細は不明。

64) チベット医学でこれは呼吸器官を通した呼気、吸気をいう。「内呼吸」は外呼吸が絶えてから心臓の暖かさが絶えるまでのものをいう。

て、その人の頭頂に虹のように射し込む。心の明知はその光により包まれて引導される。住処の都率天の宮殿において、蓮華座の上に生まれる。眷属の七天女が常に供養する。尊者マイトレーヤ・ナータの法が説かれても、そこは喜悅・歌舞・遊戯に充ちている。未来の時、マイトレーヤがここに〔仏として〕出現なさるとき、彼らすべては〔都率天から〕死去して人として生まれ、再び出家し正法を聞く。尊者マイトレーヤ・ナータの教えが完了していないなら、彼は人から (p. 324) 人に生まれ教えを受持する。同じく賢劫の千仏そのすべてと出会って、正法を聞く。彼は千仏の教えの間、常時、人に生まれて教えを受持する。彼は、賢劫の千仏が〔教化を〕完了して、未来の時に「星宿 (Skt. nakṣatra)」の名がある劫が (240a) 成立する ―その国土に八万の仏が出現なさる― そのすべてのお顔を見て法を聞き、そのすべての教えを受持してから、その時から展転して仏陀〔の位〕を得る。それは〈マイトレーヤ授記経〉(Phags pa Byams pa lung bstan pa)⁶⁵⁾ に説明されている。

この頃は、都率天に生まれる要の廻向・誓願をなさった人が多い。内容は、無量の有情利益が成就し、勝者の教えを護持するために、身体おののの幾万もの生死に戦かないなら、住処は都率天の住処に〔生まれる〕誓願を得ている。法は〈弥勒誓願〉(Byams smon)⁶⁶⁾ の無執着な修証をなさってください。人である私も七年そのようにした。私は輪廻のこの苦を見るので、今⁶⁷⁾、生死おののの苦に戦く。法は〈弥勒誓願〉を置いて〈極樂誓願〉(bDe smon)⁶⁸⁾ を唱えた。住処は都率天の宮殿、それは小さな変化身の国土である。この住処から太陽が沈む南西の維、南瞻部洲の小さな羅刹国、住処は銅色山の山頂⁶⁹⁾、吉祥蓮華光の無量〔宮〕に、〔チベットを去った後、〕尊者オギャン・パドマサンバヴァ (rJe O rgyan Pad ma 'byung gnas) が住しておられる。眷属である持明者の十万のダーキニーに取り巻かれている。ニンマの法を行う人すべてと、その国土に誓願をたてる人は (p. 325) 多い。吉祥オギャン尊者への信解が甚だしいので、人である私の軌範師はその住処に住しておられる。人である私もまた若い時、そこに〔生まれることを〕誓願した。生まれ易い (240b) ので生まれない〔という〕怖れは無い。それでもなお良く思惟したことにより、その国土に生まれるさまは善し悪しの二つ〔がある〕。

すぐれた持明者・勇者ダーキニーの種族は、身は骨の六飾⁷⁰⁾、寒林〔八〕飾であり⁷¹⁾、身を望むものすべてに変える神変を持つ⁷²⁾。吉祥大オギャンの眷属しもべと僕は、普通の人には見えないし、体格を持っていない。そこに生まれたなら、秘密真言を实践する。直ちに喜悅し最後には成仏する。本当はそのようなものになったなら良い。

身は醜い〔不浄な〕肉食の羅刹の子、彼は羅刹であるから〔貪・瞋・痴・慢・嫉

65) 題名の一致する経典が〔蔵訳〕*'Phags pa byams pa lung bstan pa* (〔北京版〕大谷 No. 1011, Hu, [デルゲ版] なし。cf. [漢訳] 後秦鳩摩羅什訳『弥勒下生成仏経』大正 No. 454, 唐義浄訳『弥勒下生成仏経』大正 No. 455) として存在するが、直接に該当する記述はないようである。未来の弥勒成仏に関して、漢訳では大正 Nos. 452-457 の六経が「弥勒六部経」として有名である。チベット訳にもいくつか対応するものがある。未来仏としての弥勒(唯識瑜伽行派の開祖としての弥勒を除く)に関して、初期経典から大乘経典に至る記述は、渡辺[1966]に詳しい。

それら諸経の中で、劉宋沮渠京声訳『観弥勒菩薩上生兜率天経』(大正 No. 452, [蔵訳] *'Phags pa byang chub sems dpa' byams pa dga' ldan gnam du skye ba blangs pa'i mdo* [デルゲ版] 東北 No. 199 ←漢文蔵訳, [北京版] なし) のみが、釈迦牟尼仏の弟子マイトレーヤの兜率天往生、信者たちの兜率天往生を扱っている。そして、「観経」類の特徴として、兜率天の宮殿の天や天女や国土の莊嚴が描写されている。経典の終わり近くに、内容が比較的に一致する部分があるので、関連部分 (〔デルゲ版〕東北 No. 199, Tsa. 301a2-302a4, 大正 No. 452, p. 420a-c) を提示しておく。cf. 渡辺 [1966] pp. 107-108, 256-269, 雲井 [1992] pp. 78-81

(D 301a2) mi de dag ni 'di skad cig tsam du khrims brgyad mnos nas / sdig pa thams cad byang bar byed cing / smon lam btab nas / tshe'i dus byas pa'i 'og tu dper na skyes bu stobs dang ldan pa lag pa bricyang ba tsam du dga' ldan du skyes nas pad ma'i steng du skyil mo krung bcas nas / brgya phrag stong gi lha'i bus / lha'i rol mo byed cing / me tog man dā ra ba dang / man dā ra ba chen po 'thor zhing / legs so legs so // zhes bsgags pa brjod nas / rigs kyi bu khyod ni 'jam bu'i gling du bsod nams rgya chen po bsags nas / 'chi 'pho ba'i 'og tu / 'di ni dga' ldan gyi gnas zhes bya ba yin te / 'dir lha'i rgyal po byams pa zhes bya ba la / khyod skyabs su gsol / phyag 'tshol cig dang / phyag 'tshal na / smin mtshan kyi mdzod spu nas / 'od zer dkar pos reg par byas nas / bskal pa dgu bcu'i skye shi las gro'i zhing sdig pa 'byang bar 'gyur ro / de nas byang chub sems dpa'i rjes su 'thun pa'i yon tan gyis / ngo mtshar gyi chos bshad nas / brtson pa mi 'dor ba phyir mi ldog pa'i 'khor lo dang / bla na nied pa'i lam yid la sems pa de lta bu la sogs pa'i sems can sdig pa thams cad byang zhing / chos drug la spyod na / the tshom med par nges par dga' ldan gyi gnam du skyes nas / 'phags pa byams pa'i zhal mthong / byams pa'i zhabs 'bring byas nas / 'jam bu'i gling du dang por chos thos (301b) nas / ma 'ongs pa'i bskal pa 'di nyid kyi sangs rgyas dang / bskal pa skar ma lta bu'i sangs rgyas thams cad kyi yang zhal mthong nas / sangs rgyas de dag thams cad kyi drung du byang chub tu lung ston pa thob par 'gyur ro // u pa li / de bzhin gshegs pa mya ngan las 'das pa'i 'og tu / dge stong dang / dge lung ma dang / lha dang / klu dang / gnod sbyin dang / dri za dang / lla ma yin dang / nam mkha' lding dang / mi 'am ci dang / lto 'phye chen po la sogs pa 'khor thams cad las / gang la la zhiig byang chub sems dpa' sems dpa' chen po byams pa'i mtshan thos nas dga' ba dang / gus par phyag 'tshal ba'i mi de dag / tshe'i dus byas nas / se gol gtogs pa tsam du gong ma ci lta ba bzhin du / byams pa'i mtshan thos nas tshe'i dus byas pa'i 'og tu / mun pa'i kham su mi ltung / mtha' 'khob kyi yul dang / log par lta ba dang / mi dge ba thams cad spyod par mi skye / skye ba thams cad du drang por lta ba dang / 'khor phun sum tshogs pa dang / dkon mchog gsum la mi smod par skye'o // u pa li / rigs kyi bu dang / rigs kyi bu mo gang la la zhiig // sdom pa bshig pa dang / sdig pa mi dge ba'i las byas pas / byang chub sems dpa' thugs rje chen po'i mtshan thos pas / mtshan nas brjod cing / yan lag lnga gtugs te / sems rtse gcig tu bshags na / sdug pa thams cad myur du byang nas ma 'ongs pa'i dus kyi sems can thams cad / byang chub sems dpa' thugs rje chen po'i mtshan brjod pa dang / sku gzugs bris nas / spos dang / me tog dang / gos dang / gdugs dang / rgyal mtshan dang / ba dan dang / phyag 'tshal zhing / yid la zlos na / mi de dag tshe'i dus byas pa tshe na / byang chub sems dpa' byams pas / mi chen po'i mtshan smin mtshams kyi mdzod spu nas / 'od dang / lha'i bu thams cad kyi / mandāra ba'i char phab nas / mi de dag bsus nas / skad cig yud tsam gyis lha'i gnas su skyes / 'phags pa byams pa'i zhal mthong nas / gdong dang spvi bos phyag 'tshal nas / de ma thag tu chos thos pa dang / bla na med pa'i byang chub kyi lam thob pa dang / phyir mi ldog pa'i 'khor lo dang / ma'ongs pa'i dus kyi tshe / de bzhin gshegs pa gang gā'i klung gi bye ma snyed kyi de bzhin gshegs pa mthong bar 'gyur ro // u pa li / khyod rtse gcig tu nyon la yid la gyis shig // byang chub sems dpa' byams pa zhes bya ba la / ma 'ongs pa'i sems can thams cad skyabs su 'gro ba na / gang la la zhiig skyabs su 'gro ba'i mi de dag ni / bla na med pa'i lam dang / phyir mi ldog pa'i 'khor lo 'thob nas / byang chub sems dpa'i byams pa / de bzhin gshegs pa dgra bcom pa yang dag par rdzogs pa'i sangs rgyas pa'i dus kyi tshe / mi de dag de bzhin gshegs pa'i 'od zer mthong nas / lung bstan pa thob par 'gyur ro / u pa li / de bzhin gshegs pa mya ngan las 'das pa'i 'og tu 'khor bzhi po dang / lha dang / klu dang / gnod sbyin la sogs pa gang la la zhiig dga' ldan gyi gnas su skyes pa'i dus kyi tshe / 'di lta bita bar bya ste / dga' ldan yid la byed pas / de bzhin gshegs pa'i sdom pa blangs nas / nyi ma gcig gam / nyi ma bdun gyi bar du / dge ba bcu yid la byed pa dang / dge ba bcu'i lam la spyod pa'i bsod nams de dag / byams pa'i mdun du bsngo zhing smon lam btab de dag ni / lta de dag gi lha'i bu mthong ba dang / pad ma mthong bar 'gyur ro / (302a6)~

の』五毒が大きい。尊者オギャンのお顔を見てお言葉を聞いても、彼は『世間の』王であると思って信仰が小さい。彼がお説きになったとおりに修証しないで悪行するなら、処罰されるので信仰が止むこともありうる。

概して苦楽、寿命の長短など、それは『この世界の』島国であるからにこと似ている。乏しい福分をもった者がありうるなら、尊者オギャンが加持・灌頂して、『あなたはここに在るべきでない。チベットに往きなさい。法を行じて衆生利益が生じよう』と云って、居たいと思っても不自由がありうる。

66) chos (法) として聖典扱いしていることから、『ゲルク版』東北 No. 1096, Wam, 'Phags pa Byams pa'i smon lam (〔漢訳〕唐王布查布訳『仏説弥勒菩薩発願王偈』No. 1144) のことかと思われる。〈弥勒誓願〉はその中に例えば、『現在と過去と未来の〔円満なる〕正等覺 一彼らに従って私は學んで菩薩行を行じよう！六波羅蜜を完成させて六道の有情を済度しよう！六神通を現証して無上正等覺に触れよう！(rdzogs pa'i sangs rgyas gang bzhugs dang // gang dag 'das dang ma byon pa // de dag rjes su bdag slob cing // byang chub spyad pa spyod gyur cig // pha rol phyin drug rdzogs bgyis nas // 'gro drug sem can thar bgyid shog // mngon shes drug po mngon bgyis nas // bla med byang chub reg gyur cig //) などとあるように、救済されることへの願いではなく、自らが菩薩行を行おうという願いが多く謳われている。チベットでは大乘願教の修学を中心として、他のどの大乘經典でもなく、弥勒の〈現觀莊嚴論〉を通じて〈般若經〉が學習されることから、当来仏弥勒とその都率天への信仰が盛んであり、それもある、この〈弥勒誓願〉は有名であり、『ゲルク派の九誓願集』にも取り入れられている。すなわち以下の通りである。

1. Byang chub sems dpa'i ltung ba bshags pa (菩薩墮過懺悔, [ラサ版] 東北 No. 6939)
2. 'Phags pa bzang po spyod pa'i smon lam gyi rgyal po (聖賢行誓願王, [ラサ版] 東北 No. 6940)
3. 'Phags pa byams pa'i smon lam (聖弥勒誓願, [ラサ版] 東北 No. 6941)
4. Byang chub sems dpa'i spyod pa la 'jug pa (入菩薩行, [ラサ版] 東北 No. 6942)
5. Thog miha' ma (初中後品, [ラサ版] 東北 No. 6943)
6. bDe smon (最上國開門, [ラサ版] 東北 No. 6944)
7. Ji srid thub mchog ma (『およそ最勝牟尼云々』をもってはじまる誓願文, [ラサ版] 東北 No. 6945)
8. Byams pa'i sku gzugs ma (弥勒色身品, [ラサ版] 東北 No. 6946)
9. bDe chen thun grub ma (大樂自然成就品, [ラサ版] 東北 No. 6947)
- 67) bDe smon phyogs bsgrigs 版は da (今), ベチャは nga (私は) と読める。
- 68) 宗派の違いを考えるなら、上記の『九誓願集』のうちツォンカバ造 bDe smon (最上國開門, [ラサ版] 東北 No. 6944) ではなく、著者自身の著『清淨大樂國土誓願』をいうのである。その場合、注記で逐一示したごとく両者には対応関係があるので、『清淨大樂國土誓願』を承けて本著は造られたものと言えよう。
- 69) cf. [1978] *The Life and Liberation of Padmasambhava Padma bKa'i Thang Part II*, p. 736
- 70) cf. [1985] *Bod rgya tshig mdzod chen mo*, p. 2713 「rus pa'i rgyan drug」の項。
(首飾りと、胸飾り、耳飾り、頭飾り、肩から腋に細繩を交差し結ぶ梵繩、骨灰であり、密教の瑜伽行者が裝飾する六つの骨飾り)
- 71) cf. [1985] *Bod rgya tshig mdzod chen mo*, p. 1265 「dur khrod kyi chas brgyad」の項。
(人頭の頭飾と、人頭の首飾りと、大象の皮膚の短衣、十惡人の全ての皮膚、虎皮の下着、人脂の脂粉、血液の滴、骨灰の固まりを合わせて八つ)
- 72) 〈菩薩地〉(*Bodhisattvabhūmi*) の「威力品」には、仏菩薩の「威力 (Skt. prabhāva)」を略(三)、広(五)に分けて説き、後者の五種威力の第一に「神通威力 (Skt. abhijñāprabhāva)」が挙げられ、それをさらに開いて六神通が提示される。そのうち第一の神通通(玄奘訳「神境智作證通」)に関する能化[通] (Skt. nairmāṇiki) では、教化を意図した身体の変化、語の変化、境の変化の定義が説かれる。cf. 中御門 [2004]

人の私はこの生死に戦く。あなたは生死の苦に戦かないし、吉祥尊者パドマサンバ
 ヴァに信が甚だしいので、およそお説きになった義をお言葉のとおり修証したなら、
 その〔羅刹の国である〕猫牛洲に〔生まれる〕誓願を得た。それは小さな変化身
 の国土である。(p. 326) そこに生まれた一切有情は、(241a) 時は賢劫の間ほどに
 〔住するし〕、住処は不定でありどこにも生まれうる。最後に極楽 (bDe ba can) に生
 まれる因である。その義はツォサンバ (Tsho gsang ba) の行状伝⁷³⁾と尊者ランドォ
 (Lang gro) 翻訳師の問答⁷⁴⁾に出ている。

この頃、〔オーン マニ パドメー フーン (om maṇi padme hūm) の〕六字〔真
 言〕⁷⁵⁾を唱える人すべては、住処はポタラ (普陀落) に〔生まれる〕誓願をたてる。
 本尊の成就法の或るもの⁷⁶⁾にそのように説明している。インドの言語 (rgya dkar po'i
 skad) では「ポタラ (Potala)」, チベット語では「リボ・ドゥジン (Ri bo Gru
 'dzin)」である。それは国土ではなくて住処の山である。業の清浄な者たちの現れの
 面には、山頂にある宝の無量宮。〔その〕座の蓮華・日月〔輪〕を積んだ上〔に〕、
 主尊の観自在菩薩〔がいる〕。眷属の持明者のダーキニー、天・龍が取り巻く。山
 の中腹にある宝無量宮に、金剛忿怒仏母 (Khro gnyer can) と馬頭 (rTa mgrin) 等、山
 麓における宝無量宮に、白ターラ尊・青ターラ尊 (sGrol ma dkar sngon) 等が住し
 ておられる。それは不浄な迷乱の現れの面には、千万の山、大山の栴檀林、〔その〕
 頂上にある自然岩の仏殿の中に、尊カサルパニ [(Kha sar pa ni) 世自在]⁷⁷⁾が自然に
 〔成就し〕、身体は八歳の子供程度のものを持っている。裏の瑠璃の岩山に、溶けた銀
 の自然の六字〔真言〕がある。彼は直接に往ってまた会うことで充分である。それは

73) 未詳。

74) ランド・コンチョクジュンネ (Lang gro dKön mchog 'byung gnas, ca. 8-9c.) のことかと思
 われる。彼はティンソ・デジュン王の官僚の一人であったが、梵語を学び仏典の翻訳に加
 わった。パドマサンバヴァに師事して成就を得た。ラトナ・リンパ (Ratna gling pa), ロン
 サル・ニンポ (Klong gsal sNying po), ジェドゥン・ティンレ・チャンバジュンネ (rJe drung
 Phrin las Byams pa 'byung gnas) 等は彼の生まれ変わりとされる。cf. [1995] *Masters of
 Nyingma Lineage*, p. 58

75) *Za ma tog bkod pa* (Skt. *Karaṇḍavyūha*, [デルゲ版] 東北 No. 116, Ja, [北京版] No. 784,
 Chu, 宋天息災訳『大乘莊嚴宝王經』大正 No. 1050) は、観自在菩薩の六字真言 (om maṇi
 padme hūm) を説く経典として有名である (この真言の象徴する意味はクンチョック, ソナ
 ム, 齊藤 [1995] p. 273 注 143 に詳しい)。この経典は、チベットの伝説では仏教伝来以前に
 5世紀のトトリ・ニョンツェン (Tho tho ri gNyan btsan) 王の時代に天空から降ってきた経
 函の中にあつたものであり、後にトンミ・サンボータ (Thon mi Sambhota) がインドに派遣
 されてチベット文字が創られた時、最初に翻訳された経典の一つである。六字の成就法類と
 しても、[デルゲ版] 東北 Nos. 3151, 3152, 3405, 3406, 3408 などがある。

cf. 大谷大学図書館 [1930-1932] p. 285, E. Obermiller [1932] pp. 181-182, 木村 [1987]

76) cf. 佐久間 [1996]

77) 「空行」を意味するものとされており、観自在菩薩の姿の一つである。cf. 佐久間 [1995]
 pp. 17-18

優婆塞〔・鉄の足をもつ〕チャクキーキャンパ (lCags kyi rkyang pa)⁷⁸⁾、尊者リン
チェン・リンパ (Rin chen gling pa. 1403-1478) の行状伝⁷⁹⁾ に出ている。

〈最勝楽〔タントラ〕〉(*bDe mchog*) の金剛亥母 ([rDo rje] Phag mo, Skt. Vajravārahī) を本尊とする人は、西のオギャン国に生まれることを誓願する。それは国土ではなくて (241b) 住処の山である。業が清浄な者によれば、尸林の無量宮の中央の、最勝楽の父母尊が直に (p. 327) 住しておられる。眷属は十万コーティの勇者ダーキニー〔である〕。業の不浄な〔者の〕迷乱の現れの面には、住処の自然の岩の仏殿の中、仏説のタントラ部 (bKa' rGyud sde) すべてが蔵にまします。一人の人もいない女洲、そのすべては空行者の種族といわれる。そこに生まれる仕方は猫牛洲と等しい。

〔巡礼地として有名な、〕東はシナの〔文殊菩薩の霊場〕五台山 (Ri bo rtse lnga) と、南は〔チャクラサンバラの霊場〕最高の住処である吉祥ツェリ (Tsa ri)⁸⁰⁾、西は白雪の雪山 (Ti se) 王たち〔がある〕。〔それらは〕業が清浄な〔者の〕現れの面には無量宮〔としてある〕。無量の勇者・空行尊が住しておられる。自己は勇者・空行者の身を受けてから、長期には劫が完了するまで、短期には各仏の間、自己は虹身 ('ja' lus) 〔を得て〕勇者・空行者として生まれている。それは小さな空行者の国土である。道〔として〕は秘密真言を实践する内面の成就を得た者は、ほとんどそのように住しておられる。業の不浄な有情はそこに往っても、主尊を見ないし森・雪山〔のみを見る〕。往ってもほとんどが見ないで疑う。そのために私も欲することは無い。あなたフォンドゥ・ギャムツォはどのようにお考えか。

北の〔『時輪タントラ』所説の〕シャムバラ (Sham bha la)⁸¹⁾ といわれるものは、

78) 未詳。

79) テルトン・ラトナ・リンパ (gTer ston Ratna gling pa. 1403-1478) cf. Don rdor dang bsTan 'dzin chos grags [1993] pp. 505-506

この埋蔵経発掘者もバドマサンバヴァの化身とされている。チャクメーと同じく、本作に名を出すカルマ黒帽シマ6世トンワ・トンゲン (mThong ba don ldan) から受法している。二十五の埋蔵経を発見したほか、各僧院などに散在していた希少な古タントラを探し求めて、『古タントラ全集』(*rNying ma'i rgyud 'bum*) に集成した。彼の弟子は全チベットに満ちたといわれる。また長寿を願うラトナ・リンパの『撰壽』(Tshe 'gugs) の法は、チャクメーの生誕時に父親が修法したとされるように、チャクメーと関係が深い。

cf. George N. Roerich [1953] p. 426, 439, 金子 [1982] pp. 2-6, Tsering Lama Jampal Zangpo [1988] p.36, Dudjom Rinpoche [1991] pp. 744-745, Gyurme Dorje and Matthew Kapstein [1991] p. 69

80) *bDe smon phyogs bsgrigs* 版は tsa ri na, ベチャには tsa ri tra とある。「雑日山」と漢訳される。

81) (時輪タントラ) は、イスラム教の侵攻と破壊に備えて、金剛乗のもとでカーストを廃止し、仏教徒、ヒンドゥー教徒、ジャイナ教などインドの諸宗教を統合し、最終的には仏教が勝利し、再び隆盛することを、主要な内容としている。その中心地であり、現在隠れられている仏教王国がシャムバラである。cf. 田中 [1994] pp. 68-69

内容はインドと等しく人の国である。そこに変化〔身〕の王は途絶えない。法は〈時輪〉(*Dus kyi 'khor lo*) が盛んであるが、(242a) 寿命の長短・苦楽はここと似ている。

ボン教徒 (Bon rnam) が誓願をたてる仕方は、住処の〔ボン教の本源地〕シャ・ン・シュン (Zhang zhung) 国⁸²⁾ に生まれることを誓願する。それは雪山 (Ti se) の後方、チベット国である。ボンは盛んであるが、苦楽はここと似ている。(p. 328) そのために国土の選択を誤らないでください。

この地から、西方に、数はガンジス河の沙ほど、それを過ぎた世間の辺際に、この国土より上にある⁸³⁾ 勝れた地、西の極楽世界 (bDe ba can gyi zhing khams) がある。そこにおいて安楽・幸福は驚くほどであり円満である。不善の業・苦という名さえもない⁸⁴⁾。かつて、無量光 ('Od dpag med) の誓願の力によって⁸⁵⁾、その国土に〔生まれるよう〕誓願をたてたなら、五無間罪〔の者〕と法を棄てた者以外は、誰もが生まれるとお説きになった。因は最上正覚へ発心し、十善〔業〕道・広大な福德を積ん

82) シャンシュン (Zhang zhung) 国は、この世界の四大大河の源流があるとされる西チベットのマナサロワラ湖とカイラサ山を含む地域であると言われる。ボン教は仏教伝来以前のチベットの土着宗教とされるが、近頃のヨーロッパの研究者にはむしろギルギット・フンザにまで拡大して考えようとする傾向もある。伝説では、開祖シェンラブ・ミボチェ (gShen rab mi bo che) はシャンシュン国のオルモルンリン ('Ol mo lung ring) に生まれた。彼は仏陀の化身であり、釈迦牟尼と同時代の人であるともされる。

cf. G. Tucci [1980] p. 214, 菅沼 [1985] pp. 469-470, 御牧 [2003] p. 126

83) この箇所では西方の上側に極楽世界を設定する。〈宗要経〉には極楽世界を上方の世界とするものと西方の世界とするものがあり、方向の混在が見られるが、本著はその折衷なのであるうか。(宗要経) の一本には、「文殊よ、上方に無量功德等というある世間がある」と説かれる。

〔蔵訳〕'Phags pa tshe dang ye shes dpag tu med pa zhes bya ba theg pa chen po'i mdo (〔デルゲ版〕東北 No. 849, gZung 'dus, E. 57a2, 〔北京版〕大谷 No. 361, rGyud, Ba. 244a1 等, 〔梵本〕cf. 池田 [1916] p. 551, 〔漢訳〕失訳『大乘無量寿経』大正 No. 936, p. 82a) cf. 藤村, 中御門 [2004] p. 49 注 15

一般的には極楽世界は西方に設定される。対応する蔵訳〈無量寿経〉は以下の通りである。cf. 『浄土宗全書』23, p. 262

〔かの如来は〕ここから西方の百千 koti・ナユタの仏国土〔を過ぎた〕極楽世界における如来・応供・正等覚無量光という者であり、無量の菩薩・摩訶薩が圍繞し面前で仕えており、〔極楽世界は〕無辺の仏国土の円満を具えている)

梵本、漢訳の対応箇所は以下の通りである。

〔梵本〕cf. Ashikaga [1965] p. 26, l. 15

〔漢訳〕伝呉支謙訳『仏説阿弥陀三耶三仏薩樓仏檀過度人遺経』(大正 No. 362, p. 303b), 伝後漢支婁迦讖訳『仏説無量清浄平等覺経』(大正 No. 361, p. 282c), 伝曹魏康僧鑑訳『仏説無量寿経』(大正 No. 360, p. 270a), 唐菩提流支訳『大宝積経』「無量寿如来会」(大正 No. 310-5, p. 95c), 法賢訳『仏説大乘無量寿莊嚴経』(大正 No. 363, p. 321c)

その他(般舟三昧経)にも西方極楽世界が説かれる (cf. 注 92)。なお著者チャクメーによる『清浄大衆国土誓願』(cf. bDe smon phyogs bsgrigs stod, p. 217) では「ここから太陽が沈む方向へ、無数多くの世間の彼方の、少しばかり上にある聖なる国土に清らかな極楽世界があり」とあり、本著と同じである。

だ。そのすべてをその国土に生まれるために廻向する。一心不乱の信仰により、その国土に生まれる廻向・誓願を、十回ほど為したことにより生まれるとお説きになった⁸⁶⁾。「それは真実でない」と疑うのなら、その国土に生まれても、五百年にわたり華が開かない。そこで安楽・幸福の受用を具えて、無量光尊のお言葉を聞くけれども、五百年にわたりお顔を見ることが遅れるであろう。そのために疑いを棄ててください⁸⁷⁾。あなたはその国土に「生まれる」誓願を得た。あなたは(242b)臨終時に、明知をそこに向けてください。あなたはそれに疑いが生じたなら、法⁸⁸⁾の〈宝積経〉の「第五」品(*dKon mchog brtsegs pa'i le'u*)⁸⁹⁾、法の〈無量光経〉(*'Od mdo*)・〈大楽国土莊嚴経〉(*bDe chen zhing bkod mdo*)⁹⁰⁾、法の〈白蓮華経〉(*Padma dkar po'i mdo sde*)⁹¹⁾と、法の〈現在仏立三昧経〉(*Da lta'i sangs rgyas bzhugs mdo*)⁹²⁾と、〈吉祥無死鼓音声ダラニ〉(*dPal 'Chi med rnga sgra'i gzungs*)⁹³⁾等、書籍、(p. 329)経函をよく見て、[受けがたき人身を受け、有暇・具足を得た]時は現在、自由が大きなこの機会に、時は現在、国土をよく選択⁹⁴⁾し、そこに往くコーティの食糧の準備に入り、そこに往くことに障碍がないようなさってください。

エマホ。へへ。息子の比丘ツォンドゥ・ギャムツォが、その国土の功德は何なのかという。吉祥なコーティ・ナユタの仏の八十一[倍の仏]国土の莊嚴・功德が[法藏比丘により]一つに撰取された⁹⁵⁾。母なる六道のあらゆる有情―彼らすべてが仏

84) 〈無量寿経〉に対応箇所がある。特に〈無量寿経〉の誓願文は〈悲華経〉にも出ている。

対応については宇治谷 [1969] pp. 51-56 を参照されたい。

ここで対応する蔵訳〈無量寿経〉は以下の通りである。

a) cf. 『浄土宗全書』23, p. 240, 16 願

(世尊よ、もし私が菩提を得る時、かの仏国土において、衆生たちに不善の名が存在するなら、その限り私は決して無上正等覺を円満に証覺致しません)

梵本、漢訳の対応箇所は以下の通りである。

[梵本] cf. Ashikaga [1965] p. 13, 1.14, 16 願

[漢訳] 伝曹魏康僧鎧訳(大正 No. 360, p. 268a, 16 願)、唐菩提流支訳(大正 No. 310-5, p. 93c, 16 願)、宋法賢訳(大正 No. 363, p. 319c, 12 願)

b) cf. 『浄土宗全書』23, p. 280

(アーナンダよ、極樂世界には不善という名称はない。障礙という音声もない。惡趣、惡[趣の]衆生に墮ちるという音声もない。苦という音声も生じない)

梵本、漢訳の対応箇所は以下の通りである。

[梵本] cf. Ashikaga [1965] p. 36, 1.18

[漢訳] 伝曹魏康僧鎧訳(大正 No. 360, p. 271b)、唐菩提流支訳(大正 No. 310-5, p. 97a)、宋法賢訳(大正 No. 363, p. 322c)

『清浄大楽国土誓願』(cf. *bDe smon phyogs bsgrigs* stod, p. 228)にも「八無暇と惡趣の言葉は知られておらず、煩惱の五毒や三毒や、病と魔や、敵と貧窮、争い等、あらゆる苦をその国土で耳にすることはなく(経験せず)～」という。

85) *bDe smon phyogs bsgrigs* 版は *smon lam mthu'i*、ベチ+は *smon lam mthus* である。後者を採用。

- 86) 対応する蔵訳〈無量寿経〉(19 願)は以下の通りである。cf.『浄土宗全書』23, p.242 (世尊よ、もし私が菩提を得る時、無数無量の諸仏国土において、衆生たちが私の名前を聞いてから、かの仏国土に生まれるために心を起こしながら、諸善根をも廻向するなら、――
[五] 逆罪をなした者と正法を断つ障礙によって覆われた衆生らを除き――少なくとも十
[回] 心を生ずることによって、かの仏国土に生まれない限り、私は決して無上正等覺を円満に証覺致しません)

梵本、漢訳の対応箇所は以下の通りである。

〔梵本〕cf. Ashikaga [1965] p. 14, l.2, 19 願

〔漢訳〕伝真支謙訳(部分的に一致:大正 No. 362, p. 301b, 4,5 願)、伝後漢支婁迦讖訳(部分的に一致:大正 No. 361, p. 281b-c, 17, 19 願)、伝曹魏康僧鑑訳(大正 No. 360, p. 268a, 18, 20 願)、唐菩提流支訳(大正 No. 310-5, p. 93c, 18, 20 願)

『清浄大樂園土誓願』(Skt. *saddharma pratikṣepavarāṇa*, Tib. *chos spong ba'i sgrib pa*) p. 219) にも「法を断つこと、[五] 無間[罪]をなした者を除き、あなたを信じ誓願をたてた限りの全ての者が、極樂に生まれる誓願を成就しています」という。

なお「正法を断つ障礙」(Skt. *saddharma pratikṣepavarāṇa*, Tib. *chos spong ba'i sgrib pa*) は、中国、日本では「謗法する障」と理解されることが多い。〈無量寿経〉との関係でいえば、伝曹魏康僧鑑訳の「唯除五逆謗法正法」(大正 No. 360, p. 268a) に依る理解が広まったためと思われる。例え、〈無量寿経〉梵本からの和訳(cf. 中村、早島、紀野 [1963] p. 38, 312) にも「正法を謗する(煩惱の)障礙」と訳される。その一方、チベットでは伝統的に梵本の読みを反映した、「法を捨てる[大きな業]障」と理解されることが多い。ジョンカバの『道次第大論』(*Lam rim chen mo*, cf. ツルティム [2004] pp. 17-20, 青海民族出版社版 pp. 19-20) から紹介すると――

「Padma dkar po (法華経※1) に説明されているように、仏説すべてが直接と間接により仏陀となる方便を教えることを了解しなくて、或るものは仏陀となる方便、或るものは仏陀となることの障碍だと取らえて、善し悪しと合理・非合理と大小の業に分けていて、「菩薩はこれを学ぶことが必要だが、これを学ぶことは不要だ」と、捨てるべきものと取らえたなら、法を捨てることになるのです。〈一切法] 方広撰持経」※2に、「マンジュシュリーよ、正法を捨てる業障は微細です。マンジュシュリーよ、如来が説かれた言葉の或るものは良いと想うが、或るものは悪いと想う者は、法を捨てるのです。法を捨てる者は法を捨てたことにより、如来を誹謗するのです。僧伽を悪く言うのです。「これは道理だ」「これは道理でない」と言うなら、法を捨てるのです。「これは諸菩薩のために説かれた」「これは諸声聞のために説かれた」と言うなら、法を捨てるのです。「これは諸独覺のために説かれた」と言うなら、法を捨てるのです。「これは諸菩薩の学でない」と言うなら、法を捨てるのです」と説かれています。法を捨てたなら、その過ちがきわめて重いことは、〈三昧王経」※3に、「この瞻部洲において仏塔すべてを破壊したのより、契経を捨てるその罪は極めてまさっています。ガンジス河の砂ほどの[無数の]阿羅漢を殺したのより、契経を捨てるその罪は極めてまさっています」と説かれています。一般的に、法を捨てるが生ずることについては、多くの門に見られるけれども、前に説いたこの門は最も大きいと見られるので、勤めることにより断つべきです。それも前に説いたような決定を得たことのみにより、退けることになるので、悪行(罪過)は自ずと減することになるのです。その決定は、〈諸者品」と〈法華経」を多く見ることから求めるべきです※4。法を捨てることの他の諸門は〈一切法] 方広撰持経」から知るべきです」とある。

またハリバドラ (Haribhadra, ca. 800) の〈八千頌の大註釈」(Skt. *Abhisamayālamkāraśāstra*, Tib. *brGya stong 'grel chen*) には「正法の障」という用例もあり (cf. 蔵訳 [デルゲ版] 東北 No. 3791, Cha. 279a4-7, [北京版] 大谷 No. 5189, Cha. 348a4-b1, [梵本] U. Wogihara [1932] pp. 778-779), 『道次第大論』の四割註の合條『*Lam rim chen mo'i mChan bzhi sBrags ma*』ではそれを「法を捨てる強力な正法の障」と解釈している (cf. Reproduced from a Print of the Corrected Tshe-mchog-gling Blocks of 1842 by Chos-'phel-legs-ldan, Volume One, New Delhi 1972, [ラサ版] 東北 No. 6977, Ka. 186a)。

※1 [蔵訳] *Dam pa'i chos pad ma dkar po zhes bya ba theg pa chen po'i mdo* [デルゲ版] 東北 No. 113, Ja. 20a1, [梵本] Kern and Nanjio [1977] p. 45, [漢訳] 姚秦鳩摩羅什訳『妙法蓮華経』大正 No. 262, p. 8a2-4, [和訳] 松壽、長尾、丹治 [1975] p. 59, 中村 [1995] p. 45)

※2 [蔵訳] *'Phags pa rnam par 'thags pa thams cad bsdus pa zhes bya ba theg pa chen po'i mdo* [デルゲ版] 東北 No. 227, Dza. 186a6-b1, [北京版] 大谷 No. 893, Tshu. 196b4-7, [漢訳] 西晉竺法護訳『仏説諸法華等学経』大正 No. 274, p. 378a7-14, 隋毘尼多流支訳『大乗方広総持経』No. 275, p. 382b12-17

※3 [蔵訳] Chap. 18, vs. 31-32; *'Phags pa chos thams cad kyi rang bzhin mnyam pa nyid rnam par spros pa ting nge 'dzin gyi rgyal po zhes bya ba theg pa chen po'i mdo* [デルゲ版] 東北 No. 127, Da. 66a6, [北京版] 大谷 No. 795, Thu. 70b7-8, [梵本] Vaidya [1961] p. 130, [漢訳] 高齊那連提耶舍訳『月燈三昧経』大正 No. 639, p. 573c9-12, [和訳] 田村 [1975] p. 308

※4 [蔵訳] 松壽、長尾、丹治 [1975] pp. 60-61, 中村 [1995] pp. 46-47) と、[蔵訳] *'Phags pa byang chub sems dpa'i spyod yul gyi thabs kyi yul la rnam par 'phrul ba bstan pa zhes bya ba theg pa chen po'i mdo* [デルゲ版] 東北 No. 146, Pa. 94b6-95a2, [ベキソ版] 大谷 No. 813, Nu. 50b3-7, [漢訳] 劉宋求那跋陀羅訳『仏説菩薩行方便境界神通變化經』大正 No. 271, p. 305a14-20, 元魏菩提流支訳『大薩婆尼乾子所説經』大正 No. 272, p. 325c15-20

陀になって、期間は劫以上の間〔にわたって〕その国土の功德を説いても、それを完全に述べることはできないと説かれた⁹⁶⁾。それを私がどうして述べることができるだろうか。

西の極楽世界 (bDe ba can gyi 'jig rten khams), それは成立が有るが滅は無い。かつて過去の無数の仏陀が出現された。時は今、無量光が住しておられる⁹⁷⁾。時はいつ〔になって〕も変移・盛衰が無い⁹⁸⁾。広さは不可思議で無数である。そこには八難の処は〔その名を〕聞かれることがない⁹⁹⁾。

87) 対応する蔵訳〈無量寿経〉は以下の通りである。cf.『浄土宗全書』23, p. 312

(弥勒よ、このように〔極楽往生への〕疑いに墮ちることによって、善根を生じつつ仏の無等智と平等智に対して疑惑を抱く菩薩たちが、仏名を聞くそのことと確固とした澄浄な心によってかの極楽世界に生まれるとしても、諸蓮華に結跏趺坐しながら化生し現れるのではない。しかし諸蓮華の胎に住居を受ける。彼らはそこから花園と無量宮について表象しながら住する。大小便はなく、唾はなく、鼻水はなく、心にそぐわないものは現れないが、五百年間において仏を見ることと、法を聞くことと、菩薩を見ることと、充分な法談を決定することと ('bel ba'i chos kyi gtam rnam par nges pa), あらゆる善法の実践を離れており、彼らはそこで歓喜せず喜悅を得ないが、以前の罪が尽きてから彼らは諸蓮華の胎から現れて、彼らはそこから現れ終わっても上〔に出る〕か、下〔に出る〕か、側面〔に出る〕かわからない)

梵本、漢訳の対応箇所は以下の通りである。

〔梵本〕cf. Ashikaga [1965] p. 59, 1.17,

〔漢訳〕伝曹魏康僧鑑訳 (大正 No. 360, p. 278b), 唐菩提流支訳 (大正 No. 310-5, p. 100b),

宋法賢訳 (大正 No. 363, p. 325c)

『清浄大楽国土誓願』(cf. bDe smon phyogs bsgrigs stod, p. 225) にも「〔極楽世界への〕不生を怖れる疑いによって、五百年にわたって安楽歓喜の享受を具えたその中で、仏のお言葉を聞くのであって、花の口が開かないので、仏の御顔を拝謁することが〔五百年〕後になる過失がある。そのようなことが私に起こりませんように〜」という。

88) 『清浄大楽国土誓願』奥書き (cf. bDe smon phyogs bsgrigs stod, p. 232) にも「〔この典籍は〕〈無量寿経〉('Od mdo), 〈阿弥陀経〉(Zhing bkod mdo), 〈悲華経〉(Padma dkar po), 〈阿弥陀鼓音声王陀羅尼經〉('Chi med rnga sgra) 等の密意であると出家者ラーゲースヤが著作したもののなので、多くの衆生たちが極楽に生まれる原因となりますように」と、著者が参照した浄土経典が挙げられている。

89) 〈無量寿経〉を指す。cf. 注 2, 34

90) bDe chen zhing bkod mdo 〈極楽国莊嚴經〉とある。すなわち〈阿弥陀経〉である。本来は bDe ba can (極楽) とあるべきだが、密教の影響が強いチベット、特に顯教の修学を重視するゲルク派以外では bDe chen (大楽) と表記される事例がしばしば見られる。チャクメー自身も自らの『清浄大楽国土誓願』においてこの表現を用いている。

91) ここには Chos Padma dkar po'i mdo sde とあるが、冒頭の「Chos」は直前の〈宝積経〉の用例と同じく、経典として教法を表わすものであり、結局は Dam pa'i chos Padma dkar po (法華経) ではなく、sNying rje Padma dkar po (悲華経) を指示するものと思われる。というのは、〈悲華経〉は、直接的に著者チャクメーの本作や他の極楽願文において、その無量寿仏や観音、勢至の授記、成仏の記述が引用されているし、また他のチベットの諸家の極楽願文 (cf. 梶濱 [2002]) において引用されているが、他方〈法華経〉自体に阿弥陀仏や極楽世界への往生に関する記述はあっても、チベットの極楽願文類に引用される事例が知られていないからである。

ちなみに〈法華経〉当該箇所は、「薬王菩薩本事品」と「観世音菩薩普門品」である。

・「薬王菩薩本事品」〔デルゲ版〕東北 No. 113, mDo sde, Ja. 247b4-7, 〔北京版〕大谷 No. 781, rDo sna tshogs, Chu. 178b6-179a1, ・「観世音菩薩普門品」〔デルゲ版〕東北 No. 113, mDo sde, Ja. 267a4-7, 〔北京版〕大谷 No. 781, rDo sna tshogs, Chu. 192b2-4

- 92) 蔵訳『般若舟三昧経』(*'Phags pa Da ltar gyi sangs rgyas mngon sum du bzhugs pa'i ting nge 'dzin ces bya ba theg chen po'i mdo*) 当該箇所は第三章である。以下にその代表箇所を試訳を挙げる。
cf. Paul M. Harrison [1978] pp. 26-28

(パドラーパーラよ、「現在仏が現前におられる」といったその三昧も、いかなるものかと問えば、パドラーパーラよ、その際に比丘、あるいは比丘尼、あるいは優婆塞、あるいは優婆夷は、戒を円満すべく実践して、その者は独り静かな場所に赴いて坐り、以下を心にする。「かの世尊・如来・応供・正等覚・無量寿仏はどの方向に住して、過ごし、とどまり、法をも示しておられるのか」と心に思念すべきである。彼は聞いた通りの姿によって、この仏国土から西方の方向に百千コートの仏国土を越えた所の極楽世界に、かの世尊・如来・応供・正等覚・無量寿仏は 一現に菩薩の眷属が圍繞し面前で仕えて— おられ、過ごし、とどまり、法をも示すと心に作意する。彼はまた心を散乱させないで如来を作意する。パドラーパーラよ、すなわち例えば、男性もしくは女性のある者が、睡眠中の夢に形ある姿を見て、銀、もしくは金、もしくは良友、もしくは親族、もしくは血縁者、もしくは親友と、心に適う者と、楽しい者と、馴染む者たちを見て、彼は夢中で彼らと一緒に遊び、喜び、あらゆる楽しみに耽り、話し、語りあかすと夢見る[。その夢]から彼は覚めて、見た通りのことと、聞いた通りのことと、考えた通りのことと、判断した通りのことと、話した通りのことと、語りあかした通りのことと全てを他の者たちにも話し、彼は夢の特徴を思い出して涙[声]をあげる。そのようにパドラーパーラよ、在家者であっても、出家者であっても、静かな場所に独り赴いて、坐って、如来・応供・正等覚・無量寿仏を、今まで聞いた通りの姿によって作意して、戒品を破ることなく、念が散乱することなく、一日一夜、あるいは二[日一夜]、あるいは三[日一夜]、あるいは四[日一夜]、あるいは五[日一夜]、あるいは六[日一夜]、あるいは七日七夜にわたって作意すべきである。その者がもし七日七夜にわたって心を散乱せず、無量寿如来を作意すれば、彼は七日七夜を満ち終わってから、世尊・如来・無量寿を見る。彼がもし日中かの世尊を見なければ、彼が睡眠中の夢に、かの世尊・如来・無量寿の御顔が現わされる。～中略～かの菩薩は、天眼を獲得することで如来を見るのでもなく、天耳の領域を獲得することで正法を聞くのでもなく、神通力を獲得することでの[無量寿仏の]世界に一瞬にして赴くこともない。しかしパドラーパーラよ、かの菩薩はこの世界それ自体にいながら、世尊・如来・無量寿を見て、自分自身はその世界にいと心に理解して、法をも聞く。教説を聞いてからさらにそれら全ての法を保ち、全て了解し、保つ。かの世尊・如来・応供・正等覚・無量寿を恭敬し、尊敬し、敬意を払い、供養する～)

漢訳の対応箇所は以下の通りである。

〔漢訳〕後漢月氏三藏支婁迦讖訳『般若舟三昧経』(大正 No. 418, pp. 905a-906a), 後漢月氏三藏支婁迦讖訳『仏説般若舟三昧経』(大正 No. 417, pp. 899a-c), 失訳『拔婆菩薩経』(大正 No. 419, pp. 921c-923a), 隋天竺三藏闍那崛多訳『大方等大集経賢護分』(大正 No. 416, pp. 875b-877b)

- 93) 〔蔵訳〕*Tshe dang ye shes dpag tu med pa'i snying po zhes bya ba'i gzungs* [デルゲ版] 東北 No. 676, rGyud 'bum, [北京版] 大谷 No. 363, rGyud, [デルゲ版] 東北 No. 850-5, gZungs 'dus, [漢訳] 失訳『阿弥陀鼓音声王陀羅尼経』(大正 No. 370), 『陀羅尼雜集』巻第四「阿弥陀鼓音声王陀羅尼」(大正 No. 1336)

この典籍についてはこの別冊に掲載される中御門敬教氏の論文を参照して頂きたい。

- 94) 両テキストは「gdam <教誡する>」とあるが、本章の題名に出る「dam <選択>」と、「財宝を得る商主」は目的地を選択し、旅の食糧を準備し、旅に支障がないようにするというここの趣旨に合致するから、「dam」を採る。また直後の「食糧」に関してはベチャの「brgyags phyé」を採る。

- 95) <無量寿経>所説の燃燈仏から世自在王仏にいたる八十一仏の仏国土の功德莊嚴とその成就を、法蔵比丘が撰取したことを表わすものと思われる。対応する蔵訳<無量寿経>は『浄土宗全書』23, pp. 226-230 である。

梵本、漢訳の対応箇所は以下の通りである。

〔梵本〕cf. Ashikaga [1965] p. 51.7

〔漢訳〕伝吳支謙訳(部分的に一致: 大正 No. 362, p. 300b), 伝後漢支婁迦讖訳(部分的に一致: 大正 No. 361, p. 280a), 伝曹魏康僧鑑訳(部分的に一致: 大正 No. 360, p. 266c), 唐菩提流支訳(部分的に一致: 大正 No. 310-5, p. 92c), 法賢訳(部分的に一致: 大正 No. 363, p. 318a)

『清浄大樂国土誓願』(cf. *bDe smon phyogs bsgrigs stod*, p. 227) にも「十万万ナユタの仏の、八十一[仏]全ての仏国土の、あらゆる功德の莊嚴を一つにまとめ、あらゆる国土より特に優れた無上なるかの極楽国土に生まれますように～」という。

(243a) そこに「苦」といわれるものはありえないし、常時に安楽・幸福が円満である。そのことのために「極楽 (bDe ba can)」という。座の蓮華の花蕊に刹那ほどで身体が成立する¹⁰⁰⁾。それは幼児〔の身体〕ではなく青年の身体。頭の肉髻・足の輪相など、三十二相・八十随好を具えている¹⁰¹⁾。そこに生まれたかぎりはずべてが平等である。身は金色¹⁰²⁾で比丘の衣装、心は (p. 330) 五神通を具えている¹⁰³⁾。心は煩惱・五毒が一つも無い。そこに老いと病の苦は無い。寿命は無数であり¹⁰⁴⁾、無

96) 〈無量寿経〉には明確な対応箇所は見られない。しかし法蔵菩薩の誓願文を念頭におき、さらに極楽世界の功德莊嚴を強く表現した文と思われる。〈阿弥陀経〉では例えば六方位に「あなたたちは、不可思議な功德の称讃、一切諸仏が摂取したこの法門を信受せよ (khyed cag yon tam bsam gyis mi khyab pa yongs su brjod pa sangs rgyas thams cad kyi yongs bzung ba'i chos kyi nram grangs 'di la yid ches par gyis shig)」という文が繰り返しかけてある。鳩摩羅什訳の「当信是称讃不可思議功德、一切諸仏所護念経」に対応する箇所である。

97) 対応する蔵訳〈無量寿経〉は以下の通りである。cf. 『浄土宗全書』23, p. 262 (世尊がおっしゃった。アーナンダよ、かの如来は過ぎ去ったのでもなく、未来来られないのでもないが、かの如来は無上正等覺を円満に覺って現在住しておられ、過ごし、とどまり、法をも示している)

梵本、漢訳の対応箇所は以下の通りである。

[梵本] cf. Ashikaga [1965] p. 26, l.11

[漢訳] 伝曹魏康僧鎧訳 (大正 No. 360, p. 270a), 唐菩提流支訳 (大正 No. 310-5, p. 95c), 法賢訳 (大正 No. 363, p. 321c)

『清浄大楽国土誓願』(cf. *bDe smon phyogs bsgrigs stod*, p.219, 229) にも「あなたの御寿命は無数劫にわたってあり、涅槃せず、今日現に住しておられ～」や、「その国土では正覺者無量光が、無数劫にわたって般涅槃せず住しておられ～」という。

98) 対応する蔵訳〈無量寿経〉は以下の通りである。cf. 『浄土宗全書』23, p. 284

(アーナンダよ、かの仏国土には如来による説示を除いて、火と日と月と星曜と星宿と星座と暗黒の名称を設けることは全くない。昼と夜〔の名称〕を設けることも全くない。家屋の所有という想いも全くない)

梵本、漢訳の対応箇所は以下の通りである。

[梵本] cf. Ashikaga [1965] p. 40, l.6

[漢訳] 伝吳支謙訳 (大正 No. 362, p. 308b), 伝後漢支婁迦讖訳 (大正 No. 361, p. 290b), 唐菩提流支訳 (大正 No. 310-5, p. 97c), 法賢訳 (大正 No. 363, p. 323a)

『清浄大楽国土誓願』(cf. *bDe smon phyogs bsgrigs stod*, p. 227) にも「この賢劫の劫の長さは極楽の一日であり、無数劫にわたって死はなく、常にその国土を得ますように～」という。

99) 対応する蔵訳〈無量寿経〉は以下の通りである。cf. 『浄土宗全書』23, p. 268

(八難所に生まれることはない)

梵本、漢訳の対応箇所は以下の通りである。

[梵本] cf. Ashikaga [1965] p. 30, l.4

[漢訳] 伝吳支謙訳 (部分的に一致: 大正 No. 362, p. 303c), 伝後漢支婁迦讖訳 (部分的に一致: 大正 No. 361, p. 283a), 伝曹魏康僧鎧訳 (大正 No. 360, p. 270a), 唐菩提流支訳 (大正 No. 310-5, p. 96a), 法賢訳 (大正 No. 363, p. 322a)

『清浄大楽国土誓願』(cf. *bDe smon phyogs bsgrigs stod*, p. 228) にも「八無暇と悪趣の言葉は知られておらず～」という。

チャクメーが学んだ『解脱莊嚴論』においても、八難とそれを捨てた有暇と、具足 (円満) が言及されるが、具足は自己の五つと他者の五つとして、ツェンカバの『道次第』と同じく『声聞地』に基づいている。cf. ツルティム, 小谷 [1991] pp. 41-43, ガンポーバ著『解脱莊嚴論』(*Thar rgyan*) [The Dalai Lama Tibetology Series 26 *The Jewel Ornament of Liberation* by Gampopa Sonam Rinchen, critically edited by Khenpo Sonam Gyasto, Central Institute of Higher Tibetan Studies, Sarnath Varanasi 1999] pp. 12-13

100) cf. 注 87

辺の劫¹⁰⁵⁾である。そこに非時の横死はありえない¹⁰⁶⁾。いつの時からそこから死去してから、そこに生まれるが、[それは]他[の生]により間断されない。そこにおいて正等覚しないものはありえない¹⁰⁷⁾。それは現在、誓願・業果について自ら思惟するし、衆生利益のために彼[仏]が出現なさったとき以外、輪廻に再び転落しないし、生を受けることはありえない¹⁰⁸⁾。住処の無量宮と飲食などは、それを意に思ったのみ[により]自然に成就している。そこに努力[による]成就・耕作は必要でな

101) 対応する蔵訳〈無量寿経〉(20願)は以下の通りである。cf.『浄土宗全書』23, p. 242 (世尊よ、もし私が菩提を得る時、かの仏國土に生まれた衆生たち彼ら全てが大士の三十二相を具えなかったその限り、私は決して無上正等覚を円満に証覚致しません)

梵本、漢訳の対応箇所は以下の通りである。

[梵本] cf. Ashikaga [1965] p. 14, 1.9, 20 願

[漢訳] 伝吳支謙訳 (大正 No. 362, p. 302a, 15 願), 伝後漢支婁迦讖訳 (大正 No. 361, p. 281c, 21 願), 伝曹魏康僧鎧訳 (大正 No. 360, p. 268b, 21 願), 唐菩提流支訳 (大正 No. 310-5, p. 94a, 21 願), 法賢訳 (大正 No. 363, p. 319c, 15 願)

『清浄大楽園土誓願』(cf. *bDe smon phyogs bsgrigs stod*, pp. 217-218) にも「頭頂に肉髻があり、御足における輪等、三十二の優れた相と、八十の種好で莊嚴されており～」という。

102) 対応する蔵訳〈無量寿経〉(3願)は以下の通りである。cf.『浄土宗全書』23, p. 236 (世尊よ、もし私のかの仏國土に生まれた者たち彼ら全てが、すなわち金色と同一色にならなかったその限り、私は決して無上正等覚を円満に証覚致しません)

梵本、漢訳の対応箇所は以下の通りである。

[梵本] cf. Ashikaga [1965] p. 11, 1.5, 3 願

[漢訳] 伝吳支謙訳 (部分的に一致: 大正 No. 362, p. 301c, 9 願), 伝後漢支婁迦讖訳 (大正 No. 361, p. 281a, 3 願), 伝曹魏康僧鎧訳 (大正 No. 360, p. 267c, 3 願), 唐菩提流支訳 (大正 No. 310-5, p. 93b, 3 願), 法賢訳 (部分的に一致: 大正 No. 363, p. 319b, 1 願)

『清浄大楽園土誓願』(cf. *bDe smon phyogs bsgrigs stod*, p. 218, 228) にも「明らかに、はっきりと、明確にいらっしゃる眷属たる、十万千万の菩薩の出家者は誰もが金色の相好で莊嚴されており～」や、「全てのお身体は区別なく金色であり～」という。

103) 〈無量寿経〉では一般的に六神通が説かれる。すなわち以下の通りである。

[蔵訳] cf.『浄土宗全書』23, pp. 236-239, 5.6.7.8.9.10 願

[梵本] cf. Ashikaga [1965] pp. 11, 1.14-12, 1.15, 5.6.7.8.9.10 願

[漢訳] 伝吳支謙訳 (大正 No. 362, pp. 301c-302b, 10, 11, 17, 22 願), 伝後漢支婁迦讖訳 (大正 No. 361, p. 281a-b, 5.6.7.8.9.10 願), 伝曹魏康僧鎧訳 (大正 No. 360, pp. 267c-268a, 5.6.7.8.9.10 願), 唐菩提流支訳 (大正 No. 310-5, p. 93b-c, 5.6.7.8.9.10 願)

(法賢訳 (大正 No. 363, p. 319b, 3.4.5.6.7 願) では天耳通を除く五神通が説かれる)

『清浄大楽園土誓願』(cf. *bDe smon phyogs bsgrigs stod*, p. 228) にも「五神通や五眼が全ての者にあり～」と五神通が説かれる。六神通より第六の漏尽通を除いて五神通とするのであろうが、それは、菩薩道においては、小乗の阿羅漢のように初めから實際を現証しては、寂靜の辺に転落し、無住処涅槃にならないという通則によるのであろう。

104) 対応する蔵訳〈無量寿経〉(15願)は以下の通りである。cf.『浄土宗全書』23, p. 240

(世尊よ、もし私が菩提を得る時、寿命の量が少なくとも百千クローティ・ナユタ劫における数によって究竟に至るならば、その限り私は決して無上正等覚を円満に証覚致しません)

梵本、漢訳の対応箇所は以下の通りである。

[梵本] cf. Ashikaga [1965] p. 13, 1.10

[漢訳] 伝吳支謙訳 (大正 No. 362, p. 302a, 19 願), 伝後漢支婁迦讖訳 (大正 No. 361, p. 281b, 14 願), 伝曹魏康僧鎧訳 (大正 No. 360, p. 268a, 13 願), 唐菩提流支訳 (大正 No. 310-5, p. 93c, 13 願)

『清浄大楽園土誓願』(cf. *bDe smon phyogs bsgrigs stod*, p. 220) にも「如来の寿命と功德と、福德、智慧、光榮は限りなく～」という。

105) cf. 注 98, 104

- 106) 対応する蔵訳〈無量寿経〉(14 願) は以下の通りである。cf. 『浄土宗全書』23, p. 240
(世尊よ、もし私が無上正等覚を円満に覚る時、かの仏國土において誓願力を除いて、衆生たちの寿命の量に量があったその限り、私は決して無上正等覚を円満に証覚致しません)

梵本、漢訳の対応箇所は以下の通りである。

[梵本] cf. Ashikaga [1965] p. 13, 15, 14 願

[漢訳] 伝呉支謙訳 (大正 No. 362, p. 302a, 21 願), 伝後漢支婁迦讖訳 (大正 No. 361, p. 281b, 15 願), 伝曹魏康僧鎧訳 (大正 No. 360, p. 268a, 15 願), 唐菩提流支訳 (大正 No. 310-5, p. 93c, 15 願), 法賢訳 (部分的に一致: 大正 No. 363, p. 319c, 11 願)

〈宗要経〉では、梵本、漢訳で横死の滅が説かれる。

[梵本] cf. 池田 [1916] p. 554

(この無量寿経を金等の宝字によって書写し、書写せしめる彼らには、魔、あるいは魔衆、あるいはヤクシャたち、あるいはラクシャたち、あるいは諸々の横死・事故は機会を得ないでしょう)

[漢訳] 失訳『大乘無量寿経』(大正 No. 936, p. 82a)『於中殃枉横死者衆〜』, (大正 No. 936, p. 83c)『若有自書写, 教人書写是无量寿宗要经, 受持誦诵, 若魔之眷属夜叉羅刹, 不得其便, 終無枉死〜』

『仏説大乘聖無量寿決定光明王如来陀羅尼経』(大正 No. 937, p. 86a)『此無量寿決定光明王如来陀羅尼経, 若自書, 若教人書, 如是之人不墮業叉羅刹道中, 不墮非横死亡〜』

この箇所の〈宗要経〉蔵訳では横死の文が欠如しているが、梵本、漢訳とともに経の冒頭にやや長い、同主旨の文章がある。

(cf. [デルゲ版] 東北 No. 674, rGyud 'bum, Ba. 211a6ff., 東北 No. 675, rGyud 'bum, Ba. 216b4ff., 東北 No. 849-4, gZungs 'dus, E. 57a5ff., [北京版] 大谷 No. 361, rGyud, Ba.244a3ff., 大谷 No. 362, rGyud, Ba. 249b1, 大谷 No. 474, rGyud, 'A.55b7ff.)

これを承けてか、阿弥陀仏成就法文獻には、ジターリ流のものにも、マチク流のものにも、阿弥陀仏は横死を除くという記述が頻繁に見られる。(cf. 中御門、藤仲 [2003] p. 54, 中御門、藤仲 [2003] pp. 67-68)

『清浄大樂國土誓願』(cf. *bDe smon phyogs bsgrigs stod*, p. 219) にも『業の異熟以外の命尽があっても、『寿命を』百年は得て、横死を余りなくなくすとおっしゃった教主無量寿に敬礼します〜』という。

- 107) 〈無量寿経〉では、往生者は既に法蔵菩薩の誓願成就の果報にあずかっているものの、利他のために極楽世界に往生した後で、さらに法蔵菩薩同様に誓願をたて、その実践に励み、自らの仏國土を建立する様子が説かれている。つまり「往生即成仏」ではなく「往生乃至成仏」の立場を取る。こうした立場をより具体的、積極的に示したものが『普賢行願讃』所説の浄土思想である (cf. 中御門 [2004])。こうした点を踏まえると、本作で説かれた『そこ(極楽世界)において正等覚しないものはありえない』は、厳密に言えば〈無量寿経〉の立場ではない。しかし「往正定聚の願」、「必至補処の願」、「得不退転の願」等を念頭におき、極楽往生によって未来の成仏が確定されることを踏まえた表現と思われる。

cf. 『浄土宗全書』23, p. 314

(菩薩たちは疑いを完全に断って、菩提心を起こし、速やかに一切衆生に利益と安樂を生み出す力を得るため、世尊・如来・応供・正等覚・無量光がおられる極楽世界に生まれるために善根を廻向すべきである〜)

cf. 『浄土宗全書』23, p. 322

(彼ら全てはそこ(極楽世界)に生まれてからも、徐々に菩薩行を完全に成就して、他所の仏國土において妙音如来と名付けられる者として、無上正等覚を円満に証覚するだろう。〜無量光如来が以前、菩薩行を行った時に、[彼の]無上正等覚において成熟した彼らも極楽世界に生まれて、以前の誓願と実践を成就するだろう〜)

・『往正定聚の願』

[蔵訳] cf. 『浄土宗全書』23, p. 238, 11 願, [梵本] cf. Ashikaga [1965] p. 12, 1.16, 11 願, [漢訳] 伝後漢支婁迦讖訳 (大正 No. 361, p. 281a, 11 願), 伝曹魏康僧鎧訳 (大正 No. 360, p. 268a, 11 願), 唐菩提流支訳 (大正 No. 310-5, p. 93c, 11 願), 法賢訳 (大正 No. 363, p. 319b, 8 願)

・『必至補処の願』 cf. 注 137

・『得不退転の願』

[蔵訳] cf. 『浄土宗全書』23, p. 254, 48 願, [梵本] cf. Ashikaga [1965] p. 21, 1.3, 46 願, [漢訳] 伝曹魏康僧鎧訳 (大正 No. 360, p. 269b, 47 願), 唐菩提流支訳 (大正 No. 310-5, p. 94c, 47 願)

- 108) cf. 注 137

い¹⁰⁹⁾。そ〔の自然の食べ物〕を食べたことで満足し、顔色は輝きわたる。濁・不浄・糞尿は無い¹¹⁰⁾。そこにふつうの女はいないが¹¹¹⁾、自己を供養する無量の天女が常時に自己に侍奉する¹¹²⁾。常時に仏と離れずに、(243b) それにより侍奉し、供養雲は無量である¹¹³⁾。自己の掌から何でも欲しいものが生起する¹¹⁴⁾。その国土の正尊は無量光である。彼が常時に法輪を転ずる¹¹⁵⁾。住处である百コーティの猫牛洲に、百

109) cf. 『浄土宗全書』23, p. 280

『清浄大楽国土誓願』(cf. *bDe smon phyogs bsgrigs stod*, p. 228) にも「自ずと生じた宝の集まりである無量宮があり、何であれ願った資財は心に念じることで現れ、努力を要せず「必要である」と願ったものは自ずと成就し〜」という。

110) cf. 注 87

111) 対応する蔵訳〈無量寿経〉(36 願) は以下の通りである。cf. 『浄土宗全書』23, p. 248

(世尊よ、もし私が菩提を得る時、無数・不可思議・無限・無量のあらゆる仏国土にける女性たちが私の名前を聞いてから、たいそう澄浄〔な心〕が生じ、菩提心を起こし女性の身体を厭うて彼らが生を終えてから、もし女性の身体を二度得ることになったたその限り、私は決して無上正等覚を円満に証覚致しません)

梵本、漢訳の対応箇所は以下の通りである。

[梵本] cf. Ashikaga [1965] p. 18, l.9, 35 願

[漢訳] 伝呉支謙訳 (大正 No. 362, p. 301a, 2 願), 伝曹魏康僧鎧訳 (大正 No. 360, p. 268c, 35 願), 唐菩提流支訳 (大正 No. 310-5, p. 94b, 35 願), 法賢訳 (大正 No. 363, p. 320b, 27 願)

『清浄大楽国土誓願』(cf. *bDe smon phyogs bsgrigs stod*, p. 220, 228) にも「無量光仏の名前を聞いて、その者は菩提座に到るまで、女性としては生まれず、種姓が良い所に生まれ、あらゆる生涯において戒を清浄とするでしょう〜」や、「女性はなく、胎生はなく、どんな者も蓮華の蕊から生誕なさる〜)」という。

112) 対応する蔵訳〈無量寿経〉は以下の通りである。

a) cf. 『浄土宗全書』23, p. 282

(彼ら〔往生者〕はそれら〔意のままに〕成就した宝の無量宮の中で、七千づつの天女が〔彼らを〕取り囲み面前で見えてから、坐して遊戯しつつ歓喜し喜悅する)

梵本、漢訳の対応箇所は以下の通りである。

[梵本] cf. Ashikaga [1965] p. 38, l.16

[漢訳] 伝曹魏康僧鎧訳 (部分的に一致: 大正 No. 360, p. 272a), 唐菩提流支訳 (部分的に一致: 大正 No. 310-5, p. 97b), 法賢訳 (部分的に一致: 大正 No. 363, p. 323a)

b) cf. 『浄土宗全書』23, p. 284

(アーナンダよ、かの極楽世界においては時々天の香水の雲雨が面前に降る。一切色を具えた天の華と、天の七宝と、天の栴檀の抹香と、傘と、幢と、飛幢の雨が面前に降る。天の垂帷も〔空中に〕保たれ、取っての払子を具えた天の宝傘 (lha'i rin po che'i gdugs nga ma'i bsil yab dang bcas pa dag) も空中に保たれる。諸々の楽器の音声も発せられ、天女たちも舞踏する)

梵本の対応箇所は以下の通りである。

[梵本] cf. Ashikaga [1965] p. 40, l.11

『清浄大楽国土誓願』(cf. *bDe smon phyogs bsgrigs stod*, p. 229) にも「女性はなくても化作された天女の集まりがあり、多くの供養する天女が常に供養し〜」という。中村、早島、紀野 [1963] p. 270 注 75 は、上記の「天女」について「divyāh.....apsarasah. アプサラスは一種の天女である。元来は水の精のようなものを考えていた。極楽世界には、人間的な欲望に悩まされる女人はいないが、天女はいるのである」と説明する。ただし「極楽国土」を「大楽の国土」と理解する著者においては、これら天女は密教における明妃や供養女とも重ねて考えられている可能性がある。

113) 『清浄大楽国土誓願』(cf. *bDe smon phyogs bsgrigs stod*, p. 229) にも「あらゆる木と河と蓮華から、心に適った色、声、香、味、触という資財〔を生み出す〕供養雲が常に生じ〜」という。

コーティの尊者オギャン¹¹⁶⁾と、チベットの光名の宝冠 ('Od mtshan cod pan) [をもつ] 二十一の者¹¹⁷⁾、その百コーティの出現なさる者たちは、無量光の変化の小さな分である。実はオギャンそのものは無量光である。

住処ボタラの観自在 [菩薩] (sPyan ras gzigs)。チベットのソンツェン・ガンボ [王] (Srong btsan sgam po, 581-649)¹¹⁸⁾ とカルマカ (Karma ka)¹¹⁹⁾、そのものと同じ

114) 対応する蔵訳〈無量寿経〉は以下の通りである。cf. 『浄土宗全書』23, p. 298

(彼らはこうした種類の華と、塗香と、燈火と、香と、花環と、焼香と、衣と、傘と、幢と、飛幢と、楽器と、歌謡と、楽器の音によって供養すべきである。心にそのように思いを起こして、望む通りの諸物を彼らが心に起こすやいなや、仏力によってそうした種類の供物の資具全てが手から現れるでしょう。彼らは華から楽器の音に至るまでのそれらによって彼ら仏世尊を供養して、多く無量無数の善根をも生みながら積む。もし「こうした種類の華籠が手から現れるように」と望んでも、彼らが心を起こすやいなや、[個々に] 異なった彩色の天華、[個々に] 異なった香りでたくさんの香りのついた籠が手から現れる。彼らはそうした種類の籠の華それらを、彼ら仏世尊に散らし、降り掛け、散布する〜)

梵本、漢訳の対応箇所は以下の通りである。

[梵本] cf. Ashikaga [1965] p. 50, l.6

[漢訳] 伝呉支謙訳 (部分的に一致: 大正 No. 362, p. 306a), 伝後漢支婁迦讖訳 (部分的に一致: 大正 No. 361, p. 286a), 伝曹魏康僧鎧訳 (大正 No. 360, p. 273c), 唐菩提流支訳 (大正 No. 310-5, p. 98c)

『清浄大衆国土誓願』(cf. *bDe smon phyogs bsgrigs stod*, p. 225) にも「福德力と神力によって掌から供養雲を不可思議に放ってから、眷属を携えた仏を供養しますように〜」という。

115) cf. 注 92, 97

116) 本作 240a にも「尊者オギャン・パドマサンバヴァ」といわれ、さらにパドマサンバヴァが阿弥陀仏の化身であることはその伝記類に語られるので、パドマサンバヴァのことであろう。例えば、彼の多くの伝記の中でも、オギャン・リンパ (O rgyan gling pa, 1230-1309) により発見されて、他の伝記文献の祖形ともされる *Padma bKa'i Thang* の冒頭は、無量光仏の西方浄土のこと、無量光仏による変化、観自在菩薩による変化、諸世界、世々にパドマサンバヴァが持金剛となったことと金剛界の五部族といった神話から始まっている。cf. [1978] *The Life and Liberation of Padmasambhava Padma bKa'i Thang Part I*, pp. 3-25, Dudjom Rinpoche [1991] p. 468, 746

117) bod 'od mtshan cod pan nyi shu gcig は「チベットの光の御名 (または光の相) の宝冠二十一」という意味である。ツルティムケサン先生によれば、冒頭の bod (チベット [の]) は韻文の形式からして「de」の可能性もあるとのことである。'od mtshan という表現自体は本来、〈無量寿経〉蔵訳 (cf. 『浄土宗全書』23, p. 286 l.10-11) に「およそ無量の光の御名と極楽の殊勝な功德を聞いて歓喜するものは (gang gis dpag tu med pa'i od mtshan dang // bDe ba can gyi yon tan khyad 'phags rnams/ thos nas dga' ste...)」とある部分が典拠だと思われる (ちなみに同箇所は梵本や諸漢訳には対応箇所は存在しない)。さらに 'od mtshan は rGyal ba 'Od mtshan mgon po (勝者光名主) というように無量光の仏名として用いられる場合がある。

また「宝冠二十一」については、ターラー菩薩が観音菩薩の化身とされて阿弥陀仏と関連が深いことから、「二十一種ターラー菩薩」の可能性も考えてみたが、尊格像の詳細も含めて詳しいことは不明である。二十一種の挙げ方にはアティージャ流とスーリヤグプタ流があるとされる。ヴァーギーシュヴァラ・キールティによる〈白色ターラー讃〉は、浄土思想を説く〈行願讃〉v. 59 を引用し、ターラー菩薩が極楽往生と阿弥陀仏からの授記を叶えるとする。cf. 田中 [2001] pp. 178-213

118) ソンツェン・ガンボ (Srong btsan sgam po) は七世紀に活躍した古代チベット王国第 33 代の国王である。文字を創って訳経を始め、六大法規を定めた。ネパールと唐から后を娶り、大昭寺 (Ra sa 'Phru'i snang), 小昭寺 (Ra mo che) を建立した。日本の聖徳太子と同じく、仏教国チベットを自認する人々にとっては、「建国の父」的な意味をも持つ人物である。

く賢劫の千仏――そのすべては観自在による変化である。それは変化のもととは (p. 331) 観自在そのものである。彼が無量光の側に近侍するさまは¹²⁰⁾、常時に仏の右側に住しておられる。住処である楊柳宮 (ICang lo can, Skt. Atakāvati / Alakāvati)¹²¹⁾において秘密主 (gSang ba'i bdag) [がいる]。彼もまた変化の知られた名を持つもの等、それは百コートを変化しても、その変化のもととは大勢至菩薩 (Sems dpa' mThu chen thob) である。彼は左側に常に住しておられる。

住処はこの臍部洲からそこに出現なさった吉祥聖者ナーガールジュナ (Klu sgrub, ca. 150-250)¹²²⁾、タクボハジエ (Dwags po lha rje, 1079-1153)¹²³⁾、尊者キュンボ・ネルジョル (Khyung po rNal 'byor, 1086-1139)¹²⁴⁾、ソナムツェ [セ] (bSod nams rtse

119) 著者自身が所属するカルマ派の、カルマ・ドゥースムキュンパ (Karma Dus gsum mkhyen pa, 1110-1193) を初めとする歴代の祖師をいうものと思われる。cf. 立川 [1987] pp. 53-54

120) <無死鼓音声タラニ>には「[無量寿仏の] 右には観自在菩薩、左には大勢至菩薩」と明記する。

121) cf. 神, 西尾 [1981] No. 4137 (35) Atakāvati (Alakāvati) [蔵] ICang lo can [漢] 柳葉隅 [藏訳] 'Phags pa de bzhin gshegs pa'i gsang ba bsam mi khyab pa bstan pa zhes bya ba theg pa chen po'i mdo (Tathāgatācintyaśāhyanirdeśa, [ドルゲ版] 東北 No. 47, Ka. 170b-175a) や、[漢訳] 西晉竺法護訳『大宝積經』『密迹金剛力士会』(大正 No. 310-3, pp. 69c-71c), 宋法護訳『仏説如來不思議秘密大乘經』(大正 No. 312, pp. 737a-739b) において、gSang ba pa'i bdag po Lag na rdo rje (密迹金剛力士、秘密主金剛手) は、仏、菩薩、大衆を自らの ICang lo can gyi pho brang 'khor (曠野之界鬼王国土…密迹宮舎、曠野大城…秘密宮) に招いて供養するという記述があり、そこには gnod sbyin (夜叉/ヤクシャ), grul bum (鳩盤茶/クンバーンダ), srin po (羅刹/ラクシャ), sha za (必舎左/ビシャーチャ), dri za (乾闥婆/ガンダルヴァ), lho 'phye chen po (摩睺羅伽/マホーラガ) が住むとされ、既に、いくらかタントラの荒涼たる風景を示している。cf. 入澤 [1984]

[ICang lo can] は [1985] *Bod rgya tshig mdaod chen mo*, p. 765 に「楊柳宮」と翻訳されて金剛手菩薩と毘沙門天の住処とされるが、そのような場所がなぜ「柳を持つ場所」となるのは不明である。ここでのようにチベットでは大勢至が金剛手と同一視される場合が多い。

122) チベット人にとっては中観派の開祖であるとともに、重要なタントラに註釈を残した大成就者でもある。彼の極楽往生に関してチベットでは、<入楞伽經>以来の教証とそれらに関するインドからの口伝が知られている。cf. ツルティム, 藤仲 [2001] pp. 62-63, 224-231

123) タボジエ (Dgas po rje) / ゲーボジエ (dGas po rje) とも見えるが、タクボハジエ・ガンボーバ (Dwags po lha rje sGam po pa, 1079-1153) のことであろう。ミラレバ (Mi la ras pa, 1040-1123) の高弟であり、マルバ・カギユ (Mar pa bKa' brgyud) 派、ないしタクボ・カギユ (Dwags po bKa' brgyud) 派の祖であり、ミラレバ流の「大印」とカダム派の「道次第」を合流させたといわれる。cf. 立川 [1987] p. 6, pp. 52-53

124) キュンボ (Khyung po rNal 'byor, 1086-1139) は Shang pa bKa' brgyud 派の祖である。若い時にギュンドゥン・ギェルポ (Gyung 'drung rgyal po) よりボン教を学び、ジュンネ・センゲ ('Byung gnas seng ge) よりゾクチェンの教義を学んだ。しかしそれに満足せず、インドに直接赴いてドルジェデンバ・チェンポ (rDo rje gdan pa chen po) 等から多くの教義を学んだ。チベットに帰った後、ポトワ・リンチェンセル (Po to ba Ring chen gsal) の弟子ランリタンバ (Glang ri thang ba) は無量光仏の變化身であると言って、彼のもとで剃髪し、具足戒を授かったと伝承される。彼の年代については、立川 [1987] p. 92 注 1 では『寄史』(Deb tehr sngon po) や『バクサムジョサン』(Pag sam jon zang) に基づき 1086-1139 とするが、Tibetan Buddhist Resource Center は 978/990-1127 を出す。

cf. George N. Roerich [1949] p. 271, George N. Roerich [1953] p. 728, 752, 立川 [1987] pp. 48-50, p. 92 注 1, Gyurme Dorje and M. Kapstein [1991] p. 91 注 1302

mo. 1142-1182)¹²⁵⁾、ドン・ケーチュ・ナムケーギャルツェン (gDong mkha' spyod Nam mkha' rgyal mtshan. 1326-1401)¹²⁶⁾ と、尊者ゴルパ・ドルジェチャン (Ngor pa rDo rje 'chang)¹²⁷⁾ 等、一般的に七十二コーティ・ナムタの菩薩は、この国土からそこに生まれると牟尼は説かれた。〔カルマ黒帽ラマ6世〕尊者トンワ・ドンデン (mThong ba don ldan. 1416-1453)¹²⁸⁾ (244a) の〔変化身としての〕眞の生一つもそこに住しておられると仰る。眷属の十万の比丘がいると説明されている。

¹²⁹⁾ 息子ツォンドゥよ、いつか死去するとき、その国土に出現なさる決断をし、いま思慮し知をよく向けてください。そして下の悪趣の苦を思慮し、停留しないでください。上に天・人の安楽・幸福は夢ほど〔である〕。濁世の教えが衰退する時、自己が人から人に生まれるので充分だが、縁は非時の横死など障碍が多い。少ないのは十歳以前は〔幼くて〕思慮が無い。常時に衣食の散動により運びさられた。寿命の半分である夜は睡眠により断たれる。今、寿命の量は四十〔歳〕である。〔年老いて〕齒

125) ソナム・ツェモ (bSod nams rtse mo. 1142-1182) は「サキヤ五祖 (Sa kya gong ma lnga)」の一人であり、極楽往生したとされる。cf. 立川 [1974] p. 58, p. 62

なお「サキヤ五祖」の中では、彼の師にあたるサチェン・クンガニンポ (Sa chen Kun dga' snying po. 1092-1158) は、阿弥陀仏成就法を翻訳したバリの翻訳師 (Ba ri Lo tsā ba) にも師事している。この国土で涅槃するさまを示して、極楽、ボタラ、オギャン、北金色 (Byang gser mdog can) の四国土において衆生利益をしているとされる。cf. George N. Roerich [1949] p. 211, George N. Roerich [1953] p. 708, 立川 [1974] p. 57

126) lHo brag の貫首であったレーキドルジェ (Las kyi rdo rje. 1326-1401) のことだと思われる。ツォンカバも彼からはカダム派の教誡流 (gDams ngag pa) に伝承された道次第を聴聞している。また彼の師のチャクナドルジェ (Phyag na rdo rje) は、ツォンカバが修学を完成させたとき、インドに行くことを考えたのに対して、引き止めて結果的に大きな恩恵をもたらしたとされている (cf. 立川、石濱、福田 [1995] pp. 26, 29-30)。ニンマ派では、ナムケー・ギャルツェン (Nam mkha' rgyal mtshan) がツォンカバに深い宗教体験を与えた。ツォンカバも中観や因明の教義以外では、大印契や大究竟の修習にまで事実上同意しているのだと考えているようである。確かに、ニンマの法をも行ったダライラマ5世などを通じて、その教えの幾つかはゲルク派にも伝えられている。

cf. Dudjom Rinpoche [1991] pp. 923-925, [1995] *Masters of the Nyingma Lineage*, pp. 179-180

127) サキヤ派 Ngor 流の人、例えばゴル・ケーチュン5世 (Ngor mkhan chen 5 dPal ldan rdo rje. 1411-1482) といった人を指すのかと思われるが未詳 (cf. 立川 [1974] pp. 68-70)。チャクメーと派も世代も同じで、影響し合ったアルチェン・ドゥドゥルドルジェ (gTer chen bDud 'dul rdo rje. 1615-1672) もまた Ngor や Sa sKya の諸寺で修学している。また少し時代は下がるが、トゥカン (1737-1802) の『一切宗義』には、「昔はモンゴル、中国、ドカムそれにドメーにはサキヤ派の教説を継承する勝れた人や僧院が多くあったが、現在はデルゲ (sDe dge) にフントップテン (lHun grub steng) 等の寺院がなにかしかり、代々のボル派の貫首が渡っておられるが、それ以外のところではサキヤ派の伝統を守って修行している僧侶は見当たらない」(cf. 立川 [1974] p. 70) と述べられている。

128) cf. George N. Roerich [1949] p. 338, George N. Roerich [1953] p. 512, pp. 548-550, p. 781, 1018

129) この段は、無常の修習、苦の修習の法類として諸々の「菩提道次第」において見られる記述である。注 27 を参照されたい。

が抜ける時、法を為す暇が無いことを見ないでしょうか。すべての人は煩惱・五毒が粗い。益した報いに害 (p. 332) を加える。学者・行者すべてを誹謗する。十の不善業を競って行ずる。直接に出現なさった諸仏も、この頃は衆生利益が難しいのなら、衆生利益の成就していない私 [にとって] は苦しみの因。親戚としての僧徒・朋友すべては、自分が死んだ後から長く [は生き] ない。自分が生まれても、[再び] 会わないことを意に置いてください。

¹³⁰⁾ 無量光尊の寿量は、十万コーティ・ナユタである¹³¹⁾。それは誰も数え切れない。いつの時か涅槃するさまを示される¹³²⁾。その教えは恒河の沙の (244b) 数ほどの劫二つに任ずる。そのとき観自在 [菩薩] が、摂政をなさり、教えを護る。そのとき自己も正法を行ずる。そこに生まれたかぎり神変が無碍なので、東の [阿閼如来の] 妙喜国と薬師 [如来] の [浄瑠璃光] 国、南の具吉祥、北方の事業円満成就、南のボタラと猫牛洲、西のオギャン国など国土すべてに、私は神変により無碍に往く。そこにおいて供養を捧げ、灌頂と教誡をいただく。遅れないで速やかに極楽に至る。その目的のためにその国土に生まれたなら、国土すべてに生まれたのと差別がない。ここに見物を欲し訪れても良い。この国土にマイトレーヤ・師子など、後でいつか千仏が出現なさる¹³³⁾ 時、私は訪れて供養し正法をうかがう。目を遅れないで極楽に至る。

時は二つのコーティほどの劫を過ぎた時、無量光尊の正法は黄昏に没する。(p. 333) 明け方の時、かの観自在 [菩薩]、彼が現等覺して、御名は「光明吉祥積王 ('Od zer dpal brtsegs rgyal po)」となる。彼は寿命が九十六の十万コーティ・ナユタの劫。その時、彼の侍者をする。彼が涅槃してから彼の正法は、六万と三十万コーティの劫に任ずる。そのときの間は大勢至菩薩が (245a)、勝者の摂政で教えを受持する¹³⁴⁾。そのとき自分も等持 (三昧) を修習する。業障二つは習気から浄めている。

いつか彼の教えが完了するとたちまち、尊者大勢至が仏陀になる。御名は「功德宝積王 (Yon tan nor bu brtsegs pa'i rgyal po)」。彼の¹³⁵⁾ 寿命の量と教えの量は、尊者観自在と等しいと説かれている。その期間、私もまた正法を行ずる。私は二資糧をテカ (bre kha) [の単位]¹³⁶⁾ から満たす。その国土またはどの欲する国土においても、死去してたちまちに正等覺した。その目的のために国土に生まれたほどの者たちは、身体は一生補処の菩薩のみであると説かれている¹³⁷⁾。息子よ、それら功德を意に受持し、法の〈極楽誓願〉のみを修証なさってください。無量光尊と観自在— それのみを成就し、志願してください。

130) これらは『悲華經』(〔藏訳〕*'Phags pa sNying rje pad pa dkar po zhes bya ba theg pa chen po'i mdo* [デルゲ版] 東北 No. 112, mDo sde, Cha. 174a-177b, [北京版] 大谷 No. 780, mDo sna tshogs, Cu. 199b-203b, [梵本] Isshi Yamada [1968] pp. 116-123, [漢訳] 北涼曇無讖訳『悲華經』(大正 No. 157, p. 185b-186c))からの取意である。

〈悲華經〉には、阿弥陀仏の前身である無量寿王がその多くの王子、一族、家臣、宝海梵志とその多くの弟子たちとともに、発菩提心をし、未来に成仏するとき勝れた浄土を撰取しようと誓願すること、彼らがどんな菩薩となり、どんな国土においてどんな仏となるのが、個々に説かれている。無量寿王が無量寿仏、その第一王子不闍伽が観音、第二王子尼摩が得大勢、宝海梵志は釈迦牟尼などとなるとされている。cf. 宇治谷 [1977] pp. 107-108

- ・無量寿仏の成仏と国土→ [デルゲ版] Cha. 174a2-4, 174b7-175a1, 175b3-4, [北京版] Cu. 199b4-6, 200b5-6, 201b2-4
- ・無量寿仏の入滅→ [デルゲ版] Cha. 175b5-7, [北京版] Cu. 201b4-5
- ・無量寿仏の法の没→ [デルゲ版] Cha. 176a5-6, [北京版] Cu. 202a6-7
- ・観音菩薩の名と成仏→ [デルゲ版] Cha. 176a3-7, [北京版] Cu. 202a4-8
- ・観音菩薩の入滅と法の没→ [デルゲ版] Cha. 176a7-b1, [北京版] Cu. 202a8-b1
- ・勢至の名と成仏→ [デルゲ版] Cha. 177b2-3, [北京版] Cu. 203b5-6

(D. Cha. 175a3-7) btsun pa bcom idan 'das gang gi tshe rgyal po chen po rtsibs kyi mu khyud 'di bskal pa grangs ma mchis pa gang gā'i klung gcig gi bye ma snyed 'das pa nas grangs ma mchis pa gnyis pa la bab pa na 'jug rten gyi kham bde ba can du bla na med pa yang dag par rdzogs pa'i byang chub mngon par rdzogs par 'tshang rgya bar 'gyur zhing / de bzhin gshegs pa dgra bcom pa yang dag par rdzogs pa'i sangs rgyas tshe dpag med ches bgyi bar gyur nas / sangs rgyas kyi zhing yongs su dag pa na sems can yongs su dag pa rnam la sangs rgyas kyi mdzad pa mdzad par 'gyur te / de bzhin gshegs pa tshe dpag med kyi bskal pa dpag du ma mchis pa ji srid cig tu sangs rgyas kyi mdzad pa mdzad cing sangs rgyas kyi mdzad pa yongs su mthar thug nas phung po'i lhag ma ma mchis pa'i mya ngan las 'das pa'i dbyings su 'jug par 'gyur zhing / der zhugs nas kyang dam pa'i chos ji srid du gnas par 'gyur ba'i yun de srid du bdag gyis byang chub sems dpa'i spyod pa spyad par bgyi zhing bdag byang chub sems dpar gyur nas sangs rgyas kyi mdzad pa yang bgyi lags so /-

(D. 176a3-b1) rigs kyi bu gang gi phyir khyod kyi ngan song rnam su yang bitas / mtho ris rnam su yang bitas / sems can thams cad kyi sdug bsngal yang bitas zhing / sems can thams cad sdug bsngal las thar bar bya ba dang / nyon mong pa rab tu zhi bar bya ba'i phyir snying rje'i sems bskyed pas na rigs kyi bu de'i phyir khyod spyen ras gzigs dbang phyug ces bya'o / spyen ras gzigs dbang phyug khyod ni sems can bye ba khrag khrig 'bum phag mang po rnam sdug bsngal las thar bar byed par 'gyur te / rigs kyi bu khyod ni byang chub sems dpar gyur pa na yang sangs rgyas kyi mdzad pa byed par 'gyur ro / rigs kyi bu khyod ni de bzhin gshegs pa 'od dpag med yongs su mya ngan las 'das nas bskal pa grangs med pa gang gā'i klung gi bye ma snyed gnyis pa lus pa na nam gang gyi srod la dam pa'i chos nub par gyur pa de nyid kyi nam gyi tho rangs byang chub kyi shing bkod pa du ma'i drung du rdo rje'i gdan la 'dug nas bla na med pa yang dag par rdzogs pa'i byang chub mngon par rdzogs par 'tshang rgya bar 'gyur te / de bzhin gshegs pa dgra bcom pa yang dag par rdzogs pa'i sangs rgyas 'od zer kun nas 'phags pa dpal brtsegs rgyal po zhes bya bar 'gyur ro / khyod kyi tshe'i tshad ni bskal pa bye ba khrag khrig 'bum phrag dgu bcu rtsa drug tu 'gyur ro / khyod yongs su nya ngan las 'das nas kyang dam pa'i chos ni bskal pa dung phyur phrag drug dang bye ba phrag gsum du gnas bar 'gyur ro /-

(D. 177b1-3) rigs kyi bu khyod kyi ni gnas pa chen po don du gnyer te / rigs kyi bu khyod kyi ji ltar rang gis yongs su bzung ba de lta bu'i gnas 'thob par 'gyur ro / rigs kyi bu khyod kyi ni sangs rgyas kyi zhing der bla na med pa yang dag par rdzogs pa'i byang chub 'thob par 'gyur te / de bzhin gshegs pa rab tu brtan pa yon tan nor bu brtsegs pa'i rgyal po zhes bya bar 'gyur ro / rigs kyi bu khyod kyi de ltar gnas chen po yongs su bzung ba de'i phyir rigs kyi bu khyod mthu chen thob ces bya bar gyur cig /-

〈悲華經〉のこれらの箇所はブトンの『仏教史』(cf. E. Obermiller [1931] pp. 92-93)にも言及されている。なお注7において言及したギエルゲンボ・タクバギエルツェンは、『安楽国土の主無量光、所依能依を合わせたものに関する話の正説一見すると有益なもの、宝玉の藤 (bDe ldan zhing gi dGon po 'Od dpag med rten dang brten par bcas pa las brisam pa'i gam yang dag par brjod pa mThong ba don ldan nor bu'i 'khri shing)』(rGyal mkhan po Grags pa rgyal mtshan gyi bka' 'bum, dPyad gzhū'i yig cha phyogs bsrigs (天津古籍出版社) Vol. 73, Nga, dKar la-41a, pp. 1-21) 10b-11aにおいて、無量光仏の前世における発心として『悲華經』の記述を示している。すなわち、離群王が宝蔵如来のもとで発心して、善き国土を撰取しようとし、宝蔵如来の教示により、西方の十万 koti 国土を過ぎた自在王如来 (dBang phyugs rgyal po) の仏国土において四仏が出た後、そこで無量光仏になること、無量劫に住するので「無量寿仏」、光明により無量の国土を満たすので「無量光仏」と号するといひ、さらに〈無量寿經〉の世自在王仏のもとで法蔵比丘が発心し授記されたことを説明して、まるで両經の記述が連続するかのよう錯覚してしまうが、同所の仏名は『悲華經』に「帝音自在王 (dBang po'i dbyangs phyugs rgyal po)」(大谷 No. 780 Cu198b5-6)を簡略にしたものであり、やはり別の記述にすぎない。

内容はそういうものが馬年¹³⁸⁾の室宿月(蔵暦7月16日から8月15日)の下弦
[の月]の時8日, 9日[すなわちその月の23日, 24日]の[禅思する]晡時¹³⁹⁾,

131) 未詳。注130)に出した〈悲華經〉には九十六の十万コーティ・ナユタとある。

132) 「tshul (さま)」は「[実はそうでないのにそうであるかのような]ふり」という意味である。釈尊の生涯に関しては、日本ではいわゆる「八相成道」が有名であるが、チベット仏教では通常〈ラリタヴィスタラ〉(*Lalitavistara*)や〈宝性論〉(*Ratnagotravibhāga*)に基づいて「十二の行い」として知られている。これは、法身の常住、受用身の久住と化身(活仏)の出現を説明するものでもある(cf. 川崎 [1977] pp. 24-25, ツルティム, 藤仲 [2001] pp. 369-370)。

なお阿弥陀仏の般涅槃は、〈無量寿經〉の蔵訳、梵本、[漢訳]伝曹魏康僧鎧訳(大正No. 360)、唐菩提流支訳(大正No. 310-5)、法賢訳(大正No. 363)では説かれない。しかし伝呉支謙訳、伝後漢支婁迦讖訳に説かれる。すなわち次の通りである。cf. 辛嶋 [1999] p. 136 伝呉支謙訳(大正No. 362, p. 317c)「我般泥洹去後、經道留止千歲。千歲後經道斷絶。我皆慈哀、持(特)留是經法、止住百歲。百歲中竟、乃休止斷絶。在心所願皆可得道~」、伝後漢支婁迦讖訳(大正No. 361, p. 299c)「我般泥洹去後、經道留止千歲。千歲後經道斷絶。在心所願皆可得道~」

『清浄大樂國土誓願』(cf. *bDe smon phyogs bsgrigs stod*, p. 229)にも「いつか、かの無量光が入滅される。ガンジス河の砂の数ほどの劫の二つの間に教えが住する時、摂政の親自在を離れず、その時に妙法を保ちますように~」という。

133) 以下の二經に関連記事がある。

① [蔵訳] *'Phags pa bskal ba bzang po zhes bya ba theg pa chen po'i mdo* [デルゲ版] 東北No. 94, mDo sde, Ka. 103a3-b1, [漢訳] 西晋竺法護訳『賢劫經』大正No. 425, p. 50c-51a

② [蔵訳] *'Phags pa snying rje pad ma dkar po zhes bya ba theg pa chen po'i mdo* [デルゲ版] 東北No. 112, Cha. 112a2-3, [漢訳] 北凉曇無讖訳『悲華經』大正No. 157, p. 201c

134) 『清浄大樂國土誓願』(cf. *bDe smon phyogs bsgrigs stod*, p. 230)にも「[親自在が]壽命千萬ナユタの六十六の十万倍 [の劫に] 住しておられる時、常に御足のもとに仕えて尊敬し、不忘の陀羅尼により妙法を受持しますように。[彼が] 般涅槃してから、その教えが六億三千万劫にわたりとどまるその時、教えを受持し、大勢至を常に離れませんように~」と説かれる。

上記下線部分について、原文は「bskal pa dung phyur drug dang bye ba phrag // 'bum phrag gsum」である。しかし直訳すると「六億と三億(千万×十万×三)」となって問題がある。そこでこの願文の箇所は、先に出した〈悲華經〉蔵訳(cf. 注130)の「彼が般涅槃してから、正法は六億三千万劫にわたりとどまるでしょう(khyod yongs su nya ngan las 'das nas kyang dam pa'i chos ni bskal pa dung phyur phrag drug dang bye ba phrag gsum du gnas bar 'gyur ro)」という文章により、訂正して読むほうが適切かもしれない。

135) 両テキストとも des だが、意味を考えて de または de'i と読む。

136) 紙の単位。長さ1メートル余り、幅1メートル足らずのチベットの紙を1 bre kha という。

137) 対応する蔵訳〈無量寿經〉(21 願)は以下の通りである。cf. 『浄土宗全書』23, p. 242

(世尊よ、もし私が覺りを獲得した時、かの仏國土に生まれた衆生たち、彼らすべてが無上正等覺に対して、一生涯[だけ覺りを]阻害される者とならなかった[なら]、一菩薩・摩訶薩の立派な鎧を身につけ、あらゆる世間の人々のために鎧を身につけ、あらゆる世間の人々のために精進し、あらゆる世間の人々を苦しみから解放することに精進し、あらゆる世間で菩薩行を行うよう望み、あらゆる仏を敬おうと望み、ガンジス河の砂の数ほどもいる衆生をこの上ない正しい覺りに安住させるよう望み、さらに上級の實踐に対し正面に向かいあい、菩薩行に関して定まった者たちの殊勝な誓願を除いて— その限り私は決して無上正等覺を円満に証覺致しません~)

梵本、漢訳の対応箇所は以下の通りである。

[梵本] cf. Ashikaga [1965] p. 14, l.13, 21 願

[漢訳] 伝後漢支婁迦讖訳(部分的に一致: 大正No. 361, p. 281c, 20 願), 伝曹魏康僧鎧訳(大正No. 360, p. 268b, 22 願), 唐菩提流支訳(大正No. 310-5, p. 94a, 22 願), 法賢訳(大正No. 363, p. 319c, 16 願)

138) 西暦1666年と思われる。本稿の序論を参照のこと。

午前の更において¹⁴⁰⁾、私、比丘ラーガアスヤが語った。それをツォンドゥ・ギャン
ツォが文字に著した。第42章である。吉祥あれ！

参考資料

『山法・独居修行の教誡』の冒頭一序文と科文

(1b) *Namo guru deva dakini sarva siddhi hūm*

法界の虚空に智慧のマンダラが拡がった。大悲の光が世の衆生の闇を晴らす。恩あるダルメーシュヴァラ (Dharmesvara)¹⁴¹⁾ の御足に敬礼します。ド・カム東方の、誇るにたるノム (Ngom) の地域¹⁴²⁾。金の河 (Chu bo gser ldan)¹⁴³⁾ の流れる岸辺。天空・地の三角は [金剛] 亥 [母の] マンダラと等しい。王座に住するのと等しい大きな山の側に、修行処・吉祥山 (dPal ri) の頂の結界した庵 (mtshams khang) において、甘露の渦巻く木蛇年 (西暦 1665 年) の終わりから、火馬の年 (1666 年) の中頃の、幾月かの間に継続的に、洞窟の門において法を (2a) 説明してから [、修行の一座・] 一更¹⁴⁴⁾ ごとに、法の一更・所縁の一更ごとに説明したものを、浄信・精進・智慧をそなえたツォンドゥーパ (brTson 'grus pa) が、文字に書いて『山法』(Ri chos) の経函ができた。

エマホ、時ののはての比丘カルマ・チャクメー (Karma chags med)、私は広大な教義の何についても修学していないし、著作のもとの典籍を多くまとめて見ていないので、学者たちが喜ばれるタントラ本文の教証の引用はない。文法学と修辭学の修飾詞に巧みでないし、良く思惟し知を向けて書かなかったので、学者たちの悦ぶ科段・声律学はない。[諸々の] 風が中央 [脈管] に入っていないし、語の真実の言葉は成就しないから、利他の加持が生ずることは大きくない。けれども、無差別 [・一体] な上師・本尊に対して、長らく祈願して修証した力により、新 [訳・] 旧 [訳] の経

139) 一日の三坐の行のうち最後のものをいう。

140) *bDe smon phyogs bsgrigs* 版では las だが、ベチャの la を採る。

141) 授戒の師であるチュキワンチュク・チョクレナンギャル (Chos kyi dbang phyug Phyogs las rnam rgyal. 1584-1630)

142) Ngom du rung ba'i yul とある。動詞 ngom pa (誇る) と郷里 dPal yul (現在の四川省にある) に流れる河 nNgom chu (Chab mdo. 昌都で Zla chu と合流して長江となっていく)、またはそれに関する地名を掛けた表現かと思われる。

143) Chab mdo (昌都) 周辺で合流する前の呼称であろうか。ちなみに [1985] *Bod rgya tshig mdzod chen mo* では dPal yul は 'bri chul (長江) の東岸にあるとされ、この河を「金沙江」と訳している。

144) thun は修行の一座を現わす単位である。通常一日四回を数えて、一回は二時間程度と考えるといいが、長くなる場合も短くなる場合もあり一定しない。

(顯教)・真言(密教)(2b)の要の[諸々の]口訣を、鏡の映像のように意に明らかに思う。学んで受持した言葉すべては忘れたが、意味はほとんど意への領納により明らかである。口は[齒が抜けて]黒く字は黒く送ってもいなくて、法を講説し知に受持する習熟をしていないが、講説するなら無尽であり、河のようだと思う。学者が良く仰らなくて否定することはありうるが、私のような愚かな他者には益もありうる。

[科文]

(Ka) [或る人が他所へ] 求めていく疑いを表札に押しとどめる、「表札の宝鑑」がある。

(Kha) 凡人が法門に入るために、「山法の因縁・見て笑うもの」がある。

(Ga) 出離の堅固な思惟が生ずるために、「輪廻の道を捨て、多くの税を除くもの」がある。

(Ngo) 大小乗の人個々の実践を明らかにする「聖なる打木」がある。

(Ca) 三律儀を次第に受けて護りやすいために、「三律儀の護り方・日輪」がある。

(Cha) 輪廻の怖れすべてから救護するために、「帰依の教誡・怖れすべてからの救護」がある。

(Ja) およそ為すことが菩提道になるために、「発心の教誡・菩提正道」がある。

(Nya) 自他が[三]宝・[大]悲により救護されるために(3a)、「修証・救助の[大]悲の本陰」がある。

(Ta) 虚弱な病人などに益するために、「[修行の一座・] 更のとき所縁の更の障害をすべて除くもの」がある。

(Tha) 世々の業の罪障を浄化するために、「罪の浄化の教誡・甘露の水流」がある。

(Da) 困難なく福德の資糧を完成するために、「マンドラの教誡・福德の山」がある。

(Na) 加持が入り証悟が増長するために、「上師瑜伽(グルヨーガ)・加持の雨」がある。

(Pa) 淨信・証悟が生ずる仕方を知るために、「領納の跡が長い賓客の道歌」がある。

(Pha) 仏が諦でもって障害から救護するために、「慈の鎧・悲の甲」がある。

(Ba) 山々の地点のどこかを良く知る必要のために、「地勢の小観察・宝すべての集まり」がある。

(Ma) 知が小さく愚かなものが実践しやすいために、「独居修行の教誡・白の解脱道」がある。

(Tsa) 資糧を完成し、病魔を立ち去らせるために、「身体を施し我執を断つ斧」があ

る。

(Tsha) 上師・兄弟姉妹・友・施主の延命長寿のために、「寿命の吉祥を生ずる寿命運の授与」がある。

(Dza) 年齢若く苦行を欲することについて、「¹⁴⁵⁾所作〔タントラ〕・行〔タントラ〕の実践・梵〔天〕の音声」がある。

(Wa) 軌則を調合させる (3b) 印の善巧について、「ヨーガタントラの修証・悪趣の門を断つもの」がある。

(Zha) 寿命を終えた死者の障礙を浄めるために、「〔マンドラの〕南門の所縁次第・解脱道の説示」がある。

(Za) 中有が到来してから済度されるために、「中有の到来・聴聞解脱 (thos groi) の摂略」がある。

(A) 山々の盗賊の損害がないために、「無憂樹の木陰」がある。

(Ya) 信仰を具え円満を具足して障礙を浄めるために、「汚れを除き落かす方便・有縁の者が利益を具えるもの」がある。

(Ra) 有縁の者が寿命を終えて浄土を得るために、「寿命を終えて場所に引導する〔大〕悲の鉄鉤」がある。

(La) 生起次第をおもに説くマハーヨーガの宗、「本尊一般の成就・真言の雷鳴」がある。

(Sha) 供物施食を成就する品物などを揃えることについて、「相似の成就・勇者の雄叫び」がある。

(Sa) 生起次第の所縁がきわめて明瞭であることについて、「秘密の修証・智慧空行母の哀歌」がある。

(Ha) 〔円満・〕具足が少なく修証に精進することについて、「護摩・さまざまな形色をした財宝」がある。

(A) アヌヨーガのタントラ本文の実践の方便、「最上秘密の修証・大楽の最上燃照」がある。

(Ka') アティヨーガのタントラの実践の方便、「真如の成就・清浄広大」がある。

(Kha') 等持 (4a)・能力の完成、戯論に喜ばないなら、「綜合修証する如意宝珠・意楽の増長」がある。

(Ga') 縁起を身体に綜合するために、「調練¹⁴⁶⁾の本文・贍部〔洲〕の金の水がある。

145) 平松 [1982] p. 104

146) = 'phrul 'khor ツルティム、山田 [1999] の口絵参照のこと。

(Nga') 三つの根本〔加持の根本上師・成就の根本本尊・障礙から守護する根本の空行者・護法尊〕・諸尊の集まりの成就と不成就の、度量を確認する「しるしの文字・幻化¹⁴⁷⁾の鏡」がある。

(Ca') 過失無き菩提の道に入るために、「岐路の誤らない判断・道の説示」がある。

(Cha') 外・内・秘密の障害・過失を除去するために、「障害の除去の教誡・甘露の雨」がある。

(Ja') 証悟が上弦の月のように増長するために、「助力の教誡・如意宝珠」がある。

(Nya') 煩惱の五毒の障礙を断つために、「背後の〔支える〕法・毒を摧破する大孔雀」がある。

(Ta') 行動が勝者〔・仏世尊〕のお言葉と相応するために、「行動の教誡・仏子の実践」がある。

(Tha') 教えと衆生の大利益を成就するために、「衆生利益の教誡・事業の海」がある。

(Da') 仏法者の上・中・下・最低の者たちの死に方、「如意宝樹の果実」がある。

(Na') 自己がどこに往くかの目的地があるために、「国土の選択・財宝を得る船主」がある。

(Pa') 修習する暇なく死んだものについて、「国土に往く最上の駿馬〔バラハ〕¹⁴⁸⁾」というものがある。

(Pha') 死ぬとき〔深玄なる〕基底の光明が到来するために、(4b)「修証の明瞭化・王者の信書」がある。

(Ba') 仏陀の教えが盛んで広まるために、「護法神一般の成就・事業の潮流」がある。

(Ma') 護法神の事業が速やかに成就するために、「〔原本から写した〕子本・短い鎌・一切事業の成就」がある。

(Tsa') 修行すべてに障害がないために、「老いの鬼を抑える方便・草鳥（藏漢 p. 3060）の須弥山」がある。

(Tsha') 護法神が自然に取りまくために、「魂石に依る品物・腐肉の蠅輪」がある。

(Dza') 障害すべてを除去し何でも思いが成就するために、「供物の文言・天尊の財宝」がある。

(Wa') 本文と口訣の二つが調和するために、「老師（paksi）の殊勝法・マハーカーラ

147) 'khrul とあるが 'phrul と読む。

148) cf. [1985] *Bod rgya tshig mdzod chen mo*, pp. 1804 「ba la ha」の項を参照。

（最上の馬の一つ。ラクシャの島から衆生を引導する馬の王をバラハ（ba la ha）という。観自在の変化身の一つ）

母の接吻」がある。

(Zha') 富裕・権勢が間接的に増長するために、「雨衣の殊勝法・依怙主の財産の成就」がある。

(Dza') 脈・風の門から事業すべてが成就するために、「聴伝・ホダク (lHo brag) の依怙主」の教誡がある。

(A') 善根が尽きることなく蔵に隠すために、「廻向の教誡・神珠寶」がある。

(Ya') 秘密真言が乱れず加持が効能を具えるために、「単伝のウパ (Upa) [ヨーガ]・法の数をそなえたもの」がある。

[付録1] チベット浄土教典籍分類法

序論でも触れたが、チベットでの阿弥陀仏信仰は顕密の狭間に位置している。その性格を反映してか、数有るチベット浄土教典籍は、チベット仏教学の進展から幾分取り残され、目録すら存在しない状態が長らく続いてきた。しかし、近年の ACIP (Asian Classic Input Project) Release 4 には新たな文献整理方法が紹介されている。この分類は、個々の典籍や行法など未解明の部分が多いし、顕教の浄土教典籍をも密教と区別せず一つの体系におく点など (cf. S5275-17, S5275-19) 取扱いに注意を要するが、密教をも含めた様々な阿弥陀仏信仰を体系的に整理したものとして参考となるため、紹介しておきたい。

(通し番号、著者名、文献名は ACIP Release 4 に基づく。通し番号の 5000 番台、6000 番台は東北目録の番号に基づいて、さらに細分したものである。)

1. rGyud (密教)

1.1 'Od dpag med (無量光仏)

1.1.1 'Pho ba (ポワ／遷移)

S5896, Pañchen Blo bzang Chos kyi rgyal mtshan, *bCom ldan 'das 'od dpag med la britten pa'i 'pho ba bsdu pa*

S6363-5, dNgul chu Dharmabhadra, *'Pho ba bsdu pa*

1.1.2 bsTod pa (讃)

S5275-17, rJe Tsong kha pa Blo bzang grags pa, *mGon po 'od dpag med kyi bstod pa zhing mchog sgo byed*

S5275-19, rJe Tsong kha pa Blo bzang grags pa, *'Od dpag med la phyag 'tshal ba*

1.1.3 Tshe sgrub (寿命の成就)

S0092, ICang skya Ngag dbang Blo bzang chos ldan (I), *Tshe bsgrub bdud rtsi'i zil mngar*

1.1.4 Zhing khams (国土)

S0141, ICang skya Ngag dbang Blo bzang chos ldan (I), *Zhing mchog sgo 'byed kyi dmigs rim mdor bsds*

S0142, ICang skya Ngag dbang Blo bzang chos ldan (I), *bDe ba can gyi zhing du bgrod pa'i myur lam gsal bar byed pa'i sgron me*

1.2 Tshe dpag med (無量寿仏)

1.2.1 dBang (灌頂)

S6303, dNgul chu Dharmabhadra, *Grub rgyal lugs kyi tshe dpag med lha gcig bum gcig gi dbang bskur*

1.2.2 Bla ma mchod pa (師の供養)

S0317, sKyab rje Pha bong kha pa bDe chen snying po, *Zab lam bla ma mchod pa bde stong dbyer med ma dang grub rgyal lugs kyi tshe sgrub sbrags ma'i sgo nas zhing khyad par can la brtan bzhugs 'bul tshul*

1.2.3 Bla ma'i brgyud (師の伝承)

S6369-7, dNgul chu Dharmabhadra, *Tshe dpag med lha dgu'i dbang brgyud*

1.2.4 bsGom bzias (念誦)

S6363-17, dNgul chu Dharmabhadra, *rDze tā ri'i lugs kyi tshe dpag med kyi bsgom bzias mdor bsds*

1.2.5 bsTod pa (讃)

S5275-18, Je Tsong kha pa Blo bzang grags pa, *Tshe dpag med la bstod pa*

1.2.6 Tshe sgrub (寿命の成就)

S0091, ICang skya Ngag dbang Blo bzang chos ldan (I), *Tshe khrid 'chi med dga' ston*

S5919, Pañchen Blo bzang Chos kyi rgyal mtshan, *Tshe chog 'chi med 'dod 'jo dbang gi rgyal po*

S5920, Pañchen Blo bzang Chos kyi rgyal mtshan, *Tshe dbang bskur tshul 'chi med tshe'i rig 'dzin gyi dngos grub ster ba'i gdams pa*

S5977-99, Pañchen Blo bzang Chos kyi rgyal mtshan, *Tshe yi sgrub thabs*

S5977-100, Pañchen Blo bzang Chos kyi rgyal mtshan, *Yang tshe yi rig 'dzin sgrub thabs*

S5977-125, Pañchen Blo bzang Chos kyi rgyal mtshan, *Tshe dbang mdor bsds bya tshul*

S5977-126, Pañchen Blo bzang Chos kyi rgyal mtshan, *Yang tshe dbang bskur tshul mdor*

bsdus

S6301, dNgul chu Dharmabhadra, *Tshe sgrub 'khyer bde kun phan*

S6302, dNgul chu Dharmabhadra, *Tshe sgrub thun mong dang thun mong ma yin pa zab gnad can 'khyer bde kun phan*

S6363-18, dNgul chu Dharmabhadra, *Tshe sgrub 'chi med dpal ster gyi rgyun khyer*

S6369-20, dNgul chu Dharmabhadra, *Tshe sgrub 'chi med dpal ster gyi / dpal ldan grub rigs 'dzin pa nyi zla'i mtshan // zhes pa'i mjug tu gsol 'debs kha skong /*

1.3 Tshe ring mched lnga (長寿の五兄弟)

1.3.1 gTor ma (お供え)

S5977-90, Pañchen Blo bzang Chos kyi rgyal mtshan, *Tshe ring mched lnga bstan ma bcu gnyis dang bcas pa la mchod gtor 'bul ishul*

[付録2]『清浄大楽国土の誓願の弁別釈・大楽国土へ往く善き階梯』(*rNam dag bde chen zhing gi smon lam gyi 'byed 'grel bDe chen zhing du bgrod pa'i them skas bzang po*。[ラサ版]東北No. 7019 [1-82])の註釈の科文

本作の著者は、東北目録に『清浄大楽国土の誓願』(東北No. 7018 [1-17])自体と同じく Rāgasya としているが、奥書きにトゥクジェ・ジャンパン・ペルサン (Thugs rje gzhan phan dpal bzang, 生没年未詳)の著作だとする記述、本文中に先人である第三者としてのチャクメーに言及していることから、チャクメー自身の著作ではない。チャクメーの願文を引用しながら、詳しい説明や関連する叙述を加えており、価値もあると思われるが、標準的でない表記や誤字も多く、固有名詞や事蹟にも未詳のものが多いため、読解困難な箇所が少なくない。しかしこの有名な極楽願文の構造を理解するためには大いに役立つので紹介しておく。それから判明することは、チャクメーの願文は、ツェンカパの『最上国開門』と同じく、極楽往生するための四因(1. 形相をたびたび作意する, 2. 福德の資糧を積む, 3. 正覚へ発心する, 4. 善根を自他が極楽に生まれる因として廻向する)という骨格を持っていることである。そのうち、福德の資糧を積むことは、七支供養に基づいており、そのうち、瞋恚の対治一罪を懺悔する支分に関しては、四力による浄化が詳しい。仏や極楽浄土の記述に関しては〈無量寿経〉〈阿弥陀経〉に多く依っている。科文を抽出すると以下のとおりである。

(帰敬偈と著作の目的)

- 1、説明されるべきことの支分 2b4
- 2、説明されるべきことそのものの義(本文の義そのもの) 4b1
 - 1、形相をたびたび作意する 4b3
 - 1、極楽浄土を作意する 4b4
 - 2、そこにおられる勝者および仏子を作意する 6a3
 - 1、正尊を作意する 6a4
 - 2、眷属を作意する 7b3
 - 2、福德の資糧を積む 9b1
 - 1、慢の対治一礼拝の支分 9b3
 - 1、名号の別名の四つを念ずるのを通じて礼拝する 9b4
 - 1、法身無量光に礼拝する 9b4
 - 2、一切智者無量光に礼拝する 10b2
 - 3、導師無量光に礼拝する 11a3
 - 4、主無量寿に礼拝する 12b6
 - 2、名号を聞いた利徳三つを説くのを通じて礼拝する 13b1

(これらを実践する仕方) 15b6

(資糧を積むことの最初に礼拝する所縁) 16b3
 - 2、食欲の対治一供養を捧げる支分 18a3
 - 1、直接に具足した供養 18a4
 - 2、意により化作した供養 19a5
 - 3、本来成就している供養 23a4
 - 3、瞋惡の対治一罪を懺悔する支分 25b1
 - 1、対治の現行の力

十不善 31b3

 - 1、身業の三つ 31b4
 - 2、語業の四つ 37b2
 - 3、意業の三つ 39b1

(三律儀) 43b1

 - 1、別解脱戒と反したことを懺悔する 43b1
 - 2、菩薩の学処に反したことを懺悔する 43b4
 - 3、真言の誓言(三昧耶)が損なわれたこと 44b2

- 2. 能破の力 45a5
- 3. 回復の力 46a2
- 4. 依処の力 46a4
- 4. 嫉妬の対治—随喜の支分 46b3
 - 1. 理由を述べる 46b4
 - 2. 随喜そのもの 47a2
- 5. 愚癡の対治—転法輪を勧請する支分 48b1
- 6. 邪見の対治—涅槃なさないように祈願する支分 49a3
- 7. 疑の対治—善根を廻向する支分 49b4
- 3. [最上の] 正覚へ発心する 52b6
- 4. 善根を自他が極楽に生まれる因として廻向する 53a2
 - どのように廻向し、誓願するか 53a4
 - 1. おもにお顔を見ることを誓願する 53a6
 - 2. その妨げ—貪りの執着を断つのを誓願する 56b1
 - 3. 後〔生〕をおもに誓願する 62b6
 - 1. そのもの 63a1
 - 2. 国土の莊嚴をおもに誓願する 66b5
 - 3. 勝者の意趣を完成させることを誓願する 72a4
 - 4. 最後に御心を満了させる仏を得ることを誓願する 77a5
 - 4. 当面の欲する対象について誓願する 77b4
 - 5. ついでに終わりに為すべきことを説く 78a4
- [終結] 80a5

チャクメーの極樂願文にはもう一つラクラ・ソナムチュードゥッ (*Glag bla bSod nams chos 'grub*, 1862-1944) による註釈『大樂国土誓願の復注 —解脱道を照らすもの (太陽) — *rNam dag bde ba chen zhing gi smon lam gyi 'grel bshad* — *Thar lam snang byed*—』がある。この註はチャクメーの願文に対して非常に詳しい説明を加えているが、引用している話からして、上記の『清浄大樂国土の誓願の弁別釈・大樂国土へ往く善き階梯』を参照していると思われる。この註釈の科文を *bDe smon phyogs bsgrigs smad* (四川民族出版社, pp. 1-317, 1994) より抽出すると次のとおりである。

本文の意味を説明する p. 3

科段第一 法を講説することの支分を説明する p. 3

1. 法の聴聞者もまた聴聞する仕方が重要だと説く p. 3
1. 善根が方便により支えられた加行・勝れた発心 p. 6
2. 善が縁により滅しない本行・勝れた無縁 p. 10
3. 善が増長する終わり・勝れた廻向 p. 20

科段第二 聴聞されるべき法そのものを説明する p. 22

1. 意欲を生じさせるのを通じて実践することを勉める p. 23
2. 誓願の本文そのものを説明する p. 24
 1. 極楽に生まれる〔ための〕四つの因を成就するのを通じて広積する p. 25
 1. 第一の因 所依の資糧田を明確化する p. 26
 1. 所依の国土の形相を作意する p. 26
 2. 能依の仏および眷属を作意する p. 30
 1. 正尊の身の形相を作意する p. 31
 2. 心の功德を作意する p. 34
 3. 眷属の正尊を作意する p. 35
 4. 他の眷属を作意する p. 37
 2. 第二の因 資糧を積み障礙を淨化する p. 42
 1. 慢の対治 礼拝の支分 p. 43
 1. 略説する p. 43
 2. 広積する p. 45
 1. 名号の別名を作意して礼拝する p. 45
 2. 名号を受持したことの利徳を思惟して礼拝する p. 56
 2. 慳または貪の対治 供養を捧げる支分 p. 69
 1. 物品の具足〔をもって〕の供養 p. 69
 2. 意の化作〔をもって〕の供養 p. 71
 3. 本来成就した供養 p. 75
 3. 癡の対治 罪の懺悔の支分 p. 102
 1. 対治の現行の力により懺悔する p. 103
 1. 十不善業を為した罪を懺悔する p. 103
 2. 過患がきわめて大きい五無間業を無した罪を懺悔する p. 173
 3. 五近無間業を無した罪を懺悔する p. 183

- 1、法を捨てる悪業を積んだ罪を懺悔する p. 190
- 2、菩薩を誹謗する罪過を懺悔する p. 195
- 3、罪の悪見を懺悔する p. 203
- 4、遮罪の墮の罪を懺悔する p. 209
 - 1、別解脱の遮罪の墮を懺悔する p. 209
 - 2、菩薩の墮を懺悔する p. 211
 - 3、秘密真言の誓言を損なったことを懺悔する p. 213
 - 4、自性罪を知らないことを懺悔する p. 215
 - 5、知った遮罪の墮を懺悔する p. 221
- 2、能破の現行の力 p. 223
- 3、回復の力 p. 224
- 4、依処の力 p. 225
- 4、嫉の対治 随喜の支分 p. 228
 - 1、嫉を捨てることの利徳を通じて説く p. 228
 - 2、有漏の善に随喜する p. 229
 - 3、大乘の善に随喜する p. 230
 - 4、命の救護など特定の十善を説く p. 231
- 5、法を捨てることの対治 法輪〔を転ずる〕を請う支分 p. 241
- 6、邪見の対治 涅槃しないことを祈願する支分 p. 242
- 7、疑の対治、廻向の支分 p. 244
 - 1、究竟の、一切衆生が仏を得るために廻向する p. 244
 - 2、当面の、利他が成就する因として誓願する p. 245
- 3、第三の因 助力の最上菩提への発心 p. 250
- 4、第四の因 縁の正しい誓願、すべての善根を自他が極楽に生まれるために廻向する p. 252
 - 1、臨終に無量光のお顔を見ることを誓願する p. 253
 - 1、死後に極楽へ生まれることの妨げ、輪廻への執着を断つことを誓願する p. 257
 - 1、多くの侵害の苦を思惟する p. 257
 - 2、天と人の苦を特別に説明する p. 263
 - 3、そのように執着を断って極楽に往くさま p. 273
 - 4、往ってから功德を得るさまについて誓願する p. 274

5. そこに住しながら他の国土の多くの仏菩薩と会って法を聴聞すること
を誓願する p. 279
6. 清浄の他の国土へ往くことを誓願する p. 280
7. 不浄の国土の教化対象者について誓願する p. 282
2. 国土の莊嚴を作意して誓願する p. 288
 1. 概説する p. 288
 2. 清浄な器〔世間〕、大地の功德 p. 289
 3. 樹木の功德 p. 290
 4. 水と蓮華の功德 p. 291
 5. 有情〔世間〕の功德 p. 292
 6. 国土の正尊の功德を作意して、侍奉、持教などすることを誓願する
p. 297
2. 仏の名号を受持したことの利徳を説明するのを通じて、結論する p. 301
3. 誓願の成就を助ける諦語の受持、真言による加持 p. 310

[参考文献]

荒井裕明

- ・『大乘莊嚴經論』（『新国訳大蔵經』瑜伽・唯識部 12）、大蔵出版、1993 年

池田澄達

- ・「梵本アパリミターニル陀羅尼經の校合」（『宗教研究』1-3、1916 年）

石濱裕美子

- ・『トッカン『一切宗義』ゲルク派の章』（『西藏仏教宗義研究 7』）、東洋文庫、1995 年

入澤崇

- ・「鬼神の仏教—護法神執金剛と菩薩金剛手」（『印度学仏教学研究』65（33-1）、1984）

宇治谷祐顕

- ・『悲華經の研究』、文光堂、1969 年
- ・「悲華經の浄土」（『仏教における浄土思想』、日本仏教学会編、平楽寺書店、1977 年）

瓜生津隆真

- ・『龍樹論集』（『大乘仏典』14）、中央公論社、1974 年

大谷大学図書館

- ・編『大谷大学図書館蔵 西藏大蔵經甘珠爾勘当目録』、1930-1932 年

大塚伸夫

- ・『『大日経』における三密思想について』（『叢山教学大会紀要』14、1986 年）
- ・「初期密教行者の修行場所をめぐって —『蘇婆呼童子請問經』を中心として—」（『叢山

教学大会紀要』29, 2001年)

小谷信千代

- ・『仏教瑜伽行思想の研究』、文栄堂、1991年
- ・『龍樹・世親・チベットの浄土教・慧遠』(『浄土仏教の思想』3)、講談社、1993年

小野田俊蔵

- ・「チベット撰述の浄土教仏典」(『佛教大学大学院研究紀要』7、1979年)
- ・「フォンカバ造『最上国開門』試訳 ―チベットに於ける本願思想受容の一例として―」(『仏教文化研究』27、1981年)
- ・「『阿弥陀鼓音声陀羅尼經』に基づく西藏曼荼羅」(『日本仏教学会年報』52、1987年)
- ・『西藏仏教の浄土教理解』(『現代における法然浄土教思想信仰の解明』、浄土宗総合研究所、2000年)
- ・『藏訳無量寿經ウランパートル写本』(『印度学仏教学研究』52-1、2003年)

香川孝雄

- ・『無量寿經の諸本対照研究』、永田文昌堂、1984年

梶濱亮俊

- ・『チベットの浄土思想の研究』、永田文昌堂、2002年

梶山雄一

- ・『龍樹論集』(『大乘仏典』14)、中央公論社、1974年
- ・監修『華嚴經入法界品 ―さとりの遍歴― 上』、中央公論社、1994年

金子英一

- ・『古タントラ全集解題目録』、図書刊行会、1982年

鎌田茂雄

- ・編『大藏經全解説事典』、雄山閣出版、1998年

辛嶋静志

- ・『大阿弥陀經』訳注(一)』(『佛教大学総合研究所紀要』6、1999年)

川崎信定

- ・「チベット仏教における成仏の理解 ―仏伝十二相をめぐる―」(『玉城康四郎博士還暦記念論集 仏の研究』、春秋社、1977年)

河村孝昭

- ・編『大藏經全解説事典』、雄山閣出版、1998年

北畠利親

- ・『龍樹の書簡』、永田文昌堂、1985年

北村太道

- ・『チベット語和訳 大日経略釈』、文政堂、1980年
- ・『フォンカバ著 ―チベット密教実践入門― 吉祥秘密集会成就法清浄瑜伽次第』、永田文昌堂、1995年

紀野一義

- ・『浄土三部經 上』、岩波文庫、1963年

木村高尉

- ・『六字真言をめぐる ―ṣaḍakṣari-mahāvidyārājñi―』(『豊山教学大会紀要』15, 1987年)

雲井昭善

- ・『末米のほとけ ―弥勒経典に聞く―』, 創教出版, 1992年

クンチョック・シタル

- ・『実践・チベット仏教入門』, 春秋社, 1995年

斎藤昭俊

- ・編『東洋仏教人名事典』, 新人物往来社, 1989年

齋藤保高

- ・『実践・チベット仏教入門』, 春秋社, 1995年

酒井真典

- ・『大日経の成立に関する研究』, 高野山出版社, 1962年
- ・『修訂大日経の成立に関する研究』, 国書刊行会, 1987年
- ・『酒井真典著作集 第二巻 大日経広釈全訳』, 法蔵館, 1987年
- ・『無上瑜伽タントラ義入と名づくるもの』(『酒井真典著作集 第四巻 後期密教』, 法蔵館, 1988年)

神亮三郎

- ・編『梵蔵漢和四訳対校 翻訳名義大集』, 国書刊行会, 1981年

佐久間留理子

- ・『カサルバナ世自在成就法の和訳・解釈』(『南都仏教』71, 1995年)
- ・『六字世自在成就法の研究』(『東海仏教』41, 1996年)

桜部建

- ・『龍樹・世親・チベットの浄土教・慧遠』(『浄土仏教の思想』3), 講談社, 1993年

定方晟

- ・『インド宇宙誌』, 春秋社, 1984年

浄土宗開宗八百年記念慶讃準備局

- ・『浄土宗全書』23, 山喜房仏書林, 1972年

菅沼晃

- ・『釈尊とシェン・ラブ』(『釈尊観』, 日本仏教学会編, 平楽寺書店, 1985年)

ソナム・ギャルツェン・ゴンタ

- ・『実践・チベット仏教入門』, 春秋社, 1995年

高田仁覚

- ・『インド・チベット真言密教の研究』, 密教学術振興会, 1978年

高橋尚夫

- ・『薬師如来の大願と真言について』(『大正大学研究論叢』12, 2005年)

武内紹晃

- ・『龍樹・世親・チベットの浄土教・慧遠』(『浄土仏教の思想』3), 講談社, 1993年

立川武蔵

- ・『トッカン『一切宗義』サキヤ派の章』(『西藏仏教宗義研究1』), 東洋文庫, 1974年

- ・『トッカン『一切宗義』カギユ派の章』(『西藏仏教宗義研究5』), 東洋文庫, 1987年
- ・『トッカン『一切宗義』ゲルク派の章』(『西藏仏教宗義研究7』), 東洋文庫, 1995年

田中公明

- ・『チベット密教』, 春秋社, 1993年
- ・『超密教時輪タントラ』, 東方出版, 1994年
- ・『性と死の密教』, 春秋社, 1997年
- ・『チベット密教・成就の秘法 ―ニツマ派総本山ミンドゥルリン寺制定・常用經典集―』, 大法輪閣, 2001年

田村智淳

- ・『三昧王経 I』(『大乘仏典』10), 中央公論社, 1975年

丹治昭義

- ・『法華経 I』(『大乘仏典』4), 中央公論社, 1975年

津田真一

- ・『反密教学』, リプロボート, 1987年

ソルティム・ケサン

- ・『仏教瑜伽行思想の研究』, 文栄堂, 1991年
- ・『龍樹・世親・チベットの浄土教・慧遠』(『浄土仏教の思想』3), 講談社, 1993年
- ・『ツォンカバ著 ―チベット密教実践入門― 吉祥秘密集集成就法清浄瑜伽次第』, 永田文昌堂, 1995年
- ・『ツォンカバ チベットの密教ヨーガ』, 文栄堂, 1999年
- ・『中観哲学の研究 III』, 文栄堂, 2001年
- ・『中観哲学の研究 IV』, 文栄堂, 2003年
- ・*rje Tsong kha pa'i Lam rim chen mo'i Lung khung gsal byed nyi ma*, Kyoto, 2004

中尾良信

- ・編『大蔵経全解説事典』, 雄山閣出版, 1998年

長尾雅人

- ・『法華経 I』(『大乘仏典』4), 中央公論社, 1975年

中御門敬教

- ・Amitābha cult in *Bhadracāṣṭrasaṃgrahaṇarāja* (『印度学仏教学研究』52-1, 2003年)
- ・「チベットにおける阿弥陀仏信仰の形態 ―阿弥陀仏に関するダライラマ七世の信仰と実践―」(『佛教大学総合研究所紀要』10, 2003年)
- ・「往生後論攷」(『高橋弘次先生古稀記念論文集 浄土学仏教学論叢』, 山喜房仏書林, 2004年)
- ・「阿弥陀仏に関するシターリの信仰と実践 ―「鼓音声ダラニ」「宗要経」からの流れ・ダツェバの儀軌を参照して―」(『佛教大学総合研究所紀要』11, 2004年)

中村瑞隆

- ・「大乘密教経に説く密厳浄土」(『仏教における浄土思想』, 日本仏教学会編, 平楽寺書店, 1977年)
- ・『法華経 上』, 春秋社, 1995年

中村元

- ・『浄土三部経 上』, 岩波文庫, 1963 年

西尾京雄

- ・編『梵藏漢和四訳対校 翻訳名義大集』, 国書刊行会, 1981 年

西岡祖秀

- ・『トッカン『一切宗義』シチェ派の章』(『西藏仏教宗義研究 2』), 東洋文庫, 1978 年

袴谷憲昭

- ・『大乘莊嚴經論』(『新国訳大蔵経』瑜伽・唯識部 12), 大蔵出版, 1993 年

羽田野伯猷

- ・『チベット・インド学集成 第三巻 インド篇 1』, 法蔵館, 1987 年

早島鏡正

- ・『浄土三部経 上』, 岩波文庫, 1963 年

兵藤一夫

- ・『般若経釈 現觀莊嚴論の研究』, 文栄堂, 2000 年

平松敏雄

- ・『トッカン『一切宗義』ニンマ派の章』(『西藏仏教宗義研究 3』), 東洋文庫, 1982 年

佛教大学総合研究所「浄土教の総合的研究」研究班

- ・編『蔵訳無量寿経異本校合表(稿本)』, 1999 年

福田亮成

- ・編『大蔵経全解説事典』, 雄山閣出版, 1998 年

福田淳一

- ・『トッカン『一切宗義』ゲルク派の章』(『西藏仏教宗義研究 7』), 東洋文庫, 1995 年

藤仲孝司

- ・『中観哲学の研究 III』, 文栄堂, 2001 年
- ・『中観哲学の研究 IV』, 文栄堂, 2003 年
- ・「チベットにおける阿弥陀仏信仰の形態 ―阿弥陀仏に関するダライラマ七世の信仰と実践―」(『佛教大学総合研究所紀要』10, 2003 年)
- ・「阿弥陀仏に関するジターリの信仰と実践 ―「教音声ダラニ」「宗要経」からの流れ・ダツェパの儀軌を参照して―」(『佛教大学総合研究所紀要』11, 2004 年)

舟橋一哉

- ・『俱舎論の原典解明 世間品』, 法蔵館, 1955 年

松蔭誠廉

- ・『法華経 I』(『大乘仏典』4), 中央公論社, 1975 年

御牧克己

- ・「チベット学に於ける原典研究の意義 ―『宗義の水晶鏡』『ボン教』章の翻訳をめぐる―」(平成 10 年度～14 年度 文部科学省科学研究費補助金 特定領域研究 (A) 118「古典学の再構築」研究成果報告集 2 A01「原典」班研究報告『論集「原典」』, 2003 年)

宮崎泉

- ・「アティシャの家族に関する記述について ―『中観優波提舍開宝篋』と『菩提心釈』の

引用をめぐって―」(『日本仏教学会年報』69, 2004 年)

宗川宗満

- ・『完全清浄極楽国土誓願』(『今岡教授還暦記念論文集』(『浄土学』5, 6, 1933 年)

山口瑞鳳

- ・『チベット下』, 東京大学出版会, 1988 年

山口益

- ・『俱舍論の原典解明 世間品』, 法蔵館, 1955 年

山田哲也

- ・『フオンカバ チベットの密教ヨーガ』, 文栄堂, 1999 年

吉元儒行

- ・編『大蔵経全解説事典』, 雄山閣出版, 1998 年

頼富本宏

- ・『密教仏の研究』, 法蔵館, 1990 年
- ・『中国密教』(『大乘仏典 中国・日本篇』8), 中央公論社, 1988 年

李載昌

- ・編『東洋仏教人名事典』, 新人物往来社, 1989 年

渡辺昭宏

- ・『愛と平和の象徴・弥勒経』(『現代人の仏教8』), 筑摩書房, 1966 年(再録[1982]『渡辺昭宏著作集』3, 筑摩書房)

渡辺章悟

- ・『大般若と理趣分のすべて』, 溪木社, 1995

Alex Wayman

- ・*Mkhas grub rje's Fundamentals of the Buddhist Tantras*, Hague, 1968

A. M. Blondeau

- ・“Analysis of the Biographies of Padmasambhava according to Tibetan tradition: classification of Sources” (M. Aris and Aung San Sū kyi eds. *Tibetan Studies in Honour of Hugh Richardson*. Warminster: Aris and Phillips, 1980)

Bunyu Nanjio

- ・*Saddharmapundarika*, 名著普及会(再出), 1977

bs'tan 'dzin chos grags

- ・ed., *Gangs ljongs lo rgyus thog gi grags can mi sna*, 西藏人民出版社, 1993

Dudjom Rinpoche

- ・*The Nyingma School of Tibetan Buddhism I: The Translation*, Wisdom Publication, Boston, 1991

Don rdor

- ・ed., *Gangs ljongs lo rgyus thog gi grags can mi sna*, 西藏人民出版社, 1993

E. Obermiller

- ・*History of Bhuddhism (Chos-hbyung) by Bu-ston 1. part*, Heidelberg, 1931
- ・*History of Bhuddhism (Chos-hbyung) by Bu-ston 2. part*, Heidelberg, 1931

Ferdinand D. Lessing

- *Mkhas grub rje's Fundamentals of the Buddhist Tantras*, Hague, 1968

George N. Roerich

- *The Blue Annals* Part 1, Royal Asiatic Society of Bengal, Calcutta, 1949
- *The Blue Annals* Part 2, Royal Asiatic Society of Bengal, Calcutta, 1953

Gyurme Dorje

- *The Nyingma School of Tibetan Buddhism II: Reference materials*, Wisdom Publication, Boston, 1991

G. Tucci, trans. by G. Samuel

- *The Religions of Tibet*, University of California, 1980

H. Kern

- *Saddharmapundarika*, 名著普及会 (再出), 1977

Isshi Yamada

- *Karunāpundarika volume 2*, London, 1968

J. Gyatso

- "A Preliminary study of the Gcod tradition" (B. N. Aziz and M. Kapstein eds. *Soundings in Tibetan Civilization*. New Delhi, Manohar, 1985)

Khenpo Sonam Gyasto

- ed., *The Jewel Ornament of Liberation* by Gampopa Sonam Rinchen. (The Dalai Lama 'Tibeto-Indological Series 26, Central Institute of Higher Tibetan Studies, Sarnah Varanasi, 1999)

Krang dbyi sun

- *Bod rgya tshig mdzod chen mo* (藏漢大辭典), 民族出版社, 1985

Matthew Kapstein

- *The Nyingma School of Tibetan Buddhism II: Reference materials*, Wisdom Publication, Boston, 1991

Paul M. Harrison

- *The Tibetan Text of the Pratyutpanna-buddha-sammukhāvasthita-samādhi-sūtra*, Tokyo, 1978

Peter Schwieger

- *Ein tibetisches Wunschgebet um Wiedergeburt in der Sukhāvati*, St. Augustin, 1978

P. L. Vaidya

- *Samādhirājasūtram*, *Buddhist Sanskrit Texts*, No. 2, 1961

U. Wogihara

- *Abhisamayālamkāraśloka Prajñāpāramitāvyākhyā The work of Haribhadra*, The Toyo Bunko, 1932 (1973 年, 山崎房仏書林より再出)

Wang dbyi non,

- *Sangs rgyas chos gzhung gi tshig mdzod* (佛学词典), 青海民族社出版, 1992
- *The Life and Liberation of Padmasambhava Padma bKa'i Thang Part I, II*: Tibet As recorded by Yeshe Tsogyal, Rediscovered by 'Terchen Urgyan Lingpa, Translated into French as *Le Diet de Padma* by Gustave-Charles Toussaint, Translated into English by Kenneth Douglas and

Gwendolyn Bays, Corrected With the Original Tibetan Manuscripts and with an Introduction by Tarthang Tulku (Dharma Publishing, Berkeley), 1978

- The Venerable Tsering Lama Jampal Zangpo, Translated by Sangye Khandro, *A Garland of Immortal Wish-Fulfilling Trees*, Ithaca, New York, 1988
- *Masters of Nyingma Lineage*, Crystal Mirror Series Vol. 11, Dharma Publishing, Berkeley, 1995

更登

- 編 *Deb ther sngon po* (stod cha, smad cha), 四川民族出版社, 1985

戴作民

- 編 *Deb ther sngon po* (stod cha, smad cha), 四川民族出版社, 1985

(付記) 本稿は中御門敬教氏との共同研究の成果です。また本文の難解な箇所について、大谷大学ツルティム・ケサン先生に御教示を頂きました。ここに謝意を表します。